
シフト

鳩梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シフト

【Nコード】

N2721B

【作者名】

鳩梨

【あらすじ】

個性豊かな少女達のおりなす、ほのぼの学園百合コメディー！

早速帰りたい

「ここ、かあ」

思わず、おお……と言ってしまうほどの外観だ。やー、大きいなあ。

おっと、自己紹介しとこうか。あたし、椎本^{シイモト} 苑^{ソノ}。16歳の可愛い女の子さ。今日から鬱陶しい親父と兄貴から解放されての一人暮らし。

——だったはずなのに何でか寄宿舎で共同生活とか言う親と暮らすより面倒なことをせにやならなくなったのだ。

なんでかって？そりゃ鬱陶しいまでに過保護な親と兄があたしの知らないうちにその手続きを勝手に済ませてたからさ。しかも取り消しは出来ないときた。いやあ、笑っちゃうね。あははは。くたばれクソオヤジにクソ兄貴！

——だーれに言ってるんだろう。

はあ。何時までもこんなアホの子みたいにしててもしよーがないや。さっさと挨拶に行くか。

そう考えてよいしょ、と重たいバッグを肩に担ぐ。かさばるものは全部郵送したけど、他のはバッグに詰め込んだ。なんたって寄宿舎暮らしになるなんて昨日聞いたばかりだ。しかも入学の一週間前に入舎とかなきやいけないなんて。だから今日慌てて荷造りして送った。荷物が届くのは二日か三日くらいしてからだろう。だから服や下着やはバッグに詰め込んで手運び。もお、重いつたら。

あたしは来週からこの女子高に通うことになる。この学校は昔はいいところのお嬢様ばかりが通うような『純粹培養お嬢様製造工場』だったらしいが、この不景気なご時世、そんなことを未だにやってたら即死だ。なので、普通よりも高級感漂う敷居高げな学校が今の姿だ。過去の栄華も今は昔。

さて、あたしがここを選んだ理由はすんごい簡単。家から遠くて、野郎が居ないから。本当ならここに一人暮らしができる♪ってのが入る予定だったんだけど、過保護すぎる家族のせいで消滅した。ホントにどうにかなればいいのに。切れ痔になくれ！

ほかでかくて高級感溢れる、なんだかよくわからない細工の施された門をくぐり、敷地内に入った。入ったはいいのだが……。

「ここはどこ？」

あたしはおやくそくのように早速そう呟いた。さすが、広い。広大だ。迷子になっちゃったよ。迷子センターは何処だろうか。

そんなことを思いながら、重い荷物を肩に、適当にぶらぶらしてたら人を発見。これ幸いとばかりに駆け寄る。

んで。駆け寄って、後悔した。回れ右して全速力で逃げたいけど、そんなことしたら孤独な迷子の旅を再開しなくちゃなくなる。さすがにそれは勘弁したい。

「晶さまあ、たまには晶さまのお部屋に……」

「だーめ。あそこはあなたのテリトリーではないでしょ？」

「……はーい」

「ん。いい子ね」

……………。

何だこの光景。

いや、思ったよ？何であんな所に座ってるのさ、とか。けどさ、いい感じに大きな木だし、優雅に陽だまりで読書中とか思ったのよ。だって、仮にもお嬢様学校だし。

けどさ、この光景は何よ。

緑の葉が生い茂る木陰で、座っている二人の少女。いや、座ってるのは一人だけで、もう一人は膝の上で主人にじゃれつく犬みたいにしなだれかかっている。しかも、交わされる会話がさっきのあれだよ。え？なに？ここはそういうところなの？

「あら？」

「うげ……」

ポケットと突っ立てたのがまずかったらしい。目が合った。しかも、「うげ」とか言っちゃったよ。小さい声だったからわかんないと思うけど。

「どうかしたのかしら？」

うわあ。同年代くらいの子がこんな丁寧な口調なのは初めてだ。なんだか変な感じだ。気持ち悪いって言うか、くすぐったいって言うか。

まあ、いいや。正直に迷子になったことを言って目的地の場所を聞こう、そしてさっさと退散しよう。

あたしはそう思い、一応背筋を伸ばして行儀よくする。言葉使いも丁寧なものにする。普段使い慣れないから、ちよつと苦心する。

「あの、寄宿舎はどちらでしようか？」

「あら、あなた外部からの新入生？」

外部？なんだろ。なんか引かかる言い方だ。

「ええ、まあ、そうです」

「そう。寄宿舎はこっちじゃないわよ」

「え！？そうなんですか？」

うわあ。恥ずかしい。てことはあたしは寄宿舎を求め延々と違う所を歩いていたと。まぬけだあ。

「ええ。……そうだわ。わたしが連れて行ってあげましょうか？」

え。！？

「い、いや、いいですよ。場所を教えてくださいればそれで」

冗談じゃない。こんなとち狂ったとしか思えないようなことをしてる人と一緒に居たくはない。たとえその結果、無事に目的地につけるのだとしても！

「けれど、また迷っちゃうかもしれないでしょう？いいのよ、遠慮しなくて」

違う違う。遠慮してない。本気で御免被りただって。ああ、しかもちよつと、なに。その犬少女（仮）なんで睨んでくるの！別にあたしは悪いことしてないでしょう！？何でそんなに睨んでくるの

よ。あたしにそんな趣味はないから！

「こーら。ユキ、そんなふうに睨んじゃダメよ」

「だって……」

「すねないの。あとでうんと可愛がってあげるから」

「ほんとう！？ 晶さま！！」

「ええ。わたしが嘘をついたことがあって？」

「ううん！ じゃあ、ユキ、おとなしく待ってる」

「いい子ね」

だから。なんなんのこの空間は。この状況は。あたし、入る学校間違えた？ なに？ 可愛がってあげるって。

「それじゃあ、いきましようか」

「はい？」

「寄宿舍はこっちょよ」

ちよつとちよつと。何で当事者を置いてけぼりで勝手にさくさく決めてるのさ。あたしは場所を教えてもらえればそれで良いんだってばっ！

アキラさん——とか言うらしい——はあたしの手を自然に掴んで歩いていく。抵抗したいはずなのに抵抗しない自分に首を捻りつつ、あたしは寄宿舍へと連行された。

普通の学校でありますように、この二人だけが特殊でありますようにと本気で願った。信じてやるから聞き届けろ神様！

そんな風に思ったのがいけなかったのかもしれない。お空の上に居る髭のアンチクショウは、願いを裏切りやがった。

それを知るのはそう先ではない。

———嗚呼、嫌だ。

なんだか

「わたしは、水宮晶^{ミズミザキラ}っていうの。あなたは？」

「椎本苑」

「ソノ？ 変わった名前ね。なんて書くの？ 花園の園？」

「墓苑の苑」

「紫苑の苑ね。「苑」だけで独立した名前なんて、なかなかセンスのいい親御さんね」

「……そうですか？」

「………なくんであたしは普通に会話してるんだろ。」

あたしは寄宿舎からよほど外れた道を歩いていたらしく、かれこれ20分くらい歩いている。そろそろ疲れてきた。重い肩掛け鞆を捨てたくなる。円盤投げみたいにぐるぐる回してから放り投げたら、きっと気持ちいいくらいに良く飛ぶだろうなあ。——しないけどさ。

「あの、寄宿舎ってまだなんですか？」

「もう少ししょ」

もう少ししか。なんだかアバウトだな。けどま、ガンバレあたし。にしても、ホントに広いなあ。秘密基地とか探したらありそうだ。こう、がーってグラウンドが開いて、中からぐおーってメカが出てきて、ぎゅおーんと発進して、じゃきーんと合体！

「——ソノちゃん？」

「地球の平和は俺が守る！」

「………え？」

とか叫びながら、敵のどういう原理で生息してんだかよくわからないトンデモ怪獣を、必殺技とかを叫びながら一刀両断！——どうでもいいけど、直剣とかだとあそこまで華麗には切れないんじゃないかな？ てかロボットもロボットだよ。なんであんな細い足でクソ重そうな身体を支えられるんだ？ 絶対自重でどぐしゃあ、とかなるって。

「ソノちゃん！」

「うえあ！なに！？」

いきなり結構な大声でそお呼ばれたことに、何事？もしや敵襲？とか思考を引きづりながら見れば、そこにはなんだか不機嫌と心配を6・4で顔に張り付かせているアキラさんが。

「わたしの話、聞いてた？」

いいえ。全然。

「聞いてましたよ。たしか秘密基地があるんですよ。わあ、新入生でも防衛隊に入隊可能ですか？」

聞いてないとも言えないので、この際だから思考してた事柄をずるずる引き摺って話してみる。おお、アキラさんが？マークを乱舞させている。さすがはお嬢様（多分）。あたしが何を言ってるのかわかっていない。わかっていたらいたで、なんか嫌だ。

「何を言ってるのかはわからないけど……。聞いてなかったのね？」

「あ、うー……はい。すいません」

「いいのよ。気にしないで。今度ゆっくりと話すことにするわね」
なにを？

「さあ、ついたわ。ここが寄宿舍よ」

「うわあ……」

思わず、そんな感嘆の声が漏れた。

寄宿舍は中世で貴族の館だった。赤レンガの外観。派手にならない程度の細かな装飾。大きな扉。紳士や淑女が出てきても驚かないな。これだと。むしろ出て来い。羽扇子を持った金ぴか巻き毛のドレスきたマダムとか。カイゼルヒゲの素適な白タキシードの紳士とか。出て来い。出てきてっ！

「ふふ。気に入ってくれたかしら？」

「はいっ！　すごいですね。これで蔦が絡まったら回れ右して逃げますけど」

「あら？　ホラーはお嫌い？」

「怖いのは、ちょっと……」

んん？　なんであたしは自分の弱点をあっさりと教えてるんだろ

う。このことを知っているのは……おや？ 思い返すと割と皆知っているような気がする。あれれ？ あたしそういうのはかなり必死に隠すほうなんだけど。あれー？

そんなことを思っていると、アキラさんはこっちよ、と微笑みながら大きな扉とは違う方向、館の裏へと回った。

「寮母室にはね、裏口から入る決まりなの」

「そうなんですか」

なんだか面倒な決まり事だなあ。それじゃあ何かあったときも、わざわざ外に出て裏口に回らなきゃいけないの？ もし一刻を争う事態だったらどうするのさ。

そんなことを思っていると、これまた金のかかっているような重厚な木の扉の前についた。

「六年Sクラス、水宮晶です。外部受験の新生をお連れしました」
六年？

そう首を傾げたがどうせ後でわかるさ、と気にしなかった。それよりも外部受験と言うやたら外部を強調するその言い方が気になった。なんだろう？ 疎外感を与える精神攻撃か？

「はいはい。入ってらっしゃい」

扉越しだからだろうか、中からくぐもった女性の声が聞こえた。とても優しそうで、暖かみのある声だった。

アキラさんが失礼します、と行儀よくお辞儀をしてから入室したので、あたしもそれに倣って入室する。曲げる腰の角度は75度だっけ？

寮母室はものすごい質素だった。テーブルと椅子と筆筒しかない。この三つだけだ。後は備え付けの家具がちらほら。

「水宮さん。ご苦労様」

「いいえ」

「けれど、早速手を出しちゃダメよ？ ただでさえ貴女は“オンナオオカミ”って言われてるんだから」
なんですよ？

「もお、やめてくださいよ。ソノちゃんがビクリしてるじゃありませんか」

そりゃビクリもするわ。なにさ“オンナオオカミ”って。ここは女子校でしょ。なに？やっぱアキラさんはそういう趣味で世界な住人さん？うわ、やっぱ距離をおこう。あたしにその気はない。ノーマルだと言い張る気もないが、だからって断じて同性愛者などではない。

……おや？この考えだと一生独身か、あたし。

「まあ。もう名前と呼んでいるのね。“オオカミ”さんは手が早い
のね」

「茶化さないで下さい。ここでは名字で呼ぶのは禁止されてますで
しょう？」

「あら？そうだったかしら」

苦笑気味にそう言ったアキラさんに、そう言っ
て寮母さんは口元に手を当ててコロコロと笑った。

寮母さんは40代くらいのおばちゃん
で、やさしそうな印象の人だった。どうでも
いいけど、あたしは放置ですか？

「あの……」

そう思っ
て控えめに声をかけた。ここで「おうこ
ら無視すんなや！」とか言えたら確
実に印象に残るんだろうけど、いかん
せん、さすがのあたしも初っ端から
そんな暴挙に出るようなフロン
ティアスピリッツは持ち合わせて
いない。もってたら絶対にや
ると思う。……嘘だけだね。き
つと多分。

「あらあら。ごめんなさいね。え
っと、椎本苑さん、だったわ
よね」「はい」

「ようこそ、当学園へ。歓迎する
わ。この寄宿舎の寮母をしていま
す、迫京です。気軽に、お京さん
って呼んでね？」

結構とっつきやすい人みたいだ。
お京さんはそう言う
と微笑んだ。うん。嫌い
じゃない。こう言う人は割と好きだ。
たまに雑談とかし
に来るのもいいかもしれない。

「細かい規則や諸注意は、生徒手帳にも書いてあるし、省くわね」
実を言うと、私も覚えていないのよ。といたずらっぽく笑った。
そんな仕草や喋り方が、お京さんを見た目よりも若く見せる。アキラさんも苦笑していた。

「ああ、けれど。これだけは守ってね。ここは門限が厳しいから、6・30までに自室に戻っていないと罰則がつくわ」
うげ。なにそれ。早すぎない？

「それにね」

まだあるの？

あたしは相当嫌な顔をしたのだろう。アキラさんに肘でつつかれた。

「長期休暇中の二週間の帰省以外は、特別な理由がない限り外出は禁止されますから」

うえ！？ な、なにそれ？

「――その特別な理由も一年に二回受理されればいいほうだから」
ほら！ ほら！！ だから嫌なんだ。誰かと一緒に生活するなんてのは！ ましてや寮とか寄宿舎とか！ ああもお、あんのクソ野郎どもめ！ この恨み、晴らさでおくべきか……！！？

とりあえず、呪い電波を送信。ぴぴぴー。食中毒になれ。ぴぴぴー。

「ちょ、ちょっと。ソノちゃん？」

「……あんですか？」

女の子の声とは思えないような、思いたくないようなおどろおどろしい、重低音があたしの口から出てきた。我ながらビクリ☆
あたしのその声と、きっともわもわ出ているのだろう殺気めいた黒いオーラに、アキラさんは引きつった笑顔で引いていた。ちよいと心外。

「それで、苑さんのお部屋は」

そんな中でも説明を続けるお京さん。かなりマイペースな人だな。さすがに年季の入った人は違う。

そんな女性に対して失礼な事を考えながら適当に話を聞いていた。
「――308。全階八部屋だから一番端っこね」

おお。なかなかの場所じゃないか。あたしは席順にしる部屋順にしる『端』が好きだった。別にたいした理由はない。ただ、挟まれていると言う感覚がたまらなく大嫌いなのだ。落着かないし、なんだかイライラする。

そのことを友人に言ったら一言「へんなの」と言われた。他人に何をどう思われようがべつにいいが、さすがに、この『端』好きを共感してくれる人が一人もないのは、正直寂しい。やはり語り合いたいじゃないか。『端』の良さについて。

「あら？」

と、お京さんが小さく声を上げた。

「どうしました？」

アキラさんがそう訊ねるがお京さんはしばし、ぶつぶつと一人ごとを言っていて、聞こえていないようだった。

どうしたのだろう？ もしや、その部屋は何か曰く付だとか？……勘弁して欲しい。あたしはその手の話が本当にダメなのだ。下手したら恥も外聞もなく大声で泣くかもしれない。過去にお化け屋敷でそれをしてからと言うもの、友人達のあたしを見る眼が微妙に変わった。はつきり言って、その見る目は非常に居心地悪いものだった。なんと形容すれば上手く伝わるだろうか。

――……一生懸命背伸びをする子どもを見るみたいな生ぬるい感じ。

ああ！ 思い出すだけで――！！

「ごめんなさいね。苑さん。貴女と同室の子、中等部生だわ」

脳内で身悶えていると、困ったわねえ、みたいな響きのお京さんの言葉が聞こえた。

中等部生？ なんだ。そんなことか。

「それだけですか？」

「ええ」

同室の子が誰だろうとあたしは気にしないぞ。そりゃ、不潔だつたりガチの同性愛者だったら本気で御免被りたいけど、まさかそんなはずないだろうし。

「わかりました。妹みたいな感じでフレンドリーに接します」

「ええ。そうしてあげてね」

冗談っぽく笑いながら言った言葉に、お京さんは真顔でそう返した。アキラさんを見ればなぜか頷き返された。

え、なに？

やばいって

正面玄関から寄宿舍内に入ると、そこは外観同様中世で貴族だった。

吹き抜けのエントランスホール。敷き詰められた高級感漂う真紅の絨毯。天井に下がったシャンデリア。ダンスパーティーでも開けるんじゃないのか。ここ。てかここ日本だよな？

「どう？　すごいでしょ」

ポケットと突っ立っていると、アキラさんがそう苦笑気味に言った。うん。すごいよこれ。思わず自分の服装確認しちゃったもん。場違い？　とか思ったし。

そうそう。あたしは今、昨日届いたばかりのこの学校の制服を着ている。どっかの有名な人がデザインしたものらしく、かなりかわいい。スカートにブレザーと学年で色の違うリボンタイ。色合いもだが、細かな部分もさすが有名デザイナーと誉めて遣わしたくなる。――何様のつもりか！　とか言うツツコミは軽くスルーする方向で行くのであしからず。

「それじゃあね。ソノちゃん」

「はい。断ったって言うのに、わざわざありがとうございました」

「フフ。それは嫌味かしら」

「これを謝辞や感謝と取れるなら少し尊敬します」

「それじゃあ、そう取るわね」

そう言ってアキラさんは上品に微笑んだ。むむ。手強い。

「わたしの部屋は406なの。良かったら遊びに着てね。では、ごきげんよう」

うあ……。ごきげんようとか言う挨拶初めて使われた使ってる人見た。こう言う時ってあたしも『ごきげんよう』で返したほうがいいのかな？……やだなあ。なんか、どうよ？

「良かったら、アキラさんも遊びに着てくださいね」

とりあえず、あの人のおかげで少し助かったのは事実だ。あんな御礼のしかたじゃなくて、ちゃんとお礼しないと。

「……え？」

「ありがとうございます。助かりました」

あたしがそう言って頭を下げると、アキラさんはちょっとぽかんとした後上品に笑んでから、手を振って寄宿舎を出て行った。ホントなんか上品な仕草が似合う人だな。上流階級の人なのだろうか。とか思いながら見送って。見送ってから自分の愚行に気付いた。

——あの人、あっちの世界の住人さんじゃん。

血の気が引くとはこのことか。つか、あたしのアホたれ！ 何してんの言ってるの！ 相手は“オンナオオカミ”とか呼ばれてるような人だぞ。それを自分の部屋に呼ぶなんてっ。しかも下手すりゃ同室の子まで被害が及びかねないって言うのに！ ああもお！ 幾らあたしでも“オンナオオカミ”から何が連想されるかわかってるだろう。そこまで考えて、はたっ、と気付く。別にあたしに手を出すと決まったわけじゃないじゃん。そうだよそう。別にあたしはオオカミに食べられるような美味しそうな容姿はしてないし。うん。なんかすごいへこむけど事実だ。

相手はオオカミと呼ばれるほどなんだから、別にあたしに手を出す必要性は皆無じゃない。なんだか自意識過剰みたいで、さっきの考えはみつともないな。

もし遊びに来て同室の子が食べられそうになったら、温かい目で見守ってあげよう。まあ、実際にそんなことになったら逃げるけどね。

そんな、まだ見ぬルームメイトをスケープゴートにすることを勝手に決めつつ、階段を上がる。おおっ。絨毯に足が吸い込まれるような感じがする。踏んで歩くのが恐れ多い気がしてくるな。そう思いながら親の仇のように力強く踏みつけて歩く。なんか楽しいぞ。

寄宿舎にはあまり人はいないようだ。自分の部屋につくまで誰に

も会わなかった。まだ学校始まってないし、当たり前か。とか思うが、一週間前には寄宿舎にいなきやいけないんじゃないかなかったつけ？と首を捻る。おや？こんだけ大きいことから、寄宿舎生が少ないわけは無いだろうし。

まあ、いいや。あたしは考えてもわからないことを考えるのは嫌いだ。無駄だし。だから同室の子に訊けばいいや、と思考を中断する。

扉のプレートを見る。

308。

うん。ここだ。中からは話し声が聞こえる。なぜか一人分だけ。

……もしかして、同室の子は不思議ちゃんなの？それはそれで嫌だなあ。面白いだろうけどさ。

コンコン。

と、扉をノックする。すぐに「はい」と言う元気な声が聞こえてきた。礼儀というものを心得ているあたしは、その声とが終わると同時に勢いよく扉をあけた。こういうのは最初が肝心なのだ。元氣よくフレンドリーかつ勢い任せで！

「こっんにちはー！ あたし、今日からここに住む椎本苑！ そーちゃんでもソノちゃんでも、呼びやすいと思う呼び方で呼んでくれい！！」

突然の訪問者に、中に居た子達はぼっかーん、としている。よし。機先は制した。と内心でガッツポーズ。そして疑問。なぜ二人も居るのだろうか？

室内には二人の少女が居た。ボブショートの元氣そうな子と、ゆるいウェーブで長い髪の人形みたいな子。

寄宿舎の部屋はどれも二人部屋らしい。だから、二人も居るのはおかしいのだが、まあ、どっちかが他の部屋のお友達なのだろう。そう思い、いまだ停止状態の二人に笑顔でこちらから。

「おーけい？」

そう訊ねる。先に動き出したのは元氣そうな子だった。

「はい？」

怪訝そうにそう返す。むむ。疑問系に対して疑問形で返すのはルール違反だということを知らないのか。なーんて了見の狭いことは思わない。あたしも良くやるし。むしろ、疑問に疑問で返すのは良答だと思っている。

人形少女は元気そうな子の服をぎゅっと掴んでおそろおそろ、という感じにあたしを窺っている。

——ああ……。すごくいじめたい。

そこはかたなく嗜虐心を揺さぶられるが、それは今は置いておくことにする。仲良くなったら実行しよう。と、心のやりたいことメモに書き込んでおく。

「えっとね。あたしは高等部の新入生なの。んで、この部屋が今日からのあたしの住処。寢床。城」

あたしは丁寧そう教えてあげる。あたしとしてもさっきの勢い任せの自己紹介が通用するとは思っていない。

「あ、ああ。そうなんですか」

納得したみたいで顔で元気そうな子は頷いた。人形少女はなぜかまだ怯えている。

「そうなのよ。で、あたしは自己紹介したよ。今度はそっちの番」
あたしはそう促す。何かを話すにしてもまずは相手のことを知らなくては。せめて名前くらい。できれば趣味とか。可能なら好きなものとか。教えてくれるならスリーサイズとか。

「そうですね。わたしは、枯葉^{カレハ} 樅^{モミジ}です。中等部二年生で、隣の部屋です」

そう言うってから、元気そうな子——モミジちゃんは自分の服を掴んでビクビクしてる人形少女を促す。あたしってそんなに怖いかな。さっきの先制攻撃で怯えさせちゃったのかな？ううむ。むっかしいなあ。色々。

「ほら、カナ。ちゃんと自分で挨拶しなきゃ。失礼だよ」

そう言われると、人形少女はかわいそうになるくらい怯えた表情

でイヤイヤをしだした。

……なんか、すごいかわいい。なんだこれ。こんな子が外に出たら即行でヘンタイ誘拐犯に拉致されそうだ。

「すみません。この子、こんな感じで臆病で」

苦笑しながらモミジちゃんがそう謝った。うん。臆病なのは見てたらわかるよ。モミジちゃんは人形少女改め臆病少女とかなり仲が良いようだ。信頼されている。モミジちゃんのほうもそれ対してまんざらでもないような感じだ。仲良きことは美しきかな。

「この子は、天羽^{アモウ} 叶^{カナエ}。ソノ先輩のルームメイトになります。それと……」

そこまで言うてからモミジちゃんは表情を曇らせてから、臆病少女——カナエちゃんを見、口を開いた。

それを聞いたあたしは、アキラさんとお京さんの反応の意味を知った。

リアクションに困る

男性恐怖症。孤独恐怖症。高所恐怖症。暗所恐怖症。閉所恐怖症。先端恐怖症。血液恐怖症。……恐怖症って、結構な数存在するんだね。

いきなり何を列举してるんだ？　とか思うだろう。あたしも最初これを聞かされたときは？　マークを乱舞させた。

や。別に恐怖症というものを知らないわけじゃない。

特定の一つの物から他人には不可解な理由で、精神的、生理的に異常な反応を起こす精神疾患の一つ。英名フォビア。小さい時はフオグラとキャビアの融合体と信じて疑わなかった。懐かしく甘苦い思ひ——ちよつと待て。この原因も兄貴じゃなかったけ……。

や、まあ、とりあえず、あたしだって恐怖症がどんなものかはきちんと理解している。ちなみにあたしの症名、精神脆弱病。あるいは、獲物の素質。

「……えーと。カナエちゃんはそれを全部持つてると」

あたしは現実逃避なんだか認識なんだかよくわからない思考を終えると、頭を押さえてそう確認を取った。

「はい」

モミジちゃんがマジメにそう頷いた。カナエちゃんはその後ろで俯いた。……いや。カナちゃんは最初からほとんど俯いてたな。

さっきの七個の恐怖症は全部カナちゃんの持ち物。つまりはそう言うことらしい。初めて見たよ、こんなセブンス・グランギニョル・ホルダー。

「それにですね」

「まだあるの！？」

おいおい。幾らなんでも多すぎやしないか。そんなに幾つも持つていても何もいいことないって。豪華な粗品と交換なんてイベント

は何処にも無いよ!？」 てか普通の生活すらままならないんじゃないかなのかな。そんなことを思ったが、モミジちゃんの口から出た言葉は、そんな軽い考えを吹き飛ばすほどショッキングなものだった。

「カナは、喋れないんです」

「……え？」

喋れない？

「はい。病気とかではなく精神的な問題で」

生ぬるい環境で育ったあたしには、そのことはすごい衝撃だった。人は喋る。これは、あたしの中では絶対だった。確かに、声が出ない人がいるのは知っている。言語障害とかそういうの。けど、そんなのは稀で、液晶の向こう側のことだった。けれど、そうじゃなかった。ほんの少し、環境が変わって、関る人も変われば、こんな身近に居た。……しかも、なんか色々オマケ付きで。

あたしは今どんな表情をしているのだろうか。

モミジちゃんは目を伏せている。

カナエちゃんは傍らに置いていたホワイトボードに何事か書いている。聞いたことがある。喋れない人は筆談とか言うのをするらしい。

きゅつきゅつ、というホワイトボードをペンが走る音が止まった。カナエちゃんはそれをあたしにも見えるように、掲げる。カナエちゃんの書いた文字は見た目の可愛さとは違い、やたら達筆だった。

いや、それより――

『そんな顔するな。こっちまで気が滅入る』

――……。――

台無しだった。感傷的な空気や、なんか色々なものが。とにかく台無しだった。

あたしはものすごい勢いで瞬きし、目をこすり、目を瞑ってぱっと見る。等々の行為を繰り返して何度も確認した。けれど、目の前の

達筆な文字の男らしい台詞は変わらない。

ギャップとかの問題じゃねえな、これ。

モミジちゃんもそれを見て、若干ばつの悪いような表情をする。

室内をものすごく微妙な沈黙が支配する。

きゅっきゅつ、という音が再びする。カナエちゃんがまた何かを書いていた。

『黙るなよ』

「いやいや、自分が原因だって認識しようよ！」

あたしは堪らず立ち上がってそう叫んでいた。これは責められることじゃないだろう。

目の前の恐怖症ホルディング音声不能少女の容姿を詳しく述べてみようか。あたしなりに。

亜麻色の長く、ゆるいウェーブのかかった柔らかそうな髪。大きな鳶色の瞳。高い鼻梁。外国の血が混じっていると思われる整った顔立ち。染み一つ無い真白い肌。まるで、ビクスドールのような。そんな美少女。

そんな子が。そんな子が、あんな「何処の書道家でせうか？」と思わず礼儀正しく訊ねちゃいそうな達筆すぎる文字を書き、挙句男らしい話し方(?)をするなんて……!! あたしの気持ちかわからない奴はもはや人じゃない。鬼畜で畜生だ!

『人の所為にするのは、よくないの……』

「今さらそんな可愛げなことって誤魔化せると思うな！」

一転して丸っこい女の子らしい可愛い文字と可愛らしい口調(?)でそう言うカナエちゃんに、あたしはそう突っ込みを入れる。

カナエちゃんはビクッ、とした後に再びモミジちゃんの後ろに隠れた。服の裾を掴んで涙目でこちらを窺っている。チクシヨウ、な

んか可愛いぞ。

「あ、く、うう……」

思わずあたしはうろたえてしまった。これはしかたないことだと思ふ。

「す、すいません。カナは強がるくせに小動物並みに臆病で……」

モミジちゃんが苦笑しながらそう言った。思ったのだが、モミジちゃんは元氣そうな印象を与えるくせに、やたらと礼儀正しく苦笑が似合うな。というより、慣れすぎてる。悟りを開いたような、達観したようなそんな感じ。中二なのに。

「ほら。カナ、いつまでも隠れてないで」

そう言っ頭をなでるモミジちゃんに、カナエちゃんは口をパクパクさせる。おお！ 読唇術か！？ はじめて見た。すごいなあ。こういうスキルには正直に尊敬の念を覚える。

「……大丈夫。ソノ先輩は食べないから」

「ちょっとまてい」

あたしは肉食獣か！ 失礼な。それともあれか。どこぞのオオカミさんと同じ意味合いか！？ だとしたら膝を詰めて話し合う必要があるな。

モミジちゃんとカナエちゃんはあたしのツツコミを軽く無視した。なんか手馴れてる感じがするのは気のせいかな？ 邪推せずにはいられないのだが……。

モミジちゃんの言葉に安心したらしく、カナエちゃんはペンを手にホワイトボードにまたまた何かを書きだした。今度は何を言う気だ。もう何書かれても驚かないよ。あたしは慣れが早いのが数多い自慢の一つなのだ。

『仲良くしてやろう』

……ほほう。してくださいでも、してねでも、しようねでもなく、してやろうときたか。モミジちゃんを見ると流石に表情が引

きつつてる。カナエちゃんは不安そうにこちらを窺っている。その様子は、この言葉を書いた奴と同一人物とは思えない。

あたしはふっ、とやさしく微笑んでカナエちゃんに近づく。カナエちゃんはモミジちゃんの後ろには隠れてこそいないが、左手がぎゅっと服を掴んでいる。あたしの出方とかよりも、誰かと一緒にいて触れ合っておかないと不安なのだろう。

あたしはそんなカナエちゃんを安心させるようにそっと、カナエちゃんの頬に手をやる。

「よろしくね、カナエちゃん」

それを見て、モミジちゃんはほっとしたように微笑み、カナエちゃんはへにゃ、っと笑った。

「――けどね？　してやろうとは何事か!？」

あたしは優しい笑みのまま、カナエちゃんの白くてやわらかなすべすべの頬を引っ張った。うわ。おもしろかわいい。ちよっとラブリー。

……ちよっと気持ちよかったのは内緒だ。

小動物。

「ねえ。そろそろ機嫌直してよ」

涙目でイヤイヤをする。ああ、もお。めっちゃいじめたいなあ。

何この嗜虐心こちょこちょ生物。……落着けあたし。思考がどんどん危ない人みたいになってるぞ。

「……困りましたね」

苦笑と達観を混ぜて、傍観に徹することを決めたような台詞を発するモミジちゃん。付き合いが長いんだったらなんかアドバイスちようだいよ。と思わなくも無い。

あまりの気持ちよさに調子に乗ったあたしは、ついついカナエちゃんの頬で遊びすぎてしまった。その結果、カナエちゃんは怯えきって警戒心剥き出しの小動物みたいになって、カーテンに隠れてしまったのだ。その様子の可愛いこと可愛いこと。黙っていればとても可愛い。いや、喋れないんだから黙ってれば何も無いのだが。

「カナエちゃん……」

あたしが近寄ろうとするとびくつとした後に、ふえ、と泣きそうになり震えだす。その可愛さと苛めてるような錯覚に、あたしは近づくのをやめる。なんだか気の毒になってきた。それと同時に、悪いことしたなあと言う気持ちと、もつといじめたらどうなるんだろう、と言う反省しながら好奇心を沸きあがらせるという最上級心理運動をする。

ダメじゃん。

ああ、どうしよう。

「ねえ、何かいい方法ない？」

あたしはついに観念してモミジちゃんに助けをこよう。長い付き合いの親友なんですよ。何か良い方法をプリーズ。

「ありますよ」

「ホントに？」

「はい」

うわ。即行じゃん。え？ なに？ あたしのしてたことって、もしかしてすごい道化じゃない？ てかね、モミジちゃん。そんなにあっさり答えられるくらいいい方法があるなら、最初から教えてよ。完全に他力本願な思考。けれど仕方がない。会ったばかりの子のご機嫌取りの方法なんて知るわけが無いのだ。だったら最初からからかうなよ、とか。いじめるなよ、みたいなツツコミは望んでません。思っても口にするな。

「どうすればいいの？」

期待に胸を膨らます子どものようにワクドキしながら、にじり寄ってモミジちゃんの言葉を待つ。

「簡単です」

そう言うともミジちゃんは立ち上がり、

「失礼します」

ドアノブに手をかけ退室しよう——ちょっと待て。

ところで、小動物の素早さを知ってるだろうか？ あいつらはビビリですぐに隠れたりするくせに、かなりすばしっこい。見ていて、どう動いた？ と思うことしばしばだ。

出て行こうとするモミジちゃんにいち早く気付いたカナエちゃんの動きは速かった。隠れていたカーテンから出ると、ドアの近くにいたあたしよりも先にモミジちゃんにしがみついたのだ。ホントに小動物だな。

「カナ……」

やれやれ、見たいな苦笑を浮かべるモミジちゃんにカナエちゃんはお口ぱくぱく。おお、出たな読唇術。

「……………見捨てるんじゃないよ」

優しくそう言うモミジちゃん。さらにお口パクパクカナエちゃん。気になったのだけれど、どうして唇の動きだけで何を言ってるのかわかるのだろう。

「……………いやいや、キズモノにされるって……。大丈夫だよ。たぶん」

一体どういう会話がされてるんだろう。てか、なんですかキズモノにされるって。カナエちゃんはあたしのことをそう言う目で見てるのか。モミジちゃんも。そこは多分じゃなくて言い切ろう。あたしはそんなことする人には見えないでしょう？……見えないよね？

「……………大丈夫。すぐにまた来るから」

なんだろうね。段々と蚊帳の外的なプチ孤独感がこみ上げてくるよ。

それにしてもなんだね。なんだろうね、この二人のラブラブっぷりは。もしやこの二人はそう言う関係？やだなあ。あたし、同性愛者を否定する気は無いけど、苦手なんだよねえ。なんて言うのかなあ、こう、感覚的に。

「……………本当だよ。だから、その間に仲直りしててね」

って、いやいや。いけないぞ。女子校だからって、最初にそういうのを目撃してしまったからって、そう言ったフィルター越しに物事を見るのは。だいたい、こういう風な感じの子なら、あたしのいた中学（共学）にも居たじゃない。そうそう。女の子ってのはこういうボディコミュニケーション（？）は当たり前じゃないか。うん。普通だよ普通。きつとそうだよ。むしろそうであってほしい。

「ソノ先輩？」

「はいよなんざんしょ？」

思考の海からざっぱあ、とあたしはものすごい勢いで浮上したため、返事がなんか珍妙なものになったが気にしない。これもあたしの味だと思ってほしい。……何味だろう？

「カナのこと、頼みますね」

「まっかせろい」

そう元氣よく返事すると、モミジちゃんは苦笑をしながら出て行った。

さて、どうしよう。

てか、あれ？モミジちゃんや。あなたはさっきいい方法があると言いませんでしたか？こんな気まずい状態で二人きりにされても、あたしはどうすればいいかさっぱりなのだよ？

どうしよう。と、カナエちゃんを見ると、ベッドに入って中途半端に布団をかぶってこちらをビクビクしながら窺っていた。

あたしが見ていることに気付くと、きゅっきゅつ、とホワイトボードに

『なんだよ！カナは美味しくないぞ！！』

と書いてきた。美味しくないぞって……。食べないっての。

ベッドは二段ベッドで、カナエちゃんは下段のベッドにいる。てことは、あたしは必然的に上だな。そう思い、あたしはとりあえず肩掛け鞆から文庫を何冊か取り出して上段に上がる。

あたしがベッドに上がるために梯子に足を掛けると、カナエちゃんはやっぱり、ビクツとしたので、苦笑しながら「なにもしなよ」と言ってやる。

丁寧に畳んである布団を敷き、枕もとに文庫を手を持っている文庫を置く。

ちよんちよん、とスカートを引っ張られたので下を見ると、

『なにしてんの？』

と布団から顔を出して訊ねるカナエちゃん。上でゴソゴソやっているのが気になったらしい。

「文庫本を並べてるの」
きゅっきゅつ、と。

『なんで？』

「あたしは寝る前に何か読んでから寝る事にしてるから」

そう答えると納得したらしく、へえー、みたいな顔をした後には
っ、となりまた布団に中途半端に隠れた。

どうしたもんな。

とりあえず、あたしは制服を脱ぐことにした。

仲良くなろう

あたしは脱いだ制服をそのままにカバンの中からハイネックと半ズボンを取り出して着替える。

カナエちゃんモミジちゃん共に私服だったので寮内では私服でもいいのだろう。アタシとしてはいくらかわいくても制服は制服。まだ学校も始まってもないのに制服で居ると言うのはなんか気持ち悪い。

それに、あたしはスカートよりもパンツ系の方が好きだ。動きやすいし、何よりあたしにスカートという組み合わせはどうも似合わないと言うか、アンバランスと言うか。とにかくスカートよりもパンツ派なのだ。

しわになるとまずいので制服はハンガーにかけクローゼットの中に吊るす。クローゼットは大きいのが一つ、デン！と、あるので共用なのだろう。中にはカナエちゃんのだろう制服がかかっていた。中等部の制服も高等部の制服もそこまで違いはないようだ。見た感じ。

さて。と、あたしはそこまでを終えろと考える。

ちらりとベッドの方を見るとカナエちゃんはいまだに警戒中の小動物になっている。

仲直りしたいけど。どうすりゃいいのよ。

兄貴達とケンカした時は――。

兄貴が即行で折れてたな。

……ダメじゃん。

ホントに全く使えないなあ、兄貴達。せめて記憶の中でくらい役に立って欲しいのだけれど、高望みのしすぎだろうか。しすぎなんだろうなあ。だって、アレだし。ヘタレだし。

そんな使えないダメ兄貴達のことを思考から即行で追い出し、目

の前の問題に意識を向ける。……向けるけどどうすりゃいいやら。そもそも今まであたしの周りにはあの程度のおふざけで、ココまでビクビク気まずい状況になるなんてことは無かった。気まずくなってもすぐに仲直りできた。だからだろう。妙案が思いつかない……。

考えに考え。さらにまた考えたすえ……、あたしは実力行使に出ることにした。我ながらぶっ飛んだ思考回路だとは思うが、考えたってダメなら動くしかないのだ。

「カナエちゃん！」

カナエちゃんの方を向き強くそう声をかける。

当然というか、予想通りというか。カナエちゃんはビクウ、と反応する。

『な、なんだよ』

よほどビククリしたのかビビったのか。文字は弱々しく震えたような歪なものになってる。とりあえず、この際無視。

「さっきのはあたしが悪かったわ。だから、いい加減機嫌直して？」

あたしはやさしく、微笑すら浮かべて言う。

カナエちゃんはなぜかたじろいだ。失敬な。

無言。……いや、この場で喋れるのはあたしだけなんだから当然か。

……反応が無い。ただの屍のようだ。

違う違う。

カナエちゃんは布団を目深にかぶると目をそらした。ほほお。それは拒絶と取っていいのだな。というか取っちゃうぞ。

「……そっか」

あたしは、さも残念だ……。とでも言いたげに消え入るような声で呟いてみた。ちよっと悲痛さが出ていると思う。

あたしはゆっくりと立ち上がる。そっぽを向いてしまっているカ

ナエちゃんはそれに気付いていない。それをいいことにあたしはゆっくりと近寄っていく。さながら獲物を狙う肉食獣のように。抜き足差し足。

ベッドまで近づいた。そこでカナエちゃんは真後ろにまで迫ったあたしの気配に気付く。だが、もう遅い！

「てい！」

あたしはそんな微妙な掛け声と同時にカナエちゃんから布団を引っぱがす。呆然と、座り込んだままのカナエちゃん。

あたしはしっかりと正面から見据えるために呆然とした状態のカナエちゃんをそのまま押し倒す。

カナエちゃんはちよつと押しただけでバランスを崩し倒れこんだ。とても軽い。

ふわり、と石鹸の甘い香りが鼻腔をくすぐる。どうやら、香水の類はつけないタイプらしい。それでも、女の子らしい香りがする。

あたしは覆い被さるようしたまま、カナエちゃんの目を見つめて口を開く。

「いつまでびくついてる予定？」

カナエちゃんはその言葉に目を見開く。大きな鳶色のお目々がより大きくなる。

「あたしは、カナエちゃんと仲良くしたいんだけどな」

息を飲むような気配。カナエちゃんは顔を真っ赤に染めて横を向いてしまった。ん？ あたしなんか変なこと言っただろうか？ 首を傾げ考えるが答えは否。全然おかしくない。

カナエちゃんの肌は本当にきれいな白だ。だから、赤——いや、朱か。そういった色が良く映える。女のあたしから見ても可愛いと思う。うん。美人さんだ。

「カナエちゃんは、あたしと仲良くしたくない？」

ふるふると弱々しく首を振る。亜麻色の柔らかな髪がさらさら流れる。世界は言い感じに不公平だなとかつまらないことを思う。あたしの髪はちと硬いのだ。

「じゃあさ、ちゃんと向き合おうよ。これから同じ部屋なんだしさ」
耳まで真っ赤にしたままこくこくと頷く。ひどく愛らしい仕草だ。
いつまでもそのままじゃなんなので、あたしはカナエちゃんの肯定を確認すると、ゆっくりとカナエちゃんの上から退く。

よっしゃミッションクリアー。とか一人で勝手に喜んでいて、あたしはある事にはたと気付いた。それは気づかないほうが幸せなことだった。

冷静に客観的にさきほどの態勢を思い出してみる。

……………うあー。

あたしは膝について項垂れた。

見ようによっちゃあアレって倒錯したごによじゃないかつ！
なにやっぺんだあたし！？ よもやこんなにも早く毒されたか！？
てかまだ数時間でしか経ってませんですよ！？ もうちょつと根気とかいろいろ見せようよ！？

つうか。あたしは同性愛否定派だろ？ そうでしょ？

項垂れ心中で自分を罵倒するあたし。

いまだベッドで倒れたまま真っ赤になってるカナエちゃん。

一難さってまた一難。

今度はまた別の意味でとても気まずい。

オーケ。落ち着けあたし。さっきのは手っ取り早くことを解決へ導くための、止むを得ない手段だ。なんかいい香りがするなとか色々思ったかもしれんが……、気のせいだ！

あたしは必死でそう自分に言い聞かす。

今のあたしの中では罵倒と説得が同時に行われている。しっちゃんめっちゃかになっているがこの際目を瞑ろう。

初日からこんなで大丈夫か？ あたし。てか、今日はまだ続くんだぞ！？

感動した

そんな風にあたしが項垂れ悶えているとなんとも良いタイミングでノックの音がした。

誰よ？

とか微妙な頭で投げやり気味に考えているが入ってくる気配が無い。どうやら几帳面にも返事を待っているらしい。

あたりまえか。この部屋の住人は現在在室しているのだから。

ああ、もう。ホントしつちやかめつちやかだわ。まとまれ脳！

そんなやつ当たりなんだかなんなんだかわからないことを考えながら、ドアを開けるとそこには先ほど無情にも出て行ったモミジちゃんがいいた。

「さつきぶりです、ソノ先輩。どうです？ カナの機嫌は直りました？」

「あー……。とりあえず、入って」

あたしはそう言うともミジちゃんの返事を待たずにさっさと部屋に入れた。いまだベッドで呆然としているカナエちゃんをどうにかできるのはモミジちゃんだけだ。あーもう顔が熱いったら。

「あれ？ カナはまだご機嫌斜めなんですか？」

ベッドにうつぶせに倒れこんでいるカナエちゃんを見て 苦笑気味にそう言うモミジちゃんにあたしは首を振る。

モミジちゃんは首を傾げるとカナエちゃんのもとまで行った。

あたしは下手なことはせずモミジちゃんの手腕に期待しようと思う。

「カナ、どうしたの？」

カナエちゃんは顔を枕にうずめたまま横にあるホワイトボードを取り寄せると、きゅっきゅと何事かを書き出した。どうやら顔を上げる気が無いらしい。

むう。そこまで恥ずかしかったか。

実を言うとあたしはもうそこまで恥ずかしくない。なぜなら先ほどの行為を不可抗力という言葉を装備することでそれに納得したからだ。偉大なり言葉の魔力。……結構無理があるとか言うのは無視。「あー……」

モミジちゃんはホワイトボードに書かれた文を読むと、なぜかあたしのほうを見て苦笑しながら何度か頷いた。

なんだ？ あたしの場所からはモミジちゃんの影になってホワイトボードに何が書かれているかは見えない。しかたなく近寄ってみることにした。

『おしたおされた。』

そう書かれていた。

いやいや。間違っちゃいないが絶対に誤解されるからそれだけだと！

「ソノ先輩も……」

「“も”って何！？ 違うから。いや、違わないけど、そうじゃないから！」

だからモミジちゃん。そんなやつぱりみたいな顔であたしを見ないで。冤罪だから！ あたしはノーマルだから。

「カナエちゃんも！ そんな誤解をうむようなのはやめて！」

あたしの叫びにカナエちゃんは枕に顔をうずめたまま、きゅっきゅと書き足していく。

『だってじじつだもん』

「いや、確かにそうだけど！ けど、もうちょつと捻って。モミジちゃんも！ なんでそんなわかってますよ、みたいな顔してんの！？ 違うからね！？」

ああもう。なんなのさ。静観しようと思ったけど、無理！ こ

のままだとあたしはそっちの人と認識されちゃう！ 全くの誤解なのに。

カナエちゃんはホワイトボードの文字をペンのお尻で消すと、再び文字を書き出した。

『たべられるかとおもった』

「ソノ先輩って、意外と手が早いんですね」

「なんでよ……」

あたしは頭を抱えた。ダメだ。痴漢が痴漢行為をやってないと言うのと同じくらい、あたしの言葉は信用されてない。カナエちゃんは意図的になのかそうでないのか知らないけど、誤解を生んでやまないことを書くし……。

もう、やだ……。

あたしがブルーのさらに先へと落ち込もうとしていると、またまたきゅっきゅとホワイトボードに文字を書くペンの音が聞こえた。

もう、勝手にして。とか投げやりなことを思いつつも気になってそれを見る。

『けど、いがいとやさしいかも』

そう書いたホワイトボードをモミジちゃんに押し付けると、カナエちゃんは壁際の方へ移動しそのまま壁とにらめっこをはじめてしまった。

「よかったですね」

モミジちゃんはふっ、と笑むとあたしにそう言った。

なんか無性に恥ずかしくて、あたしは何も言えずに口笛を吹いてみたりした。口からは変な空気の音がただけだった。

夜である。いや、夕方か。

とにかく夕食の時間なのだ。

あの後、モミジちゃんは何をするでもなくベッドの柵に背をあずけてぼんやりとし、カナエちゃんはいつの間にか寝てた。

あたしは特にすることも無いし、モミジちゃんに話し掛けようにもなんか話し掛け難い雰囲気をも少し出していたので、しかたなく持参した文庫を読んで時間を潰した。

ちなみにジャンルはちよいとカルトの入った伝奇である。特に意味は無い。あたしは何でも読む方なので好き嫌いは無いのだ。――いや訂正。嫌いなあった。BL系とか言うの。アレはダメ。論外。あんなの読むくらいだったら電話帳を読破する方がまだいい。あんなのを読む奴等の気が知れない。

そんな風にそれぞれ時間を潰していると、すぐに夕食の時間になった。

あたしとモミジちゃんは中々起きてくれないカナエちゃんを起こすと、一緒に食堂まで行った。

夕食は寄宿舎の二階にある食堂で取る。

食堂はかなり広くてバイキング形式になっていた。種類は結構豊富だ。

「今日は洋の日みたいです」

モミジちゃんの言う通り、全て洋だった。ううむ。さすが。何か知ら無いけど思わずそう思ってしまう。この寄宿舎の雰囲気とかのせいだろうな。きつと。

「ほら、カナ。ちゃんと見て決めないと」

カナエちゃんはまだ寝ぼけているらしく目をこすっている。足取りはしっかりしているのに。

あたしはそんなカナエちゃんを微笑ましく見ながら、サラダを皿に乗せていく。

無事にカナエちゃんとモミジちゃんも自分の食べるモノを皿にとると、いい感じに誰もいないテーブルにつく。

食堂にはあまり人がおらず、あたしたちを含めても二十人くらいしかない。

「まだ帰省中だからですよ。新入生以外は、三日前までに戻ってくればいいんです」

そのことをモミジちゃんに訊くとそう答えが帰ってきた。モミジちゃんはその横でパンをちまちま食べながら頷いた。

どうでもいいが、ホント小動物だなあ。カナエちゃん。

そんなことを思いながらサラダにドレッシングをかけ口に運ぶ。

おお……！ タマネギが辛くない。

あたしはそのことにちよつと感動する。家では食事は当番製で、必然的に兄貴や親父の当番の日が多くなる。そうなると、当然男の料理が多くなるわけで。男どもの作る料理はまずくは無いし、むしろ美味しいのだがなぜかサラダ類は素材のイメージどおりの味を出したがるのだ。そのため、ピーマンはホントに苦く、タマネギは辛い。

あたしは辛いのは好きでも嫌いでもないが、タマネギ特有のつんとくるあの変な辛さは苦手なのだ。だから、辛くないタマネギは感動ものなのだ。

華

そんな心底どうでもいいことに感動を覚えていると、

「あら？ ソノちゃんじゃない」

つい数時間前にお世話になったオオカミさんの声が聞こえた。

フォークを咥えたまま振り返ると、そこには案の定アキラさんがトレーを手に立っていた。

——女の子を数人引き連れて。

「ねえねえ、カナエちゃんモミジちゃん。明日、ここの敷地内案内してよ」

あたしは何事も無かったように姿勢を元に戻して二人に明日の相談をする。

なぜか二人ともビデオの一時停止のように止まってしまっている。んが、気にしない。

「あら。それじゃあ、わたしが案内して差しあげましょうか？」

すぐく自然にあたしのとなりに腰をおろすと、微笑を浮かべながらアキラさんはそう言った。あたしはあなたに言ってません！

当然のようにアキラさんの後ろにいた女の子達もそれぞれアキラさんの隣や前に座っていく。その数六人。その中にはあの犬少女の姿もある。誰もいなかった寂しいテーブルはいきなり賑やかになった。

「ひどいですう。おねえさまは明日、私とご一緒にしてくれる約束だったではありませんかあ」

あまつたるっ！

アキラさんの横に座った巻き毛の育ちよさげなお嬢様風少女が、甘えるようにそう言う。

あたしはそれを聞き思わず顔を引きつらせた。しかたのないリアクションだと思う。

「ごめんなさい。そうだったわね。ついつい、忘れていたわ」

「もう。私は楽しみにしてましたのに」

「すねないの。ちゃんと約束は守るわ」

すねてみせるお嬢風少女に、アキラさんはそう言うとおでこにキスをした。取り巻き（勝手に呼称）がキャーとか黄色い歓声やら羨望やらをあげる。うるさいったら。

さて、

「それでね。カナエちゃんとモミジちゃんは明日何か予定はある？」
すぐ隣に展開されつつある別世界のことをきれいに無視して話を続ける。けれど、やはり二人は一時停止状態。オオカミさんの登場はかなりショッキングだったと思われる。

あたしは肩をすくめるとパンを一口サイズにちぎり口に放り投げた。ふわっふわで美味しい。焼きたてのようだ。すごいなお嬢様学校。パンも自家製か。強いぞお嬢様学校。なんだか食器類も良く見れば細かな装飾がしてあって金がかかってそうだ。

「あら？ ソノちゃんってば、わたしのこと忘れちゃった？」

あたしが無視を貫徹しているとアキラさんの繊細そうなきいな手が伸びてきて、あたしの顔をそちらに向けさせた。細い指から伝わる温度は少し冷たい。体温の低い人はやさしいとか言うのをどこかで聞いた覚えがあるけど、いきなり信憑性が薄くなった。和紙とまでは行かないけど、シングルのトイレットペーパーくらいには薄くなった。

目の前に、アキラさんの顔がある。息がかかるほど、とはいかないまでも近い。

目の前にあるアキラさんの顔はすごくきれいだ。

粉雪みたいに白い肌。病的とかでなくそれは健康的で。

柔らかく波打つ色素の薄い堇色がかった髪。

長いまつげに髪と同色のけれど濃い堇というよりは紫陽花のような色の瞳。

すごくいい香りもする。フローラルな香り？　なんか、頭がくら

くらするような……。

カナエちゃんも美人だけど、タイプが違うな。カナエちゃんがひっそり咲くやわらかな百合なら、アキラさんは威をもって堂々とその美しさを誇る薔薇だ。そんな感じ。

とにかく、美人さんだ。最初も思ったが、手足はすらりと細く長い。雑誌とかのモデルよりもスタイルも容姿もよほどいい。はだしで逃げ出すという表現はここで使うのかな？

けど、

「離してくれませんか？ あたしは美味しく食事中です」

モグモグしていたパンを飲み込むと、あたしはそう言いアキラさんの手を軽くはたいて顔から手をどけさせた。

それと同時に、怒りの悲鳴が取り巻きたちから上がる。

うん。やってからミスったと思ったよ。けれどやっちゃったもんはもう遅い。後悔先に立たずとは上手いこと言ったもんだね。

「ふふ。ごめんなさいね。けれど、無視するあなたが悪いのよ？」

「無視だなんて。ただ、邪魔しちゃいけないと思ったんですよ、オオカミさん？」

微笑を浮かべているアキラさんに、あたしは自分でもそうとわかるほどに冷ややかに言った。意図してのことではない。なぜか知らないが自然とそうなったのだ。

なんでだ？

あたしは意外な自分の心理運動に心中で首を捻るが答えなど無いし、答えを出す暇も無かった。

「あらあら。そうなの？ けれど、先に声をかけたのはわたしなんだから、気にしなくてもよかったのよ？」

まあ、それもそうだ。

アキラさんはそこで言葉を切ると、

「それにね」

あたしの顎に手を添え、

「――ここでは上級生には敬意を払う決まりなの。貴女はまだ知ら

ないだろうから、今回は見逃してあげる。けれど」

そう言うとアキラさんは添えた手を頬に移動させ、指でしばらく撫で這わせると、

「――次は、おしおきね」

つつ、と手を離して席を立った。

それに続く取り巻きたち。その目はみな一様に敵意に満ちており、あたしを睨んでいた。

あたしはアキラさんの姿が視界から消えるまで、動けなかった。

……はあ、すごい迫力。

なぜか知らないけど、美人ってのはすごい迫力を持つものなんだな。今までに味わったことのないような感じがあった。恐怖とも違う……なにかが。

アレだね。さすが薔薇。迂闊なことをすると棘に刺さる。

「はあー……。すごいですね、ソノ先輩」

大きく溜め息をついてモミジちゃんが唐突にそう口を開いた。その顔はとても真剣なものだった。

なんだろ。

「……なにが？」

モミジちゃんの横のカナエちゃんの目はなぜか若干羨望に満ちている。んん？ なんなんだ？

「あのアキラ様にあんなこと言えるなんて」

「そんなにすごいこと？」

たしかに、あの威厳というか迫力というかに、逆らうのはかなり気合がいると思うけど……。カナエちゃんが羨望の目を向けるほどのことか？

「十分にすごいことですよ。あの方はこの女王陛下と言っても過言じゃないんですから」

女王陛下って……。いったい、あたしは何処の王国に迷い込んだんだ？ いや、自分でこの学校選んだんだから入国か。

なんて、つまらないことを考える。

「ここであの方に逆らう人なんて、アゲハさん以外にはいませんし」「アゲハさん？」

「ええ。食堂に来てないみたいですけど、ソノ先輩と同じで四年――高等部一年になる方です。ファンからは“悼みの歌姫”とも呼ばれています」

「ファン？ 歌姫？ なにそれ？」

なんだなんだ。ここではすごい人には二つ名がつく風習でもあるのか。

「えっと。吹奏楽部と軽音部、バンド同好会に所属していて、すごい有名人ですよ」

「ふーん」

もはやあたしの反応は投げやりだ。部活を三つも掛け持ちしてるのもそうだが、なんか色々驚くのがめんどくさくなってきた。いちいち驚いてたら、身が持たない。きりがない。

同じ学年だという話だけど、まともな人だと良いな――。

そこまで思ってから今さら気付いた。

「その人って、寄宿舎生なの？」

「はい。そうですよ。何号室かは知りませんが……」

そっか。まだ友達が目の前の二人しか――アキラさんは保留――いないから、丁度良いし仲良くなれないかな。

やっぱり、同じ学年で友達が一人もない状況は心もとない。

そんなことを考えながら夕食は済ませ、あたしたちは部屋に戻った。

そう言えば全然カナエちゃんが会話に参加しないと思ったら、ホワイトボードを部屋に置き忘れていた。寝ぼけてたしね。

てか、あたしやモミジちゃんも気付いてあげろよ。

――とは思わない。だって、カナエちゃん。全然起きないんだもん。白雪姫でも王子様のキスですぐに目覚めるのに、カナエちゃんは鼻をつまんでも起きなかった。

人を起こすのに三十分も費やしたのは初めてだよ。まったく。

ゆめ

夕食を終えて少しの休憩の後、大浴場で入浴を終えて部屋に戻ってきたあたしは、

「負けた……。年下に……。う、うう」

両手を床に、まともや項垂れていた。

お風呂は寄宿舎の、なんと地下にあった。

地下があるのも驚きだが大浴場の豪華さには開いた口が塞がらなかった。

もお、大きいのよ。映画とかで見る王族の大浴場みたいに大きい豪華。マーライオンが口からお湯をダバダバはいてたのよ。はじめて見たぞ。マーライオン。

けど、そんなことはどうでもいい。問題は、そこでの出来事よ。モミジちゃん。あたしより胸があった……。カナエちゃんとあたしは大差ないけど。いや、そのこともショックだわ。同年や一つ下ならまだしも。二つくらい下の子と胸囲が大差ない。そしてモミジちゃんはあたし以上……。

へこむわ……。すごいショック。泣きたい。むしろ泣いた。あたしの胸ペタンコだもん……。う、うう……。

そう言えば、ほんの数時間ほど前からあたし項垂れてばかりだ。どーでもいいけどさ。

そのモミジちゃんは自分の部屋に戻っている。意外と胸のあることを指摘するとなんだかすごい恥ずかしそうにしてたのが以外だったな。

俯いて胸を隠していた姿が思い出される。

妙に達観した風な感じがあるからああいふ少女らしい仕草は――。

……。なんだ。今何を思いそうになった？　ちよっとおかしいぞ、あたし。

「はあ……」

あたしは溜め息をつくといきおい良く顔を上げた。

「牛乳をたくさん飲もう！ 嫌いだけど」

グッと拳を握りそんなどうでもいい決意をあたしが固めていると、カナエちゃんが挙動不審になっているのに気付いた。

なんかね。ひどくおろおろしてるのよ。椅子に座っていたかと思うと立ち上がってみたり。歩き回ってみたり。

そんなことを周りでカナエちゃんがしていたのにもかかわらず、今まで落ち込んでいたのだから、あたしのショックとペインの深さが窺えるというものだろう。

まあ、それはいいや。これ以上考えると余計に落ち込む。

ほうら……。また気が落ち——てないから。落ちないし、落ち込まない！

「どうしたの、カナエちゃん」

あたしは気を持ち直すようにカナエちゃんに声をかける。さすがに、このまま放っておくことは出来ないし。

カナエちゃんは若干迷った風にしたらあと、机の上に置いたホワイトボードに何やらきゅっきゅと書いて渡してきた。

『笑わない？』

例の達人並みに達筆な文字でそんな不安げなことが書かれていた。

「笑わないよ」

あたしが微笑みながらそう言ってあげると、じ、とあたしを見た後にまた何か書き出した。

『寝るとき、電気消さないで』

あ、そっか。暗いのダメなんだっけ。忘れていたそれを思い出す。たしか、暗所恐怖症。

「いいよ」

あたしが軽くあっさりそう言うと、カナエちゃんはほっ、と安心したようだった。

あたしはベッドが二階だし、電気ついたままだと寝難いかもしれないがまあ、いいや。あたしは寝つきがいいほうだ。自分でもわかるくらい。だから、夜も深く目を瞑れば勝手に寝てしまうだろう。そんなもんだ。

「それだけ？ 他にもあるなら遠慮せずに言ってね」

一応、あたしはそう訊いておく。なんか他にも恐怖症を持っていたから念のためだ。一々覚えてないし。てか、一度聞いただけで耳慣れない恐怖症を全て覚えるなんてちよいと無理だ。

把握しておいてあげればいいのだろうけど。

カナエちゃんは考え込むようにした後、首を振った。無いということだろう。

「そっか」

モミジちゃんに聞いた話では消灯時間は二十二時半。現時刻は二十一時ちよいすぎだからまだ少し時間はある。あるけど、今日は長時間の電車の移動とか、重い荷物を片手に迷子になったりとか、その他色々あって結構疲れている。

早いけど、もう寝よう。

「カナエちゃん。あたしはもう寝るね。さすがに疲れたし」

あたしがそう言うと、カナエちゃんはこくこく頷き、

『おやすみなさい』

とホワイトボードに。

「ん。おやすみ、カナエちゃん。夜更かししちゃダメだぞ」

あたしは冗談めかしてそう言うと、うつ伏せになり目を瞑った。さすがに、仰向けだと電気がまぶしくて目を瞑っても寝れない。うつ伏せだからって苦しくなるほど胸も無いしな。あははは……は

あ。

なんか、すごい空しい。

そんなつまらないことを思いながら、あたしの意識は徐々に薄れていく。やっぱり、身体はずいぶんと疲れていたらしい。

『いいかい。ソノちゃん』

やさしげな微笑を浮かべる男の人が、目の前で何かをしている。

『モノにはね、魂が宿ったり宿らなかったりするんだ』

かちやかちやとその男の人の手元からはそんな音がする。それはとてもリズムカルで、テンポがいい。

『うーと、うーと……。どっちなの？』

男の人の禅問答みたいな台詞に、舌足らずな幼い女の子の声がそう訊ねた。

一生懸命になやんだけど、答えは出なかったらしい。

『どっちなんだろうねえ』

『？』

どっちともつかない、そもそも答えになっていない男の人の台詞に、女の子は首を傾げた。

かちやかちや。

『あっ。わかった！ 魔法だ』

女の子の明るい声。絵本で読んだ魔女がブリキのおもちゃに命を吹き込んだのを思い出したらしい。

『じゃあ、僕は魔法使いだね』

そう言う男の人の手元からは、かちやかちやという音がやんでいった。

『ほら、よく見てて』

男の人がそう言ってかちやかちやといじっていたモノから手を、そっと放す。

すると――。

『わあわあ！　すごい。生き返った！』

かたかたと音を立てながらそれは動き出した。

それは、お茶運びのからくり人形。

——あたしの、大好きだったお友達。

女の子は嬉しそうにはしゃぐと、男の人に抱きついた。大きな手が、女の子を受け止めた。

『ありがとー。おにいちゃん』

『どういたしまして。……けどね、この子はもう、歳なんだ』

男の人の——おにいちゃんの悲しそうな声。

女の子はその言葉の意味がわからないらしく、そんな悲しそうなおにいちゃんの顔を不思議そうに見る。

『ううー。としてなあに？』

『おじいちゃん。てことだよ』

女の子は、おじいちゃんだと言われたからくり人形を見る。

彼は、おさない男の子の顔をしていた。

『まだおとこのこだよ』

友達を馬鹿にされたと思ったらしく、女の子は頬を膨らませてそう言った。

『はは。そうだね。けどね。この子は、ずうっと昔から居るんだよ』

『むかし？』

『そう。ソノちゃんが生まれる前から』

『わあ！　すごいね』

顔を輝かせて羨望の眼差しで、女の子は彼を見る。彼は今、休憩している。

『そう。すごいんだ。だから、少し、お休みさせてあげよう』

『おやすみ？　どれくらい？』

『そう、だね……』

男の人はそう言うとき少し悩んで、

『ソノちゃんが、小学生になるくらいまで、かな』

『しょう……？　それって、すぐ？』

『うん。すぐだよ』

『そっか。なら、おやすみさせてあげる。ばかんすにいくといいよ』
女の子はすこし残念そうな顔を見ると、すぐに明るい顔になりそう言った。

それを聞いた男の人は、なぜかとても複雑そうな顔をしていた。

……………。

……………。

あたしは、馬鹿だ

「うう……？」

寝返りを打ったあたしは、閉じた瞼の上からでもそうとわかる強烈な光に目が覚めた。いや、実際はそこまで強くない。寝ぼけ眼なうえに突然で、しかも少し近いから、そう感じたただけだ。

なんで電気点いてんの？ 鬱陶しいな。睡眠を妨げやがって。とか、寝たりない頭でぼんやりとそんなことを思う。

起き上がり、壁にかかった時計を見る。むう。よく見えない……。目をこすり再確認。短針と長身が上を向いて重なっている。丁度、日にちが変わったところだった。寝たりないはずだ。ふあ……ねむ。それにしても、なんて懐かしい記憶だろう。

眠いはずなのに、あたしはさっきまで見ていた夢のことを思う。あたしは見た夢は大抵覚えてる。そりゃ忘れることもたまにはあるが、稀だ。まあ、確かに。わざわざ意図して思い出そうとしたりするわけではないから、日々の生活に随時埋もれていくわけなのだ。

なつかしい、夢だ。あたしが幼稚園の……さすがに、そこまでは覚えてないや。

それよりも、だ。兄貴め。小学生くらいまでって、結局あたしはあの後から一度もあのからくり人形、三郎丸君を見てないぞ！ どういうことだ。

——なんて、ね。わかってるさ。三郎丸君はもうガタがきていて、あのまま幼いあたしの相手が続けていたら壊れてしまっていたのだろう。しかたないさ。あの頃まで動いたのが不思議なくらいの骨董品だったのだから。状態も、良いとは言えなかったしね。

あたしは三郎丸君のことを忘れていた。最高の友達だと思っていたあの人形のことを。今の今まで。

なんであんな骨董品を気にいったのかはわからない。もっと、女の子らしい人形もあった。けれど、あの頃のあたしはそんなのよりも、三郎丸君が気に入っていた。

動かなくなった時に泣いてしまったほどに。

まあ、それでも。今まで忘れていて、顔すら思い出せないのは薄情だろうな。幼かったとは言え、友達に対する行いではない。

まだ、家にあるのだろうか？

帰ったら、確認してみよう。兄貴か親父がしってるだろう。

帰れるとしたら夏休み、か。長いぞう。まだまだ先だ。学校始まってすらないし。なのに今から帰ったときの予定を決めるとは。我ながら、すごいフライングだ。

うつろな頭でそんなバカなことを考えながら、再び眠りにつこうと電気を消す。

——と……。

ガタン！ と、下から大きな音が聞こえた。

あ、やばっ。

あたしは何で電気をつけっぱなしにしていたのか思い出し、そう思いながら即座に電気をつけ直して、落ちそうになりながら下を覗いた。

「ごめん！ カナ——」

先に繋げなかった。あたしはそこで息を飲んだ。

膝を抱えてガタガタと震える少女。嗚咽は聞こえない。それでも、泣いているのだとわかる。

あたしは慌ててベッドから飛び降りると、膝を抱えて泣いているカナエちゃんに手を伸ばし、肩に触れた。びくっ、と大きく震える。触れた指先から、カナエちゃんの体温が伝わってくる。どれくらいの時間をそうしていたのか、冷え切っている。

ゆっくりと、おそるおそる顔を上げたカナエちゃんの顔は涙で濡れており、大きな瞳は真っ赤に充血していた。まぶたも腫れぼったくなっている。

「ずっと、泣いてた、の？」

顔を俯けた。それは肯定だとわかった。

なんで、とは訊かない。

ただ、自分の迂闊さと思慮の浅さに腹が立った。何で忘れてた。

寝ぼけて頭がはつきりしてなかったなんて、そんな言い訳通用しないぞ。何で電気が点いていたかよく考えてから行動しろ。いや、違う。それもだが、それ以上に。

何でちゃんと訊かなかった。

心中で自分を罵倒する。責めたてる。

カナエちゃんは、何を、幾つ、持っていた。

恐怖症ってのはどんなのか、あたしは知っていただろ。他者にはそれを理解できないんだ。あたしは暗いのも、先のとがった物も、男も、嫌いであっても怖くは無い。大抵そうだ。その人しかそれを理解できない。その恐怖を。

それは、どれだけ不安だろう。どれだけ寂しいだろう。どれだけみじめだろう。

カナエちゃんはあたしになんて言った。『笑わない？』って、不安そうに訊いてたじゃないか。自分は真剣に悩んでることなのに、それを理解されない。どころか笑われてしまうかもしれない。それは、かなりの不安と恐怖だ。あたしにだって似たようなものがあるんだから、わかってるはずじゃないか。

あたしとカナエちゃんはまだ知り合ったばかりだ。一日と経過していない。あたしは今日いきなり現れた同居人に過ぎない。全くの他人じゃないか。そんな奴に、そんな不安を抱えたまま全てを話せるわけが無かったんだ。だから、あたしが訊いても首を振った。

ちゃんと、覚えておいてあげればよかった。気を配っておくべきだった。

思えば、筆談での口調も、そんな不安や恐怖を隠して馬鹿にされないようにという、カナエちゃんなりの防衛手段なのだろう。

——いまさら、こんな風にいつまでも自分を罵倒していても意味

が無い。

「カナエちゃん。もう、泣き止んで。大丈夫だから」

あたしはベッドに入り、いまだ泣き止まないカナエちゃんをそっと抱きしめる。

「ごめんね。ちゃんと気付いてあげればよかった」

カナエちゃんの身体が震えている。ずっと不安で、寂しくてそれでも言い出せなくて、一人でこうしていたのだろう。

身体が、とても冷たい。

「大丈夫だよ。もう、泣かないで。一人ぼっちじゃ、ないから」

ぴくり、とほんの僅かにカナエちゃんが反応した。

おそろおそると上げられた顔は涙でぐしゃぐしゃになっている。

真っ赤になった瞳が不安げに揺れ、問うてくる。

ほんとう？ と。

「うん。一人ぼっちじゃないよ。あたしが居るから。一緒に居てあげるから」

そっと頭を撫でてあげると、カナエちゃんはあたしの身体に手を回し、胸に顔を埋めた。

シャツが涙を吸って少しづつ濡れていく。

「落ち着いた？」

カナエちゃんのやわらかな亜麻色の髪を梳くように撫でながら訊くと、あたしの胸に顔を埋めたまま僅かに頷いた。盛大に泣いたから顔を上げるのが恥ずかしいのだろう。本当はすごく臆病なのに強がって見せるほどの性格なのだから尚更。

そんなカナエちゃんがすこし愛らしい。

しばらく、幼子をあやすように背中をぽん、ぽん、とやさしく叩いてあげる。こうされると、意外と落ち着くものなのだ。誰でも。

頷いたけど、カナエちゃんはあたしの胸に顔を埋めてまま、若干しゃくりあげるようにしている。

あたしは、毛布を寄せるとそっとカナエちゃんの肩にかけてやる。

今は四月ちよい前。日中ならまだしも夜は冷える。あたしはシャツに短パンで、カナエちゃんはピンクの薄手のパジャマだ。さすがに寒い。

そう言えば、あたしもあのことで泣きまくってた時、兄貴に今と同じようなことしてもらってたな。

そんなことを、あんな夢を見たせいか思い出す。……不覚だ。なんか、いろいろ。

ふと気付けば、カナエちゃんの震えは止まっていた。胸元からは、規則的な息使いが聞こえる。

——泣き疲れて、寝ちゃったか。

あたしは、そっとカナエちゃんを布団に横にすると、その手を握って自分も横になる。

一人用のベッドは二人で寝るには狭いけど、苦ではない。

夜中に起きてしまってもいいように、電気はつけたまま。一人じゃないという言葉の通り、あたしは傍にいる。

頬についたままの涙をそっと拭ってやり、あたしも目を瞑る。

明日は時間どおりに起きれるだろうか？ ……多少の寝坊は、いいよね。

「おやすみ——」

朝のひとこま

ちゅんちゅん——。

「うるさいわ……」

不機嫌絶好調な声があたしの口から漏れ出た。微妙に声にドスが利いてる感じがするのが我ながら素晴らしい。……なにがだろう。どうやら朝であるらしい。目覚まし時計なんて安眠妨害装置はかけていないから、もつとぐっすり眠れると思ったのに。

鳥め……。

訪れた朝の喜びに囀る鳥たちに、そんな呪詛めいた思いを勝手に抱きながら起き上が——

「う？」

ろうとして、右手に圧迫感。それと温かさと柔らかさ。

見ると、あたしの右手、というか右腕はカナエちゃんに抱え込まれていた。そりやもうしつかりと。

カナエちゃんは微笑ましくなるほどの安らかな寝顔で丸くなって寝ている。寝相まで小動物めいていることにたまらない愛らしさを感じるのは、気のせいではないはずだ。

泣いた跡はもう目立たなくなっていた。まだ、ちよつと瞼がはれてるかな。けど、顔を洗えば大丈夫でしょ。

時計の針は七時を差している。早くも無いし遅くも無いと言ったところだろうか。欲を言えばもう少し寝ていたい。けど、これで二度寝——いや、三度寝をすると起きるのは絶対に午後になるな。

横を見る。何処までも平和そうな寝顔が至近距離にある。嗚呼、こんな妹欲しいかも。着せ替えとかすごいやりたい。家族が男ばかりで、しかもあたしは末っ子だから。本気でそう思う。

カナエちゃんのやわらかすべすべほっぺを、自らの欲望に従いぶにぶにといたずらしてみる。

何度かやると口をうにゅうにゅと動かして眉をしかめた。そんな

顔も可愛いぞカナエちゃん。アレだな。こういうのは不公平とかじゃなく適材適所なのだろう。……あたしとかだと――。

思わず失笑してしまう。柄じゃない。

昨日のことかわかったが、カナエちゃんは一度寝るとなかなか起きない。だから、いたずらし放題なのだ。もう、ホントかわいい。

ぷにぷに。

眉をしかめる。

こちょこちょ。

身をよじる。

――嗚呼、おもしろいな。かわいいな。もっとやりたい。いたずらって楽しい。

けど。休憩。

あたしはさっきの起き上がろうとしたときの、中途半端な姿勢のままなのだ。右手はカナエちゃんに抱かれて、左手は上体を微妙に起こしたのを支えてる。左手が、ちよいと痺れてきた。カナエちゃんはまだ起きる気配が無い。

ばふっ、とあたしは再び横になる。

どうしようかな。もう一回寝ようかな。

息がかかるほどの至近にある、カナエちゃんの安らかで犯罪的にかわいい寝顔を見ながら思う。このまま寝ると確実にお昼までは起きれないよね。けど、この寝顔を見ていると今日はこのまま寝てよう日にするのも魅力的に思える。あ、カナエちゃんが起きるまでこの寝顔を見ているのも良いかもしれない。

そういえば消灯時間は聞いたけど、起床時間は聞いてないなあ。

何時なんだろうか。後で聞いとかなきゃなあ。

そんなことを考えているうちに、あたしは目を閉じてしまった。

まあ、いいや。素晴らしきかな寝てよう日。こんな日もいいさ。

ああ、電気まだ点けたまんまだ。

ゆさゆさと身体を揺らされる。その揺らし加減がどうにも絶妙で

気持ちがいい。どんどん深い眠りに……ぐう。

揺れが止まった。今度は頬をぺちぺちと叩かれる。力は全くこもっていない。勢い良く触ってるみたいな感じ。

おろおろと困っている風な様子が伝わってくる。本当はもう起きているのだけれど、このままもう少し寝ているふりをしよう。いろいろと楽しそうだ。

再びゆさゆさと揺らしてくる。ふっふっふ。カナエちゃん、きみは全くわかっていないね。そうして揺らすのは逆効果さ。揺らし加減が絶妙すぎる。すんごくいい気持ち。

カナエちゃんは起きてからあたしが横に居ることに驚き、一通りおろおろした後にくこうしてあたしを起こそうと色々やっているが、成果は出ていない。実際あたしは起きているのだが、最終的にカナエちゃんがどういう手段に出るのか気になるので、こうして寝たふりを続けている。

あれだね。男子が好きな女子をいじめるのと同じような感覚。男子の心理がどうなっているのかなんて知らないが、きっとこんな感じだと思われ。

と、そんなことを思っているとカナエちゃんがベッドから降りた。どうする気だ？　と思っていると扉の開く音がして……、閉まる音がした。おおぅ！　見捨てられた？　とか思って身体を起こす。からかいが過ぎたか？

とか反省しようとしたらまた扉の開く音。あたしはとりあえず急いで寝たふりを再開する。

「ホントだ。十一時なのにまだ寝てる……」

呆れと苦笑を混ぜたような声が聞こえた。モミジちゃんだ。

カナエちゃんは自分で起こすことは不可能と考え、隣室のモミジちゃんを呼びに行ったらしい。

「この時間まで寝てるソノ先輩もだけど、カナも今まで寝てたんでしょ。いつも言うけど、ダメだよ。もう少し早く起きないと」

たしなめるようにモミジちゃんはそう言う。

むむ。いつまでも寝てると——いや、寝たふりを続けていると、いざ起きた時あたしまでモミジちゃんにお説教されちゃいそうだな。この流れだと。そろそろ起きますか。

そう思い、起きようと——、

「ところで、なんでソノ先輩はカナのベッドで寝てるの？」

そんな台詞が聞こえた。気のせいだろうか。若干、モミジちゃんの声に怒り、とまではいかないまでも、不快げなものが含まれている。

あたしは思わず寝たふりを続ける。

「うん。わかってるよ、カナのことは。けど、何で言ってくれなかったの？……迷惑かもって？ そんなことあるわけないよ。前にも言ったよ。わたしはカナのことが好き。迷惑なことなんてあるわけない」

おおー！？ なにやら怪しげな展開になってきましたですよ？

どうしよう。起きるに起きられないんですけど……。

ああ、けど好きってのは友達としてかも。そうそうそうだよ。なにも女子校だからって皆が皆オオカミさん系な訳じゃない。偏見はいけないね。しっかりと落ち着けあたし。

あたしがそんな風に軽く混乱している間にもモミジちゃんの責めるような言葉は続く。

「うん。わかってる。だから、カナの答えは期待してない。けど、わたしはカナのこと好きなんだから、遠慮とかしないで欲しい。もっと、今までのように頼って欲しい」

そこで、モミジちゃんは言葉を切る。カナエちゃんの言葉を聞いているのだろう。

カナエちゃんは喋れないから、モミジちゃんの言葉から推測するしかないけど、どうやらカナエちゃんは自分のことを好いてくれているモミジちゃんに、いろいろ遠慮しているらしい。

「そうだね。部屋はお互いに別だし、ソノ先輩にはちょっと迷惑かもしれない。けどさ、ならわたしの部屋に来れば良かったんだ。わ

たしと同室の子は、まだ帰省中なのカナも知ってるでしょ？ ……
……。わかった。わたしもカナを困らせたいわけじゃないから、もうやめる。だから、そんな顔しないで。――けどね。忘れないで。わたしは、カナのためなんなんでもしてあげるから」

最後のほうはカナエちゃんの耳元で言ったのか、とても小さな声だったのであたしには聞こえなかった。

あたしは、どうやら誤ったらしい。

何をつて？ そもそも最初の選択肢かな。今さらそんなこと思っても、遅いんだけどね。

気まずい思いをしながら寝たふりを続け、そう思う。

荷物・前

正直言うと、ものすごく気まずい……。

あのあと、あたしはモミジちゃんによって丁寧に起こされた。おかげで、起きていたのに別の眠りにつくところだったよ。……濡れタオルはダメでしょう。常識的に。

モミジちゃんの告白がよほどショックだったのか、カナエちゃんはあたしがモミジちゃんに起こされたとき既に意気消沈していて、話し掛けても上の空だった。今も、肩を落として俯いている。

寝たふりをして全部聞いていただけに、こう言うときなんと声をかければいいのか余計にわからない。

モミジちゃんはモミジちゃん、そんなカナエちゃんをぼんやりと眺めていて、あたしが話し掛ければ一応反応してくれるけど、すぐに意識がカナエちゃんのほへ行ってしまふ。

どうしろってのよ。

あたしが手持ち無沙汰にベッドに座って文庫本を読んでいると、救いの手が差し出された。

コンコン、とノックの音。二人とも反応しないのであたしがなんでせう？ と扉を開ける。

そこにいたのはお京さんだった。

「こんにちは苑さん。寄宿舎にはなれた？」

人懐っこい笑みを浮かべながら、お京さんはそう言う。

「いやいや。慣れたもなにもまだ一日しかたってませんし」

苦笑気味にそう返すと、それもそうねとコロコロと笑い出した。つられてあたしも笑う。笑っておく。

「それで、どうしたんですか？ 世間話なら大歓迎ですけど」

「そうね。それもいいわね。たしかカフェテラスはいつも空いてたはずだし。けど、それはまた今度ね。苑さん宛てにお家からお荷物

が届いてるから、それを知らせに来たの」

はやつ。

昨日の今日で荷物が届くなんて思っていなかった。すごいな黒猫。はやいな黒猫。出前迅速落書き無用なその速さにお客様はサプライズしつつも大満足さ。誉めて使わすほうらニボシだ。好きだろニヤンコめ。

「私も歳だし、荷物も多いからエントランスホールに荷物は置きっぱなしなの。誰かと一緒に持って上がってね」

「了解です」

やることがるから、とお京さんは帰っていった。

さて、あたしが送った荷物はダンボールで二つ分。サイズは中くらい。ガンバレば一人で持って上げれるが、何せここは三階。ちよいとばかりきつい。正直言うヘルプで誰かに手伝ってもらいたい。さて、だれにするかな。て、決まってるけどね。

「モミジちゃん。手伝って欲しいことあるんだけど、いい？」

「……………」

返事がない。ただの屍のよう——。昨日もやったなこれ。ダメだぞ早速の二度ネタなんて。そんなことではすぐにマンネリ化してしまう。マンネリ化はよくない。円滑な夫婦関係を築くためにも適度な刺激は必要不可欠なのだ。……誰と誰が夫婦やねんっ。

誰も突っ込んでくれない脳内マンザイ。ボケと突っ込みはセルフサービスでお届けいたします。お冷はあちらにありますので。にっこりスマイルだウェイトレスさん。笑顔はいつだってノーマナー。……なんだろうね。盛り上がれば盛り上がるほど空しいこの気持ち。それはまるで冬の木枯らしのよう。なんとなく詩人ぽくておセンチな気分。まあ、冗談だけど。

「おーい。モミジちゃん」

「え？ ああ、はい。なんですか？」

二度目の呼びかけでやっとモミジちゃんは反応してくれた。これで無視されたあたしはスパイラルせにゃならんところだった。

「荷物を運ぶの手伝って欲しいんだけど、いいかな？」

「ええ、いいですよ」

モミジちゃんは頷くと立ち上がった。

それに気づいていないのか、カナエちゃんは無反応。顔を上げない。むむ。このままだと一人ぼっちにしてしまう。

「おーい、カナ」

「カナ。ソノ先輩の荷物を運ぶの手伝いに行くよ」

あたしが言う前にモミジちゃんはカナエちゃんにそう呼びかける。カナエちゃんのはつと顔を上げると、モミジちゃんを見、あたしを見頷いてから立ち上がった。

なんじゃらほい？

首を捻りつつもあたしたちはエントランスまで荷物を取りに降りる。

広いエントランスにぽつんとダンボールが置かれているのはどうにもミスマツチで、なんだかとてもシュールだ。

まあ、それはいいのよ。それはね。なんとなくわかってたことだし。今さら今さら。

それよりも、だ。

「三つ……」

「三つですね」

あたしの呟きに、律儀にもモミジちゃんはそう答えてくれた。いい子だねホント。

あたしが送ったのは二つだ。けれど目の前にあるのは三つ。他の人のかと思ったが宛名は『椎本 苑』同姓同名の人がいない限りがあたり宛だ。つまりこれはあたしの。

一個多いよ？

しかも、その一つだけなぜか大きい。カナエちゃんくらい小柄なら何とかは入れそうなくらいの大きさだ。

「意外と軽いですね」

モミジちゃんの言う通り、謎の大きな荷物は見掛け倒しでとても

軽かった。空ではないのだが、何が入っているのかはわからない。

「とりあえず、持ってあがろっか」

あたしが中くらいのを一つ。モミジちゃんも同じ。一番軽くて一番多いのは、カナエちゃんが持ってくれたのだが……。見た目だろうか。ついつい、

「だいじょうぶ？」

と言ってしまう。

カナエちゃんはコクコク頷くと軽い足取りで階段を上がっていった。

「軽いとは言え」

「変な感じよね」

大きな目の荷物を軽々運んで階段をあがるカナエちゃんを見ながら、あたしとモミジちゃんはそう呟いた。

いつまでもそうしていたってしかたないので、あたしとモミジちゃんもそれに続く。

部屋に戻る道すがら、あたしはふと思いついたかのように言ってみた。

「今までは、モミジちゃんが一緒に寝てあげてたんだよね」

「はい」

「これからもそうしてあげて、って言ったらどうする？」

「どう、とは？」

「ん？ そのまんまの意味。寝てあげる？」

「それは、カナがそう言ってきたら……」

「そっか」

「あの……？」

あたしの唐突で脈絡のない問いかけに、モミジちゃん是不審げにしているがあたしはそれを軽く無視する。気付いてないみたいなそぶり。

「カナエちゃんて以外と足早いね。急ご」

あたしはモミジちゃんを振り返らずにそう言うと、足を速めた。

結論。あたしにこう言う人間関係のあれやこれは無理。普通のならまだしも、そこに恋愛感情が入ると異世界だ。

今のでわかった。モミジちゃんはカナエちゃんのことと言葉通りに好きなんだ。モミジちゃんは隠そうとしてたけど、逆にわかりやすい。

困惑と焦燥。そしてもどかしさ。

朝のことから今の答えを通して、それが窺えた。

やだなあ。なんだってあたしはこんなことに――。

考えても意味のないことをしそうになったあたしは、電源を消すみたいにその思考を絶った。

荷物・後

カナエちゃんは実は意外と足が早い。あたしが追いついた時にはすでに部屋の前にいた。

いたのだが……。

なにしてんだらうね？

カナエちゃんはなぜか自分の部屋の前でおろおろしていた。部屋の前を通り過ぎてみたり、戻ってきてみたり。普通に怪しい。怪しいがどこかかわいいと思ってしまうのは、何故だろう。

アレかな。それは荷物を両手で抱えてドアノブをまわせないということをあたしがわかつているからかな。

てかね、カナエちゃん。荷物を降ろせばいいのだと気付こうよ。別に置いたからって爆発するわけじゃないんだから。

そんなことを思っているのなら、早く行って開けてやれと思わないでもない。が、それじゃあつまらないじゃないか。

「……カナ。荷物をおろしなよ」

追いついたモミジちゃんは呆れ気味にそう声をかけた。

言いながらもモミジちゃんは足早に部屋の前まで行くと、自分でドアを開ける。カナエちゃんは赤くなって自分のやっていた無意味な行為を恥じていた。

あたしは、それを黙って眺めていた。

傍観者ソノちゃん。

なんかダメそうなタイトルだ。主人公は何が合ってもただ黙って事の成り行きを見守るだけって、絶対につまらないぞ。てか主人公のいる意味が存在しないと思う。

なんてバカなことを考えながら、あたしも部屋へと戻る。

「ソノ先輩。荷解き、手伝いましょうか？」

「いいよいいよ。服とかだけだし。すぐ済むから」
それよりも、だ。

問題はこの身に覚えのない、謎の大きな荷物だ。予想はつくけど気になるものはしょうがない。

謎を解くためのヒントは、軽い。ということだけ。宛名はあたしの名前だったから、あたし宛の荷物であることに間違いはない。さて、

「どうするかねワトソン君」

「はい？」

二人にそう呼びかけてみるが、モミジちゃんは何言ってるんだ？
見たいな顔で首を傾げ、カナエちゃんは

『しるか』

と素っ気無い。

お姉さんは悲しいよ。なんてのりの悪い子達なんだい。

どこかのおばさん風に心中で愚痴りながら、ガムテープを勢いよくはがす。

何が出るかな。何が出るかがワカラナイ。

鼻歌交じりにあけた箱の中から出てきた物は――

「ぬいぐるみですか……」

……だねえ。

出てきたのは一抱えほどもある大きさのぬいぐるみ。しかもこれは見覚えがあるぞ。って言うかこれは、この子は――

「マ、マザー……」

あたしはそう呟いていた。

この大きなイモムシの形をしたぬいぐるみは、あたしの一番のお気に入り。ぬぐるみで名前はマザー。生別不明の枕にもなる便利でキュートなぬいぐるみだ。

しかし、なぜこれが。

とかは思わない。

どうせ、兄貴が勝手に送ってきたのだろう。まったく。余計なこ

とをしてくれるものだ。

あたしはマザーを床に置くと箱をひっくり返す。敷き詰められた、プチプチと鳴る例のビニールクッションの、なぜか中に思った通りに手紙がはいっていた。どう考えても中はおかしいだろう。

ピンクの封筒でハートのシールつきだったのは、軽く無視する。

『親愛なる妹にして我が家のお姫様であるかわいいかわいい苑ちゃんへ（ハートマーク）』

最初の一行にそう書いてあった。

「うざっ！」

思わずそう叫ぶ。

咄嗟に捨ててやろうかと思ったが、書いてあることが少ないので我慢して読んでやることにする。これで長ったらしく色々書いてあったら、読まずに引き裂いてゴミ箱に入れるところだ。

『ソノちゃんが寂しさのあまり夜枕を濡らさぬよう、苑ちゃんお気に入りの子を送ります。』

追伸 お兄ちゃんたちは枕を濡らすかもしれません』

……………だからどーした。

つか、あたしを幾つだと思ってやがるんだあの愚兄どもは。失礼にも程がある。たしかに、あたしの部屋のぬいぐるみの多さは一見すると寂しさを紛らわせるためにも見えるかもしれんさ。けどな。そのぬいぐるみを頼みもしないのに買ってきたのは何処の誰だ。買うなって言うのに買ってきて。おかげであたしの部屋はめっさ賑々しいわ。友達を入れたときのあの「意外と女の子らしいのね」って台詞でどれほど恥ずかしい思いをしたか。

ぐあー！ 思い出すだけで腹が立つ。

あたしが怒りのオーラを立ち上らせていると、くいくい、と服を引っ張られた。

『マザー？』

カナエちゃんだ。ホワイトボードに短くそう書かれていて、首を傾げている。

「そう。マザー。この子の名前」

このイモムシのぬいぐるみは意外と可愛い。本物のあのうによりにも幾倍も愛らしい。見た目的にはNHKの教育番組でやっているあの粘土の青虫(?)のニョッキに似ている。

カナエちゃんはそれきり黙ると、マザーをじっと見つめている。

偶然か、マザーも顔はカナエちゃんのほうを向いているので、見つめ合っているようにも見えてしまう。

「なんでマザーなんです?」

モミジちゃんが訊いて来た。もっともな質問だと思う。これはどう考えてもマザーなんて名前の似合うぬいぐるみではない。

それなのにマザーなんて名前なのはちゃんと理由がある。それに、その理由がなければこのぬいぐるみを好きになるのは、あたしには難しかっただろう。

あたしはカナエちゃんが見つめ合っているマザーを手に取る。

その際カナエちゃんが、おもちゃを取り上げられた子供みたいな顔をしたと思ったのは、気のせいだろうか。

そんなことを思いながら、マザーの背中のファスナーを開け、中からソレを取り出す。

「これが理由」

中からは幾つもの色鮮やかな手の平サイズの蝶々のぬいぐるみが出てきた。その数、全部で二十五。

「へえ、すごいですね」

モミジちゃんは微笑みながらそう言い、カナエちゃんはたからものを見つけた子供みたいに目を輝かせながら、蝶のぬいぐるみを手に持って見つめていた。

ああ、そうだ。

「ねね、カナエちゃん。これ、あげよっか?」

あたしの思いつきに、カナエちゃんは驚いたようにあたしを見る。もう、すごくわかりやすい反応だ。

『なんで？ 先輩のдар』

あいかわらず見た目とかけ離れた口調だ。今はまだ違和感があるけど、そのうちなれるだろうな。

「欲しいならあげようかなって」

カナエちゃんは顔を輝かせた。

と、思ったらそっぽを向いた。

ああ、わかりやすいなあ。もう。次になんて言うかがわかつちゃうよ。顔がニヤケそうになるのを堪えるが、こんなにも難しいことだとわ……！

『誰も欲しいなんて言ってないだろ』

そこまで書いて、

『勝手なこと言うなよ』

消してきゅっきゅっと新たにそう書いた。

けど、普段なら達筆な文字が変なふうに変る。本当は、すごく嬉しいのではないだろうか。けれど、正直にそういえないのだから。

ちょっと、からかってやりたくなるね。

「あ、そっかあ。なら、モミジちゃんいる？ あたし、家にたくさんぬいぐるみあるし、寄宿舍くらいは無くてもいいんだ」

「え、わたしは」

バン！

と、大きな音がしてモミジちゃんの言葉は途切れた。

バンバン！

と、今度は二回大きな音が鳴った。

カナエちゃんがホワイトボードを床に叩きつけていたようだ。声が出ないから、こういった方法を取るのだろうけど。そんなに強く叩くと壊れるよ？ カナエちゃん。

『いらなんなんていいないし』

見るからに走り書きな文字で大きくそう書かれていた。興奮からなのか慌てているからなのか、顔が赤い。きっと、両方だろうと推測。どうだねワトソン君。この推理は。

「けど、欲しくないんでしょ？」

ああ、もうだめだ。顔がニヤけちゃう。

あたしはにへらにへらしながら意地悪くそう言う。こればかりはしかたない。楽しい状況で笑っちゃいけないなんて拷問だもの。

「カナ、欲しいならそう言いなよ」

モミジちゃんが苦笑いながらそう言うと、カナエちゃんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

あらら。からかいすぎた？ いやいや。別にこれくらいのことで……。

『ほしい。ほしいから早く寄越せ』

カナエちゃんは顔を隠すようにしてそう掲げた。俯いていたと思ったらそんなことを書いていたらしい。文字はいつも通り、いや、いつも以上に達筆で最初なんて書いてあるかわからなかった。あの蛇ののたくるような文字は勘弁してください。読むのが苦しいです。てか、寄越せって……。

「寄越せ〜？ ほしいなら、それなりの態度を見せてくれないと」
まだからかうことにした。

「ソノ先輩？」

何故だろう。背筋がゾワリとした。総毛だつとはこのことかもしれない。

「カナをからかうのは、いい加減、やめてくださいね」

笑顔だ。すごい笑顔だ。けれど、全然笑ってないよモミジさん。カナエちゃんはカナエちゃんて涙目で睨んでくるし。

あ、あれれ？ あたしってば悪者ですか？ え？ そんなに怒るほどのことなですかよ？

とりあえず。ものすごく居心地が悪い。なんとなく、あたしは悪いことをしていた気がしてくるし。なんだろうね。胸がこう、ずきずきする。

はっ！？ まさか……これが恋？ ——て、なんでやねん。

あたしはウサギの如き速さで部屋からすたこら逃げ出しながら、心中でそんなつまらないマンザイを行っていた。

ついでだから、探索でもしようかねい。

お散歩（迷子）

最初も思っただけだね。ここ。すつごく広いのね。世界的有名
ネズミの運営（？）するお国には行ったことは無いけど、一日で全
部は回れないという話から推測するに、多分その半分か半分強くら
い。

いや、知らんけどね。大げさすぎかもしれないけどね。もしかし
たらもっと広いかもだし。だって、まだ全部を周ったわけじゃない
わけだしね。

と、言い訳言い訳。

さらにね。一々建物と建物の間が結構開いちゃってるのよ。ほら、
遊園地とか。アトラクションとアトラクションの間が開いてるじゃ
ない？ そんな感じ。

道とかもいい感じ整備されてるから、そこらの遊歩道よりもかな
り質がいい。さすがお嬢様学校。現在はずうでないにしても、色々
贅沢だね。

そんなことを思いながら、自室から逃走し、寄宿舎からも出てみ
たあたしはその整備されたい感じの道をぶらぶら歩いている。鳥
の囀りとか、いい感じ。朝は呪祖を吐いたけど、それはそれ。これ
はこれ。いいものはいいのよ。

けれどもここで問題が一つ。

あたしはお散歩を、時計が無いから多分だけど、二時間くらいは
している。

正直言うかね。そろそろ帰りたい。荷物そのままだし。マザーし
か開けてないし。きつと多分もう怒ってないだろうし。

んじゃ帰ればいいじゃんとか思うけど、それが出来ないから困っ
てる。

あたしは、またもや迷子です。

へるぷめー。

そんな妙ちきりんな電波を、とにかく送信してみる。誰かに届け
あたしのこの思い。ああ、なんかロマンチック。電波なのがちとイ
タイ。けれどこれも、たまにビックリサプライズな味をかもしれ出す
ソノちゃんテイスト。きちんと味わえ。

一人ぼっちで若干不安な精神下だと、独り言ならぬ一人思いもは
かどるね。

「ここどこー？」

なんとなく、弱々しく呟いてみる。ちなみに、通算六回目。あと
一回でラッキーセブン。何かいいことが起こるかも知れない。しれ
ないけどすぐに七回目に突入するとありがたいがたみが無いので、自制
制。お楽しみ後にとっておきたいじゃない。けれどあたしは好きな
ものは出来る限り最初と最後に食べる人です。最後だけだと物足り
ない。最初もしかり。

そんな寂しさを紛らわすための思考をせっせとやっている、な
にやら人の声。これはしめたとその声のほうへ足を動かす。

――動かしてぴたりと停止。

アキラさんだったり、アキラさんと同じような人が昨日と同じよう
な状況の最中だったら、どうしよう。

考える。悩む。……決定。

迷子続行よりもなんぼかマシです。

あたしはその声のほうへとテクテクがさがさ移動する。

歩道から外れて茂みを掻き分けてすこし歩いたところ。そこに、
存在した。

息を飲んだ。

春色の植物。

暖かな春の陽射し。

陽光に照らされ舞い躍る桜吹雪。

そこは、どこか浮世から外れ静謐めいていて。

舞い散る淡い桜色の中には、目を瞑り音を口ずさむ女性。

歌でも詩でもない。いや、わかってる。英語のような発音で空気

に溶けるそれは歌だ。

わかってる。理解してる。それでも、それは音だった。
聴き惚れていた。

どんな賞賛の言葉を贈ろうとも、それは意味が無い。全ては、この音の前では霞む。

きれいな声だった。

けれど、とてもつらそうな声だった。

悲しそうだった。

痛ましい声だった。

けれど、どこか安心させられた。

不思議だ。

気付けば、音は止んでいた。

「いるんだろ？ 別に咎めはしない。出てきなよ」

一瞬、誰に行っているのかわからなかった。むしろ、そこに自分がいたという事実すら忘れていた。

あたしは、ああ、あたしに言ってるのか。と、ぼんやりとした頭で思うと、いつの間にか隠れるようにしていた木の陰から出て行った。

「……いつから聴いていた？」

どこか中性的な声だった。

その言葉には咎めるような響きはなかった。ただ、疑問に思ったことを訊いてるだけのようだった。

「ちよっと前から」

「そう」

それきり、口を閉ざしてしまう。

やっぱり、美人だった。きれいだけど、女性的な意味ではなく。なんというか、かっこいい美人だった。

ショートカットのくすんだ金髪。鵯色の瞳。シャープな顎。どこか、透明な存在感。

鵯色をした瞳は片目だけ閉ざされていた。ただ閉じているのか、

開けない理由がるのか。それは見ただけではわからなかった。

「……………キミは、新人生？」

唐突にそう訊かれた。

「え？ ああ、はい」

そんなことを訊かれるなんて思っていなかったので、はつきりしない間拔けな答え方になってしまった。

「そう。……やっぱりね」

そう言うと、クスリ、と静かに笑んだ。そんなしぐさが、妙に女の子らしく見えた。

「……………寄宿舎以外では、制服着用。先生達に見つかったら、怒られちゃうよ？」

なんのことだろう？ そう首を傾げた。

目の前の人の服装は制服だった。なんとなく、自分の服装を見下ろす。

短パンにハイネック。部屋着のままだった。

「……………この生徒なら、常識だよ。けど、新人生ならしょうがないよね。きつと、見つかったても大丈夫だろう」

やっぱり注意くらいはされるだろうけど、と微笑んだ。どこか儂い微笑み方だった。

なぜ、この人はこんなに悲しそうに、寂しそうにしてるんだろうか？

「……………大丈夫ですか？」

思ったら、つい口から出ていた。やば……。そう思ったが今さらだった。

いきなり変なことを訊かれた彼女は、きょとんとしている。

「……………何が？」

「あ、いいえ。なんでもないです。忘れてください」

あたしは咄嗟にそう言うと、なぜか変なことを言った自分が恥ずかしくなった。踵を返して、逃げるようにダッシュでその場を後にする。

変なこと、だろうか。

変なことを言ったと思っている自分に、そう問い掛ける。

確かにあたしは思ったんだ。悲しそう。寂しそうだ。

錯覚、だったのだろうか。

思うと途端に自信が持てなくなってきた。どんどん自分がおかしなヤツに思えてくる。きっと、変なヤツと思われたに違いない。ぬあー。初対面での印象最悪だわ。てか、学年とか聞けばよかった。上手くいけばお友達になれたかもしれないのに。かといって、今から戻るのも、それはそれでちょっと辛い。そもそも、道なんて――。はっ、とした。

本日二度目の逃走。

一度目の逃走により迷子だった。

人に出会えた。

帰り道を訊けばよかった……。

自分が迷子だということすら忘れていたあたしは、こうして迷子を続行せにゃなら無くなった。それも、部屋着のままで。先生達に見つからぬよう、慎重に寄宿舎に戻らねばならない。

何か言われるのが嫌だとか、中学生みたいなこと考えずに迷子になりました助けてティーチャー、と言えぱいいのにかと思うけど、そこはそれ。そう簡単な話ではない。

てか、先生達ってやっぱりいるんだ。まだ休みなのに。

――あたりまえか。

赤ずきん

迷子の迷子の子猫ちゃん。

心中で口ずさんでいると、空しさと寂しさと何かいろんなものが程よくブレンドされたテイステイーな気分になってきた。

惜しむらくは、犬のお回りさんがいないことか……。

どーでもええねん。

あーこまった。なんかお日様の色が変わってきている気がするの
は気のせいかな？

今何時よ。

「ソ・ノ・ちゃん」

そんな声が聞こえたので、思わず振り返ろうとすると、

「うわっちゃ」

いきなり背後から抱きつかれた。ほんとにいきなりで予想なんて
していない。全くの不意打ち。それも結構勢がいい。

結果。どうなるかはわかるだろう。

あたしはふんばることすら出来ずに、倒れた。受身すら取れな
かったので顔面から。

「いったあい」

襲撃者はあたしの上でなでるような声でそう呟いた。

痛いのはあたしだ！ ああもお、鼻血は辛うじて出てないみたい
だけど。すぐくいたい。

痛さと怒りに震えていると、甘い香りが鼻腔をくすぐった。なん
か、頭がぐらくらするような……。フレグランス。

けしからんことに、あたしに突撃してきた無礼者はなかなかあた
しの上からどうこうとしない。どころか、

「ひゃあ」

ふっ、と耳に息を吹きかけてきた。思わずへんな悲鳴と共に身体
をくねらせてしまった。

「――このっ」

怒りで顔を赤くしながら振り返ると、

「こんにちは、ソノちゃん」

あたしの上であたしに抱きつくようにして微笑んでいたのは、アキラさんだった。なぜかすごい笑顔だ。輝いてる。上機嫌らしい。って、んなことはどうでもいい。重くは無けれど早くどいて欲しい。

「アキラさん、早くどいてください」

あたしは刺々しくそう言う。しかたないだろう。どう考えても失礼なのはアキラさんで、あたしは完璧に被害者だ。あたしはそれでも敬語を崩さなかった自分を誉めてやりたい。えらいぞーソノちゃん。わーありがとー。棒読みな感じがするのは気のせいさ。

「わたし、重い？」

笑顔から一転。アキラさんはそれはそれは悲しそうな顔になった。声は湿っぽいし、目には涙まで貯めて潤ませている。この役者め。あたしは反射的に重いというそうになるのをどうにか堪える。実際重くないし。あたしより身長あるのにどうしてこんなに軽いんだ。理不尽だ。

そんなふうにとっかの誰かにキレてみる。

ああ、てか。ホントにどいてよアキラさん。あたしはこんな所で寝る趣味は無いんだから。

「重くないですよ。いいから、どいてくださいっ」

「い・や」

――聞き間違いかな？ いま、いやとか聞こえた気がするデスよ？

「ソノちゃんて胸小さいのね。かわいい」

なぜか上機嫌ルンルンなアキラさんはあたしの胸に手を回し――

「って、何してんで――っん」

思わず、変な声が漏れる。

「あらかわいい声。ね、気持ちいいでしょう？」

耳元でアキラさんがあまったるい声でそう言う。たしかに、気持ち

ち良くないといえは嘘になるし、さっきの変な声のことも弁解が難しいが、

「ちょ、やめてください！」

あたしは立ち上がるとうとするが、どうしても起き上がれない。腕力はないほうじゃないのに。

あたしはそれならと即座に行動を変更。いつまで不可能だったことに挑戦していても仕方ないし、もたもたしてるとオオカミさんに食べられてしまう。それは本気で勘弁。

アキラさんの手を胸からどけようとするが、アキラさんの右手一本にそれを阻まれてしまう。意外と、握力がある。こんなやわそうな外見の何処に？ と首を傾げてる場合じゃないなこれ。これであたしは文字通りに手が出せなくなった。

「やだ、ホントにやめて、くださいっ！」

本気の懇願。くそ、なんて弱々しい。

「ねえ、ソノちゃん？ わたしが昨日言ったこと覚えてる？」

耳元で優しいげにそう囁かれる。それですら気持ちいいと思う、思っってしまう自分に本気で反吐が出る。クソッたれと口汚く罵りたい。誰を？ 自分とこの不埒なクソ女にだ。

意図してかそうでないのか。自分でも判別不能だが、心中であたしはそう思った。

「無礼を働けばおしおき。そう言ったわよね」

黙っているあたしに構わず、アキラさんは耳元で若干強めな口調で囁くと、耳をあま囁みしてきた。それに加え、アキラさんは微妙なタッチで、マッサージをするように胸を揉んでくる。

無礼を働いたのはどっちだ！？ あたしは心中でそう叫びながら、ひたすらに歯を食いしばった。

「あっ——」

いきなり、ぐいっ、と起き上がらされた。思わず食いしばっていた口から吐息のようにそんな声が漏れた。

座り込むような態勢にされた。

アキラさんは服の裾から手を内部に侵入させると、ブラの下にまで手を入れ直にあたしのささやかな胸を、ゆっくりと愛撫してきた。両手はアキラさんの右手に縛られるようにして後ろでつかまれており、動かそうにも動かせない。耳元から、ぴちゃり、ぴちゃりとしめった嫌な音がする。甘く噛まれたり、優しく舐められたり、ホントに不快。アキラさんはうなじや首筋にも、口をつけ、舌を這わせてくる。

イヤだった。不快だった。あたしはそう感じている。なのに、身体はそれを気持ちいいと感じている。

「――くっ、」

立ち上がるうにも、腰が砕くけたのか足に力が入らない。

抵抗したい。なのにできない。

大声でも出して怒鳴りでもすればやめるかもしれないが、そのときに、口からまた変な声が出そうで怖かった。一度そう思うと、声が出なかった。

腹立たしかった。こんなにも脆弱な自分が。情けない自分が。

悔しかった。何も出来ない自分が。安易な選択をした愚かな自分が。

口汚く罵ってやりたかった。喚き散らしたかった。

けれど、無理だった。恥も外聞もかたぐり捨ててそんな暴挙に出るような度胸など、自分にはなかった。

涙が出てきた。

勝手に栓の緩んだ蛇口からは水が止まらなかった。壊れてる。そう思った。

声を殺す。息を殺す。こんな自分も殺したかった。思い出される。思い出すな。

中学校でのこと。

病院での診断結果。

蔑むような目。

同情を孕む目。

見下したような目。

出来そこないの壊れた自分。

——不良品。

それでも、そんな自分でも、そういうことをされれば気持ちいと感じてしまう自分が。いやだと思うのに。無理矢理だというのに。

諦めたはずなのに。そんな自分が、

——赦せなかった。

「——っ、泣いてるの？」

俯き、涙を流すあたしに気付いたらしい。アキラさんの息を飲むような音と声が聞こえた。

ぎりっ、と口の中から音がした。

口中に鉄の味が溢れた。

気持ち悪い。

ぶちっ、という感触が口の中からした。

気道を通って鼻に錆クサイ匂いがした。

気持ち悪い。

閉じた唇から、ぬめった生暖かい感触が流れるのを感じた。

気持ち悪い。

誰かの声がする。

気持ち悪い。

自分を含む全てが気持ち悪い。

眠るように、意識が遠のいていく。

あたしは、手綱を躊躇することなく手放した。

怒り 罵倒

剥き出しの脚や顔をなでる冷たい風に目が覚めた。

なんか、頭の置いてある場所が気持ちいい。あったかくて、ふかふかで、なんか、安心できるような。

思うと、また眠くなってきたけど、寒いから我慢。ああ、けど起き上がりがたくないかも。てか、起き上がれないですよ？ なぜ？

「お目覚め？」

綺麗な声だ。

あたしの顔を見下ろす顔も綺麗だと思った。瞳の紫陽花のような濃い色も。鼻腔をくすぐる香りは、いまだに何の香りやら全くわからない。

「ええ。目覚めましたよ。オオカミさんに突如食べられたはずの赤ずきんちゃんのお目覚めです。さあどこです？ あたしを助けてくれた狩人さんは？」

あたしはそんなことを言いながら、勢いよくアキラさんの膝から頭をどけた。

こんな人に膝枕をされていたとは。しかも、気持ちいいとか安心できるとか。ついに乱心したかあたし。ああ、不愉快。

アキラさんは答えない。どんな表情をしているかは知らない。見る気もないし見たくもない。

あたしとアキラさんはベンチにいた。こんなものまで用意されているとは、さすがだね。屋外テラスとかもありそうだ。

日は完全に沈み、あたりは暗い。西欧的な街灯が遊歩道を小さく照らしている。ああ、完全に寄宿舎の門限破っちゃったよ。しかも僅か二日目で。なんていうスタートダッシュ。我ながら感心する。

高校生になってから不良デビューか。ああ、いや。まだ高校生じゃないか。学校始まってないし。

……どーでもいい。

あたしの胸には、まださっきの不快感が残っている。怒りや悔しさも。

少し涙が流れただけの目は、痛くはない。怒りを感じても、悔しいと感じても流れた涙は少しだけ。

ホントに、自分が不快だ。反吐が出る。

——もう、慣れたけど、それでも。

「あのね、ソノちゃん」

アキラさんがようやく、という感じに口を開いた。

あたしは、開けば何を吐き出すかわからない口を閉ざしたまま、宝石みたいに輝きながら散らばる星を眺める。キレイだと思う。

どんな時でも、月も星も。キレイなものはキレイだ。

「さっきは、ごめんなさい」

……。

「泣くほど、イヤだとは思わなくて……」

……。

「謝っても、許してはもらえないと思うけど……」

……。

「あなたに不快感を与えるためにやったわけじゃないの……」

「なら、何のためにあんなふざけたことしたんですか？ 不快感を与えるためじゃない？ ふざけないでよ。あたしは、十分不快だったわ」

我慢の限界だった。

星を見て心穏やかに。——なんて、そう都合よくいかないらしい。

開いた口は、己の不満を吐き出し尽きるまで閉じることはない。

「誰もがアンタと同じだと思うな。誰もがアンタを好きだと思うな。自分なんでも許るされるなんて思うな。いろんな女の子とそう言うことをしてるからわからないと思うけど、あたしはあんな奴らとは違うんだ。アンタとも。あたしは、これ以上ないくらいに、不快だったわ！」

あたしは、そこで口を閉じた。

感情のままに言葉を紡ぐのはすごく疲れる。恨み言や怒りを吐くなんて、それに追加して余計に疲れる。

あたしは、そういうのはすごく嫌いなのに。

まったく、不快だ。すごく、いや。

「……訂正なさい」

「……はあ？」

アキラさんが何かふざけたことを言い出した。訂正しろ？ 何を？

「訂正しなさい！ わたしのことをなんて言うのもいいわ！ けれど、あの子達に対するさっきの言葉は訂正しなさい！ あんな奴ら。そう言ったさっきの言葉を訂正しなさい！」

いきなり立ち上がって激昂しだした。

きれいに整った顔が、今は怒りから凄烈だ。

あたしは、それを見て諦めた。

こんな人に何を言っても無駄だろう。

あたしはベンチから立ち上がるとアキラさんに背を向けて歩き出した。

もう、いいや。疲れた。心も身体も。こんな時間に帰ったら怒られるだろうけど、まあ、いいや。しょーがない。ああ、そうだ。荷物そのまんまだ。明日やろう。今日はもう無理。カナエちゃんは大丈夫かな。一人ぼっちで泣いてないかな。モミジちゃんがいるから大丈夫だよな。

「待ちなさい」

肩をつかまれる。ああ、もう。鬱陶しい。あたしはもう、あんたの顔を見たくない。声も聞きたくない。あたしの顔を見せたくない、声を聞かせたくない。あんたの近くにいたくない。

だから、もう、構うな！

「あたしは、友達になれかなとおもってたんだ。ちょっとアレだけど、いい先輩だなんて、思ったんだ」

なのに、いや。だから、あたしは言ってる。

「けど、違った。あたしは、アンタが死ぬほど嫌いだ！ 大っ嫌いだ！ 二度と、声をかけるな！ 触れるな！ あたしに、二度と構うなっ！！」

アキラさんは目を見開き、硬直している。その表情が何なのか、あたしにはわからない。だって、もう関係無い人だもの。どうでもいい、同じ寄宿舎にすんでいて、同じ学校にいる、ただの上級生。背景キャラAだ。

あたしは、固まった状態のアキラさんの手をあたしの肩から叩き落とすと、今度こそその場を立ち去った。

もう、一秒でもあの人の前にいたくない。

「……あめ？」

冷たい感触に、雨でも降ったのかと空を見上げるけど、雲一つない。

鳥のフンかなあ？ だとしたら、いやだなあ。

現実逃避気味に、そんな馬鹿なことを、いつも通りに考え笑う。

——寒いな。

はいはい

さてさて。怒りに任せてズンズカ歩み去ったのはいいけれども、思い出してみればあたしは迷子だったわけで。迷子がそう簡単に目的地を目指せるわけもなく。つか、そもそも道に迷ってるからこそ迷子なわけで。道に迷うってことはなんもわからなくてことで。

ああもう、まどろっこしい。

とにかく、迷子の子猫ちゃんは犬のおまわりさんも困り果てて泣いちゃうほど道がわかんないのさ。

今は夜なんだから寄宿舎の光を目指せばいいのかもだけど、そもそもその光が見えない。多すぎだよ、木とか。木とか。木とか木とか。伐採するぞこんちくしょう。

「アレ？ さっきの……」

ばったり、とあたしは門限を過ぎているにもかかわらず人に会えた。それも、あの悲しそうな音——歌を歌っていた人だ。やっぱり片目は瞑られている。

「ああ、歌の人」

「……そう言うキミは、変な子だね。突然逃げ出した」

くすす、と彼女は笑う。やっぱり、かっこいいのにそう言うところは女の子らしくて可愛いと思う。ううむ。不思議さん。

「アレは、もう忘れちゃってくださいよ」

「……そう。ならそうしよう」

くすくすと笑う。なんか、調子が狂う。

「門限過ぎてるのに、何でいるんです？」

「そう言う、キミは？」

「あたしは迷子です」

「そんな胸を張って……。私は、時間に気付かなかったんだ」

「そんなに夢中で歌ってたんですか？」

「うん……。歌うのは、好きだからね」

ニコリ、とかわいく笑う。調子が狂う人だけど、いい人だ。この人。嫌いじゃない。

あたしは彼女の後をついていくような感じで遊歩道を歩いていく。寄宿舎までの道が本気でわからないのだから、仕方がない。

「……自己紹介、してなかったよね。私は小鳥遊 揚羽」

アゲハ？ どこかで聞いたよな。それもすごく最近。おや？ なんだっけ。

ともかく。

「あたしは椎本 苑です」

「ソノ？ ……変わった名前」

「よく言われます」

「ソノ……。って呼ぶね」

「どうぞ。あたしは、アゲハって呼ぶけど、いい？」

「うん」

あたしたちは街灯の小さな光の照らす道を、それ以上話すことなく無言で歩く。

別に話さないことに大した意味はない。ただ、なんとなくだ。多分。

それに、口を閉ざしたアゲハさんはさっきから何かを口ずさんでいる。リズムよく流れるそれは、どこか悲しげで、辛そうで、やっぱりどこかが安心させられる。不思議だ。と、やっぱり思う。

あたしは、それをやめさせたくないから話し掛けない。今は、誰かと話すより、この不思議な歌を聴いていた。

誘蛾灯のように淡く光る街頭の光の下。暗い道を歌を聴きながら歩く。

「先輩っ」

「うわあ」

ようやく部屋についたあたしを出迎えてくれたのは、笑顔で怒るモミジちゃんの静かな怒りの声だった。

あのね。モミジちゃん。迫力すごいよ？ うん。ほんとに怖いもん。なんかね。思わず頭を下げたくなっちゃう。

「こんな時間まで、何してたんですか？」

うん。それはさっきお京さんとか先生とかにも言われた。しかもけっこう怒られた。アゲハは全然堪えてない風で、何処吹く風みたいな感じだったけど。あの調子だと、きっと常習犯なんだろうな。とか思う。

「聞いてますか。ソノ先輩？」

思ってたら、怒られた。

「わたしは別にいいですよ。きっと道に迷ったんだろうなとか思ってたから」

はい。そうです。その通りです。道に迷ってました。迷子になってました。知らない道を一人出歩くのはいけないと思いました。反省してます。

「カナなんて、なにかあったのかもとか、襲われたりしてないとか、いろいろ心配してたんですよ？」

あーそのですね。襲われちゃいましたよ。あはは。

そのカナエちゃんは、見てみれば壁に背を預けて寝ていた。その手とか胸とかには、マザーや蝶々ぬいぐるみを抱いたり乗せてたり、賑やかなことになっている。かわいい上に微笑ましい。むう。なんというコンボだ。

「聞いてますか？」

「はい。聞いてますです。ですから、部屋に入れて欲しい所存でありますです。はい」

あたしは、年下の女の子に部屋の外で起こられていると言うシュールな羞恥プレイを受けている。たまに、何事？ と見られたりしているのがたまらなく恥ずかしいでありますよ。

「あ、ああ。そうでした。忘れてました」

忘れないでよ、モミジちゃん。

あたしは部屋に入ってもらい――あたしの部屋なのに――、それから10分くらいずっと怒られていた。

教訓。モミジちゃんは怒らせないようにしよう。なんか怖くないのに怖い。

（今日のことは、もう、忘れちゃおう）

学校始まり！

あれから、数日経った。

のんびりだらりと入学式が始まるまでカナエちゃんで遊んだり、モミジちゃんに怒られたり、快くお友達になってくれたアゲハの歌を聞いていたりとかしながら毎日を過ごしていた。

この数日で学校の敷地内で迷子になることはほとんどなくなった。今でもまだ怪しいが、そこらへんは気合でカバー。

てかね。生徒手帳に地図が載っていた。それに気付いたのは、今日なんだな、これが。

ちなみに、今日が入学式。

んで、入学式は何の滞りもなく終了。なんか拍子抜け。ああ、家の家族は来なかった。むしろ来させなかった。なにするかわかんないから「来たら絶対だからね！」と言っておいた。いい年した野郎どもがおいおい泣くのは、実に不気味だったことを覚えている。ちよおつとばかり悪いことしたかなあ、と思わないでもない。

「はい。それでは、今日から一年間、貴女たちの担任になった森林樹です。全教師中一番の若手です。よろしくね」

担任の森林先生は童顔にたれ目の全体的にぼわぼわした人で、身長も低いからどうしても大人には見えない。まあ、個人差とかね、あるわけだし。そう言う身体的特徴でとやかく言うのはいけないことだけどね。わかってるけどね。思うわけよ。うそだろ。って。

「あらら。一人以外は皆上がり組みなのね。うーん。どうしよう。自己紹介とか、感単にちゃちゃつと済ませちゃう？」

名簿を見ながらそんなことを言う。その一人つてのはあたしだな。間違いなく。てかですね、先生。ちゃちゃつとって。

「先生、そういうのはやはりちゃんとしたほうがいいのでは？」

見かねてか、一番前の席の子が挙手してそう言う。ちなみに、名前なんか知らない。当たり前だ。

「そう？　じゃあ、ちゃんとやろうかな。――てことで、貴女から順番に名前と後何か適当に」

「へ？」

「はい、すたーと」

わかった。この先生ノリと勢いでじゃんじゃか進むタイプの人なんだ。端から見てる分には楽しいけど、巻き込まれたりした人はたまったもんじゃない。

挙手して意見をした先ほどの少女は最初ぼかんとした後、すぐに気を取り直して自己紹介をはじめた。

「……赤穂^{アコウ} 瑞希^{ミズキ}です。よろしく願います」

姿勢正しくそう言っていると、ミズキさんは静かに席についた。

「……………えー？　それだけー？」

先生はなぜかとても不満そう。まあ、わからないでもないです、先生。

そうして順調に自己紹介は進んでいき、あたしの番になった。

「お。次は新生ちゃんだね。よしっ。名前以外にも最低何か二つは言うこと」

なんですと？

「ちなみに、不平不満は一切受け付けません」

何かを言う前にそう先手を打たれた。すごいニコニコしてる。楽しみにゃー。みたいなそんな笑顔。勘弁してよ。

あたしはやれやれとこっそりと溜め息をつきながらも立ち上がった。最低二つ。何言えばいいのやら。

「椎本 苑です。新生です。寄宿舎生です。よろしく願います」

「えー？　そんだけー」

何故に不満そうですか先生。

「二つ、ちゃんと言いましたよ」

「ダメ。趣味と特技を言いなさい」

はあ。周りを見る。新しいお仲間に、みんな興味心身と言った様

子で、そこに見知った顔を見つけたけど、その人はぼーっと空なんか見ていて頼りにはならない。まあ、どっちにしても頼りにはならないけど。こんな状況では。

「趣味は読書。特技は……。特技は……」

おや？ あたしの特技ってなんだ？ あつれ？ 裁縫？ 上手くもないし下手でもない。必要最低限は出来る。料理？ そこのヤツよりも多少は出来ると思うけど、特技ってほどじゃあない。運動は、そこそこ。

そんな風に悩んでいるあたしを、みんな不審下に見ている。実際はどうなのかしらないけど、あたしにはそう見えた。

特、技……。

——あつ。

「特技は、どうでもいい事をやたら知ってたりします。例えば、無意識と言う考え方は19世紀から20世紀の初頭にかけて発見された概念で、それまでの人達は実に、自分に自分でも説明のつかないモヤモヤとした気持ちがあるということを知らなかつたそうです。だから夢見が悪いというのは、実際に現実が悪いことが起きるのと関係がある、とほとんどの人間は真剣に考えていたわけで、単に無意識が“あんたは疲れてるんだよ”と表層意識に言ってるだけのことを“俺はもうすぐ死ぬ”とか思い込んで決闘したりして本当に死んでしまったりしていたそうです。例えば」

「は、はい。ありがとう。もういいから、ね」

先生がにがしく笑いながらそう言う。見れば、ほかの子達もぽかんとした顔だ。んふふ。兄貴達め。たまには役に立つじゃないか。ちよつとだけ、感謝してあげよう。

あたしは、兄貴達にいろんな事を教えてもらった。時には、一般教養だと騙されてミステリの十戒を覚えさせられたり、英語の早口言葉を習得させられたり、世界一長い名前の人の名前を覚えさせられたりもした。騙されたとわかったときには、無駄なことさせやがってとか、いつつかうんだこんなもの、とか思っていたけど。意外

や意外。思わぬところで役に立つものだね。

それからも順調に自己紹介は進んでいき、あたしはそれを覚えようとがんばりながらも、耳から通り抜けさせていた。

そうして、

「小鳥遊 揚羽。私のこと、知ってる人は多いと思う。とりあえず、よろしく」

いつもの通り片目は瞑ったまま、無感情にそう言って席についた。周りがなぜか溜め息でもつきそうな顔になっている。どこか惚れ惚れ(?)としているような。

なんだろうね。

「日比谷 百乃です。叱られたり、怒られたり、いじめられたりするのが大好きです」

そんなことを思っていたら、そんな、なんですと?! と思うような台詞が聞こえた。聞き間違いだよな。まさか、ね。

「皆さん。出来るだけ、アタシのことを虐げてくださいね」

ニコリ、と育ちよさげな純粹無垢が服を着たようなお嬢様は微笑んだ。

…………虐げてくださいね、って。おいおい?

あたしがぼっかーんとしていても、周りは慣れたものなのか軽くスルーして自己紹介を続けた。

完全に置いてけぼりなあたし。

え、ええー? なんでこんなところでカミングアウトするのさ。

え、てか、ネタだよな。受け狙いだよね。まさか本気じゃないよね? 疑問に答えてくれる人は、残念ながいなかった。

付き合いきれないよ

春。

暦にして四月。それは新たな出会いの予感。

素適な誰かと出会えそうな、知らない誰かと知り合って、友達の輪は広がって。

そんな素適な季節。

——…らしいけどさ。それが万人に通用すると思ったら大間違いなわけよ。現にあたしは今、すんごく素適とは真逆の思いを胸に秘めちゃってるし。

いや。マジよ？ 本気と書いてマジで胸に秘めちゃってる。だつてさ。出すわけに行かないでしょ？

「ねえねえ苑さん。共学ってどんな感じなの？」 「男の人って怖くないの？」 「恋人とかいたのかしら？」

「「きゃー！」「」」

みたいなね。

さつきからこんな感じ。

わかる？ わかんないかな？ つまりね。春ってのは知らない人達と一から始めにゃいかんわけで、しかもそれが内と外というものに分けられた場所の外から内に入ってきたヤツの場合、一どころかマイナスから始めにゃいかんわけで。世間知らずのお嬢様方には色々興味深いらしくて。正直この質問攻めとかどうよ。と思うわけで。そもそも質問するなら答える間を頂戴よと思わないでもないわけで。誰か助けて……。

はあ。話がそれにそれで結局何が言いたいのかわかんないね。これだと。

つまりね？ 面倒だな、と。

自己紹介も終わり、簡単なS H Rも終わったあと、唯一の外部からの生徒であるあたしは、こうして育ちよさげなクラスメイトのお

嬢さんがたに質問攻めを受けている。

おかしいな。あの自己紹介で、ああいうどうでもいい知識を長ったらしく得意げに語るやつってのは敬遠されるものと相場が決まっているのに。なしてここまで人が集まると？

つついどこかの地方の方便が入り混じる。

「ねえ、苑さん？」

止まることの無いお嬢様方の言葉の嵐を、右から左へと流していたあたしは、今度もそうだろうとぼけっと無視していた。だが。

「苑さん？」

今度は間が空いている。ああ。あたしの反応を待ってるんだ。とようやく認識。慌てながらも落ち着いて

「はい。なんです？」

ストレートの黒髪の、言わなくてもお嬢様とわかるような、いかにもな女子が興味津々と話し掛けてくる。

「苑さんは、恋人とかいらしたの？」

恋人？ まさか。そんな質問は正に正に愚問！ こんな調子でスパーンと言いたいが。そんなことしたらどうなるかくらい容易に予想がついちゃうので、泣く泣く却下。

「いませんよ。年齢と一人身暦はイコールです」

冗談めかして言うが、事実だ。真実と言い換えてもいいだろう。自慢できることじゃないけどね。

「そうですの？ 貴女かわいいから、一人や二人いそうなのに」

おいおい。一人や二人って……。それって二股とか言うものだろうに。そんな不誠実なこと、あたしは嫌いだわ。てか、今ありえない言葉を聞いたような……。

そう。かわいい、とか。

誰が？

あたしが？

冗談でしょ？

何ぼなんでもそんなお世辞は苦しいって。童顔に

くせつ毛の、バストもAしかない上に身長も普通なあたしが、かわいい？ やめてほしい。

けれど、そうは思いはしてもそれを顔に出すような愚行はしない。それくらいに思慮深さはある。結構浅いが。

「ありがとう。けど、事実ですよ。それに、あたしは男の人って苦手なんです」

苦笑しつつ控えめにそう言う。

苦手と言うよりも好きじゃない。むしろ針は嫌いと言う方向に偏っている。

理由は、まあ、いろいろある。小学校の時いじめられてたし。中学校のときは思春期真っ最中の男子達はやたら中途半端にエロかったし。

そうは言っても、いじめられる端から張り倒したり、兄貴達がビビらせてたりしていたり、エロかったと言っても水泳の時に目つきがいやらしかったとか言う程度。

こうして、なぜ？ と真剣に考えると、明確な答えは思いつかない。

——いや、一つだけ。ある、ような……？

いや。いやいや。やめよう。これ以上考えるのはよくない。よくわからないけど、本能がそう告げている。うん。やめやめ。

「そうなの？　じゃあ、苑さんって女性の方が好きだったたり？」

……………は？

「うそっ！　　そうなの苑さん」 「やっぱりねえ。そんな気がしてたんだあ」 「となると、誰を好きになるのかしら？」 「あ、もしかたらもう居るのかも」 「ああ、そうよねえ」

「ウチのクラスにはアゲハさんがいるものね」
きやいきやいと。

いやいや。いやいやいやいや。何故そうなる？

あたしが首を傾げてる間にも話は勝手に盛り上がり、どんどん置いていかれる。すごいなあ乙女ワールド。あたしも女だけど、さす

がにここまでではないと思ういたい。

てか、そんなことよりも。そんなことをのんびり考えてないで。あたしはなぜか勝手に定着しそうな同性愛者のレッテルをはがすことに尽力せねばならないのではあるまいか？てか、そうしなきゃいかんだろ。あたしは、そんなのじゃあないんだから。イエッサー自分。さあ止めろ。

「ストップ！ ストップみんな！ 盛り上がってる所悪いけど、あたしは男の好きじゃいからって、女の子が好きなわけでもないから」

「そうなの？」

不満そうなお嬢様方。なんでやねん。

「けど、私も人伝に聞いただけですけど、苑さんは晶さまと仲がよろしいのでしょうか？」

黒髪の子とはちがう、セミロングの子が言う。

「冗談。あたしはまだこっちに來たばかりなのよ。寄宿舎で同じ部屋の子とその子の友達、それとアゲハくらいしか仲がいい人なんていないわよ」

鼻で笑う。

あたしが、アキラさんと仲がいいなんて、最低の冗談だ。あたしはあんなヤツは大っ嫌いだ。

けれど、それをわざわざ声を大にして言う気は無い。アキラさんは生徒達に人気があるようだし。それをわかっていながら、わざわざ不快にさせるようなことを言う必要はないだろう。

さすがのあたしでも、いきなりの孤立は避けたいし。

「けど、あなたに仲良さげに話し掛けていたのを見た人も居ますよ？」

「あ、それ。わたしも聞いたかも」「え？ そうなの。いいなあ」

「わたくしも晶さまとお近づきになりたいなあ」等々。

あたしは、こっそりと溜め息をつく。どこがいいんだ、あんな手の早い八方美人。

ダメだね。少女だらけの環境下で育ったお嬢様方と、そうでない普通のあたしは、圧倒的に感性がずれている。正直、理解できないしついていけない。

「あら。苑さんどちらへ？」

話の途中にもかかわらず席を立つあたしに、黒髪さんが聞いてくる。別にいいだろうあたしが居なくても。勝手に話し続けててよ。そう思うが、あたしは微笑み無難な答えを言っておく。

「すいません。先生に後で来るよう言われていたのを思い出しました」

「そうでしたの。それでは、引き止めてはいけませんね」

「すいません。話の途中なのに……」

「いいんですよ。しかたありませんわ」

等々。みんな快く、疑問すら持たずにあたしの嘘にそう返す。ちよつと、ほんのちよつとだけ良心が痛む。

こんな人を疑うような事を知らないと思わせる人達をそうとわかって騙すのは、さすがに、ね。

そうは思うもこれ以上付き合っていられないのも事実。

あたしは、校内探索に出かけた。

校舎内散歩

今日は入学式——というよりも、生徒の大半が上に上がるだけなのでほとんど始業式——を終えた後は、各々の教室でSHRをして終わりだ。

この学校は一六という学年の分け方をしているので、あたしは新入四年生となる。それに対してなんとも微妙な思いをしてしまうのはしかたないことなのだろう。

あたしは目的もなくぶらぶらと校舎内を歩いている。いつだったかと同じような感じはするが、今回は校舎内。道に迷っても大丈夫だ。人はたくさんいるのだから。それに、壁に手をつけて歩けばいずれ出口にたどり着く！……ここはいつからダンジョンに？

それよりも、あたしはさっきから気になっていることがある。

ひそひそ。ひそひそひそひそ。

と、なぜか囁き合う人達が多い多い。

それも、あたしを見ている気がするの、いい加減気のせいではない筈だ。

すごく気分が悪い。

あたしはこういう、陰口だとか人を指差してのひそひそ話しかとかいうものが大嫌いなのだ。言いたいことがあるなら面と向かって言えというのだ。

あたしはイライラとしながらも、なんでもないことのように周りを無視しながら校舎内を無目的に歩く。

なんとも不愉快な散歩。

イライラ。

「ちょっと。そこの貴女？」

イライラ。

「ちょ、ちょっと！ 無視しないで下さる？」

イライ……え？ あたし？

あたしは自分が呼ばれているのだと気付かずに、軽くスルーしてしまった人達を振り返る。

「あたしですか？」

とりあえず確認。これで違ったら自意識過剰の恥ずかしいヤツになっちゃう。それは、イヤだなあ。

「そうですわ！ 他に誰がいると思いますの？」

誰でしょうね。そこらへんに色々人はいますから、そのうちの誰かでしょうよ。てか、あたしが知ったことかと思うのだけれど、この考えは間違っているのでしょうかね？

なんて。

なんとなく、偉そうな人だった。多分、上級生。

彼女は、彼女たちだった。つまり集団。ざっと10人くらい。なんだろうね。いきなりイジメ？ 下級生いびり？ むしろ新入生いびり？

「ちよっと、お付き合いくださるかしら？」

「お断りします」

あたしは丁寧に断るとそのまま散歩を続行する。あたしはそこらの日本人とは違うのだよ。そうとも、NO！ と言えるニュージャパニーズ。時代はあたしを中心に変わるのだ。

とか、声を大にして主張しようものならどうなるかわからない、最低でもいたい目で見られそうなことを考える。

そう言えば、図書館とか図書室とか。どこにあるんだろう。これだけ大きいんだから、きっと色んな本があるに違いない。ちよっと楽しみ。

「ちよ、お持ちなさいっ！」

後ろから大声でそう呼び止められる。断ったじゃないか。

内心でもいっきりウンザリしながら振り返ると、リーダー格だと思われる巻き毛さん（仮）が頬を引きつらせていた。ううむ。人目が多いからと感情を抑えるのは立派だが。いまいちだね。まだま

だ甘い。

「なんですか？ お断りしましたよ」

「そうではないでしょう！ いいから、ちょっと付き合ってくださいな」

怒鳴ってから、しまったという風にそう言い繕う。遅い気がしますよ巻き毛さん。

「……ここじゃダメなんですか？ あたしはどんなご用向きであれ、一向に構いませんが？」

あくまでも敬意を持って接している風になんぼる。なんでも、ここでは上級生には敬意をもたなければならぬらしいし。これで上級生じゃなかったら、あたしはがんばり損だな。どこかに訴えればその分の慰謝料を貰えるのだろうか。

「そう言わずに。ここでは、わたくし達が気にしますの」

はつきり言えればいいのに。顔を貸せと。

まったく、人の目や評価を気にするならこんなことするなよ。

「……わかりましたよ」

渋々と承諾する。

内心も外も、いやだな、というオーラが出てしまっているのが自分でも手に取るようにわかるが、しかたない。本当にイヤだし。めんどくさい。

巻き毛さんとその他は満足そうに笑んで頷くと、あたしを逃がさないようにか、さりげなく囲むようにして歩き出す。承諾したんだから逃げないってのに。人を信じれないなんて、悲しい人達だね。ちよっと、哀れんでやる。

巻き毛さんとその他に連れてこられたのはいかにもな校舎裏。ここで何がされるのかわからないヤツは、よほどの能天気かあっぱらばーだろう。

「ちよっと貴女？ どういうつもりですの？」

巻き毛さんが細い眉毛を逆立てて険もあらわに言う。問い返して

やりたい。

ちなみに、あたしは校舎の壁に背を預けるようにされている。目の前には巻き毛さんが、その周りにはその他が扇状に広がってあたしを包囲している。

いかにも、な状況。いつそ拍手でもしてやりたい。

「なにがですか？」

「まあ、抜け抜けと」

口に手をあてて、これまたいかにもな表情と動作をする。何の儀式なんだろう。

偶然かどうなのか、巻き毛さんとその他はみんな、首に茶色いチヨーカーを巻いていた。何の集団なんだろう。なんでもいいけど、あたしを宗教争いや内紛に巻き込まないでほしい。巻き込まないのなら、何をしてもある程度は無視してあげるから。

「貴女、晶様に気にいって頂いているらしいですわね？」

はあ？ またそれ？

げっそり。や、うんざり。という表情をあたしはしているだろうな。心の動きと表情筋とが今正に見事なシンクロをしている。心理運動と表情筋シンクロバトル！ みたいなのが、あるならあたしは間違いなく優勝できる。いや、準優勝かな

はあ。

「何かの誤解ですよ」

「嘘はいけませんわ。証拠はそろってますのよ？」

そうよそうよ。というその他の声。とりあえず、巻き毛さんがリーダー格で確定で、その他はオマケだな。とりあえず、その他の皆さんは無視しよう。一々全員の言葉に反応してたら話がめんどくさくなりそうだし。

にしても、証拠、ねえ。

よく見ると、その他の中にはお嬢様風のあの、甘ったるい声のヤツがいた。ああ。あれが言いふらしたんだろうな、と漠然と思う。どうでもいいことだけど。

「証拠ねえ……」

ぽつりと呟いてみる。

冤罪にも程がある。

「別にわたくしたちは貴女が晶様に気にいられていることをとやかく言う気はありませんわ」

んじゃあ何が気にいらないのよ。

思うも、あたしはなにも言わず次に発せられる言葉を待つ。無駄口は避けて、さっさとこんなつまらない事は終わらせたい。あたしの心は図書館、あるいは図書室に対する好奇心で一杯なのだ。

古くからある学校だし、もしかしたら今では禁書扱いの稀少本とかもあるいはあるかもしれない。もしかしたら、公共図書館には置いていないアレとかそれとかもあるかも。早く見てみたい……！
「わたくしたちはね。貴女が晶様を傷つけたことが許せないんですのよ！」

愉快的な気持ちが一気に霧消。

——はい？

ぷちキレ

イマ、ナンテイッタノデショー？

思わず。胡散臭い米人風の片言になっちゃったよ。それほどアホ臭いことを目の前で見下すようにして偉そうにしながら、怒っているらしい巻き毛（もはや呼び捨て）はのたまひよったのだ。

おーけ。もう一回、思い出してみましょ。クエスチョン。誰が、誰を傷つけたって？

アンサー。あたしが。アキラさんを。

……ふーん。

「晶様を何故傷つけたのかは存じませんが、これはわたくしたちに對する冒瀆ですよ！」

……………一言声に出してもいいのなら、あたしはこう言うね。アホか。と。

こいつらがどこでそんな屈折した情報を手にいたのか知らないけど、こいつらは都合よく勘違いしすぎだ。傷つけられたのはあたし。傷つけたのがアキラさん。何で被害者と加害者が入れ替わってんのよ。こいつら馬鹿なのかしら。

あたしは今、どんな表情をしているのだろう。表情筋と心のシンクロは現在一時中断されているのでわからない。なぜなら、心、感情は怒りで染め上げられているから。

だって、そうでしょう？ どういう理由であんな事したのか知らないけど、あたしは……、あたしはせっかく諦めたことを、折り合いをつけたはずのことを、傷口に塩を塗りこむようにされたのだから。

そうされたあたしが悪い？

今はまだ、我慢できている。だから、きっと、あたしの表情は無だろう。必死に抑えているから。さすがのあたしでも、初日から問題を起こしたくは無い。起こす気も無い。

巻き毛とその他は目の前でまだ何事か吠えている。あたしはそれを、静かに聞き流す。今口を開けば、そこから出るのは怒りと嘲笑と罵倒だ。感情に任せたままに製造されるそれらを口に出すことを、あたしは、何よりも自分のためにしたくない。

だから、今は耐えてやる。

それは、表面張力一杯まで水を張ったコップと同じ。ほんの僅かな刺激で、零れてしまう。抑えていたものが。

「――ちよっと、聞いてますの？ まったく。これだから礼儀の一つも知らない外から来た庶民は……。よほど、まともな教育を受けなかったのですわね」

我慢してやる。だから、――。

「まったく。晶様が可愛いそうですわ。こんな、見た目だけは可愛らしく取り繕っているような、売女に騙されてしまうだなん」

「おい」

もう。我慢の限界だった。

あたしの反応に思いもよらなかったのだろう。一瞬。場が凍る。

それはそうだろう。今まで黙っておとなしく言いたい放題言われていた奴が、唐突に押し殺した声をだしたのだから。それも、小さいのによく通るように。

「ふざけんのも大概にしろよ？ いいか？ 何を都合よく勘違いしてんのかしらないけど、傷つけられたのはあたしだ。無理矢理に暴行を受け、傷口を抉られたのはあたしだ」

一度零れたコップの水は、それがあある程度少なくなると止まらない。なぜなら、それは刺激により振動してしまったから。

「多少のことはめんどくさいから我慢してやろうと思ったけど、やめた。家族に暴言を放つわ、あたしを売女呼ばわりするわ。あんたら何様？」

「そ、そんなこと――」

「言っていないって？ まともな教育を、のくだりはあたしの家族がそうし無かったって言う暴言だろうが。聞き間違いか？ 売女って

言ったのは、」

あたしは目の前の巻き毛の口に手をやり片手で両側から挟む。ひよっとこみたい面白い顔になる。楽しく不愉快。

「——この口だろうが。いいか？ あんたらがあの人なんなのかなんて知らないけど、何も知らないくせに勝手なことを囀るな！

あれは、もう終わったんだ！ 被害者のあたしが、精一杯の温情でことを無かったことにしてやってんだ！ これ以上ふざけたこと吠えてみる。あんたらの大好きなアキラ様が、最悪、ここらなくなるよ？ それも、最悪な形で！」

そこまで言い終えてから、殴るように巻き毛の口から手を離す。

あたしは、終始普通の声量。けれど、それが逆にあたしの怒りをよく相手側に伝える。だから、目の前のやつらは何を言うでもなく無言。ただ、あたしから目をそらし、居心地悪そうにしている。

「そ、それが事実だと言う証拠はありますの！」

巻き毛が涙声に金きり声をプラスしてヒステリックに叫ぶ。証拠ときたよ。この馬鹿は。

「さあね。なんなら直接訊けば？ 本当のことを言うかどうかなんて知らないけど、あたしが声を大にしてされたことを叫べば、大抵の人は信じるんじゃない？ オオカミさんに食べられそうになりましたってね」

鼻で笑う。

ああ、もう。最悪。これじゃあどっちが悪者なんだか。

けど、あたしの琴線のたがを外したのこいつらだ。人がなにも言わずにおとなしくしてりゃあ調子に乗って。

無言。あたしの放った言葉がショックだったのか、それとも——「何をしているの！」

唐突に、そう声をかけられる。

その、声はきれいだが、あたしが最も聞きたくない声で。その声を放った人物はこちらに近寄ってくる。

「あなたたち。一体何をしていたの？」

咎めているような声。大きくは無いが、余計にプレッシャーがある。

皆無言。あたしに至っては、この人にあたしの声を聞かせてやることすら不快なので話す言葉なんて一つもない。夢の島に夢が無いのと同じくらい無い。

「……ソノちゃん。なにが」

「あたしに構うなと言ったはずですが」

あたしは、気安くも声をかけてきたアキラさんに冷たくそう言い放つ。言葉を聞かせたくはないが、それ以上に声を聞きたくない。

「何があつたかはその人達に聞いてください。ちゃんと話すかどうか知りませんが」

そう言って、あたしは背を預けていた、そうさせられていた校舎の壁から背を離す。

あたしが一步踏み出すと、囲っていた奴らが俯きながらもそこを退いた。

あたしは思い出したようにすれ違いざま、最後にこう言い残す。

「それでは、さようなら先輩方。これからも、ご指導の程よろしく願います」

最大限の礼儀。

これで、文句は無いだろう。

これからあいつらがどうなるのか。ちゃんと話すのか。話さずあたしを一方的に悪者にするのか。それは知らない。興味も無い。勝手にすればいい。その時はその時。あたしはあたしの流儀でやることをやるだけ。

——あーあ。入るガッコ、間違えたかな。

そう思わずにいられない。

カナエちゃんやモミジちゃん。それに、アゲハみたいないい人もいるけど、それが極少数に思えて仕方が無い。

そりゃ、まだ日は浅いけど。それでも、浅いくせに色々ありすぎた。学園モノの漫画じゃないのだから、ここまでイベントを目白押

しにしないでいい。正直、疲れる。

図書館への興味も薄らいでしまった。どうしようかな。教室に帰ってもやっぱり疲れるだけだろうし。かといって、寄宿舎に帰るのも、初日なのになってしまう。

「ねえ、そのあなた？」

またもや声をかけられる。さっきのようなこともあるので、一応、あたしは振り返ってみる。

ちょ——！？

そこにいたのは、見たことがあるような無いような人だった。
えーと……？ 思い出せそうで、思い出せない……。

「椎本 苑さんよね。あたしのこと、わかる？」

向こうはあたしを知っている。さっきのこともあるけど、少なくともあいつらみたいに首にチョーカーをつけてないから、おそらくそれとは別。だったら、残るのはクラスメイトかな？ この人の口ぶりだと、あたしも向こうを知っているみたいだし。

黙って考えていると、彼女の方から自己紹介をしてくれた。

「同じクラスの、日比谷 百乃です。気軽に、モモって、呼んで下さい」

にこり、と人懐こい笑みを浮かべて彼女はそう言った。

うん。それではっちり思い出したよ。あれだ。自己紹介でいきなりカミングアウトして受けを希望した子だ。さっきのごたごたのせいで、あんなにも強烈だったことを忘れていた。

とりあえず、

「ごめんね。あたし、まだ名前覚えて無くて……。あたしのことは、何とでも、好きに呼んでいいよ。そういうの、気にしないし」
「ふふ。そうですか。じゃあ、そのちゃんと呼ばせてもらいますね」

何が嬉しいのか、社交辞令なのか。モモはニコニコとそう言う。
見た感じ、裏はなさそう。

さっきのせいもあり、ここの生徒のことを疑いやすくなっている自分に腹が立つ。なんだか、とても厭なやつだ。あたし。

「うん。わかった」

けどま。なんだかい人そうだし。あたしも、笑みでそう返す。
自己紹介でのあの発言が気になるけど、多分。彼女なりのジョーク

だったのだろう。笑えないし、学校に合わないけど、そういう人だっているさと自分を納得させる。さすがに、アレをマジだと思いたくは無い。

「ところでですね。アタシ、さっきを見てたんですけど」

「……え？」

なんだって？

「ああ。大丈夫ですよ。言いつけたりとかしませんし、アタシにはあまり関係の無いことですし」

うん。まあ、それは別にいいよ。あたしが言いたいのはね？ そんなことじゃあなくてね。見てたんなら、助けるとか、誰か呼ぶとか。そういうことをしてくれても良いんじゃないかなど。思わないでもないわけだよ。

や、別にね。まだ親しくなったわけではなく、あの時点ではただのクラスメート。それなのに下手すると逆恨みされるかもしれないのに、そんなことをするはずが無いということくらいあたしでもわかるけどさ。やっぱり、めんどくさいことに巻き込まれちゃったほうとしては、わかっていても愚痴っぽくそう思っちゃうわけよ。

「それよりもですね。アタシ、どうしても貴女とお友達になりたいの。お願い。アタシのお友達になってください」

ぎゅ、とあたしの両手を握り、上目使いでそう言ってくる。うあ、その純真げな瞳がまぶしい。

モモは最初思った通り純真無垢が服を着たような印象の女の子だ。下がった眉尻。灰色の湿った瞳に、真っ黒の綺麗なストレートの長い髪。整った顔立ちは柔らかさがある。ホントに旧華族とかの娘のイメージそのまんま。きっと、箱入りで大切に育てられたんだろう。とか、勝手な推測でそう思う。てか、思わせる。

モモの瞳は瑞々しく湿っているから、潤んでいるようにも見え、そんな目で上目使いに見つめられると同性のあたしでもつい怯んでしまう。かわいくて。

「う、ああ……と。うん。わかった」

やっとのことであたしはそれだけを答える。

よく考えてみると、話がいきなり友達になろう、というところまで飛んだのが気になるが。まあ、そんなことを邪推するのはナンセンスってものだ。それに、あたしもお友達はたくさんほしいし。願ったり叶ったりだ。

これで、お友達は四人。すくない。別に不満は無いけど、たくさんほしいのだからそう思ってしまうのはしかたがない。ガンバレあたし。目標はあの歌をも超える百五十一人！ がんばればあの博士に誉めてもらえるぞ。

「本当！？ 嬉しい……。アタシね。そのちゃんみたいな子をずうっと探してたんです。けれど。ここは育ちのいい子が多いから、中々見つからなくて……」

「ん？ それってアレ？ 庶民的な子を探してたってこと？」

別にそんなことで腹は立てないが、どうだろう。その友達選別方は。なんか、ねえ？ どうよ？ みたいな。まあ、いいけど。

「ううん。違いますよ。そのちゃんみたいな、強気で、口の悪めな子を探してたんです」

……ナンダッテ？

モモは恍惚とした表情であたしを見つめてくる。頬を朱に染め瞳を輝かせているその様は、まるで少女漫画の主人公みたいだけど、なんだって？

「そのちゃん。さっきの人達を怒った時の口調で、あたしをイジメてください。虐げてください。口汚く罵ってください。いっそ、目いっぱい辱めてください……！」

ひ、ひええええっ！

あたしは目の前の純真無垢な見た目の少女に戦慄した。恐怖した。恐れおののいた。

モモの目は真剣そのもの。冗談でも何でもなく、真剣で本気。余計に恐い。

あたしはこういう時どんなどんな表情をすればいいのかわからな

い。とりあえず、あたしの顔は引きつった笑いをしているらしい。口元が痙攣したみたいひくひくしてるのがわかる。

てか。なにか。この人は人がめんどくさいことになってるのを、そんなことを思いながら見物してたのか。

「アタシね。本当にイジメられたりするのが大好きなの。それも女の子にそんなことをされるかと思うだけで……！」

自分の身を抱いてぞくぞくと打ち震えるモモ。その状況を想像して気持ちよくなっているらしい。めっちゃ恍惚とした顔してる。息が荒いし。

「だから、ね？　お願い」

いつの間にか、丁寧だった口調が子供が無邪気に甘えるような調子のもものになっている。逃げたいけど、あたしの手はまたもやモモに両手で握られ、しかもずい、と顔を寄せられているので、逃げるに逃げれない。

息が、息が当たる。てか当たってる。あ、モモっていい匂いかも。この香りならあたしも知ってる。たしか、なんとかいうコロンの香りだ。……わかってないじゃん。

「さあ、アタシを口汚く罵って！」

現実逃避を敢行していたのに、瞳をきらきらと輝かせながら潤ませているモモに、あっけなく現実に引き戻された。逃げることにすら許されないというのか……！

あたしは、こんなにも真剣に人からモノを頼まれたことが無い。それは、いつもおちゃらけている風なあたしに原因があるのだろうけど。だから、これがあたしの初めての人からの真剣な頼まれごとということになる。

はっ！　つまりは初体験！？　はじめては、もっとロマンチックなのが良かったのに……何の初体験の話だヨ！

現実から逃げるように、あたしはお得意の脳内マンザイを実行する。

……こんな初めて激しくイヤだ。

ふうん

幼少時。夢と知りながらもそんなこと脇どころか後ろに投げ捨てて思い願ったことがあった。それは、たまにだけど今でも思うことがある。たとえ無理で無茶で夢でありえないとわかっていても。それでも、本気で願ってしまうのだ。

時間よ止まれ！

あたしはその間にディアブロを越えらそうな超絶ダッシュでこの場を走り去るから。なんたって時間が止まっているのだから、その間あたしが誰かに負けることは、容姿とあとちよいちよいくらいしかありえない。

意識をちよつとだけ現実に戻還させてみる。

あたしの手をきゅつと握り。潤んだ瞳で上目使いに見つめてくる純真無垢風味の少女は、健在。

「あ、あのね？ あたしは何もだれかれ構わず罵倒したりとかはしないわけでございますらしいです？」

息継ぎ為しのへんてこな口調。しかもなぜだか疑問系。あたしは相当困惑しているらしい。と自己分析。

「ウソよっ！」

うっわーお。

モモはそんなあたしのおかしな箇所を軽く無視。いきなりあたしは否定されてしまった。いやいや。ウソやありまへんえ？

てかねえ。あたしってそんなに乱暴そう？ 不良な感じですか。

なんか、ちよっぴりショックだわん。

たしかにさ。あたしは昔からおしとやかと言う単語とは仲が悪かったよ。他にも女の子のらしいとか、おとなしいとか、およそ女の子として必要だろうと思われるそれらと、ことごとく仲が悪かった。けどさけどさ。別にそうなりたかったわけじゃなくてさ。あたしはあたしの言いたい事したいことを正直にやってた結果な訳なのさ。

周りに迷惑がかからないように。悪いことはしないように。そこらへんのこともちゃんと注意してたさ。決して不良に分類されるような好き放題やりたい放題はしてない。

なのに。なのになのに。

心中で不貞腐れてみる。

「……ここに居たの。モモ」

あたしがズンズカ落ち込んでいると、ここ最近で聞きなれたきれいな声による中性的な口調が聞こえた。声のするほうを見ると、片目を瞑ったくすんだ金髪のかっこいい少女が腕組をして立っていた。アゲハだ。

「あ。アゲハ様！」

モモはアゲハを視認するとあたしの手をさっさと離しアゲハに抱きついた。とても嬉しそうに。とても楽しそうに。

ああ。二人は大親友とか、そんな感じ？ いやいや。のわりにアゲハのどこか迷惑そうな表情はなんざましょ？

「……モモ。いつも言うけどね。道草しない」

「道草じゃないの。今日は、素適なお友達をゲットしたの！ それも、アタシの理想」

表情では迷惑そうに。けれど口調にそれは出さずいつも通りなアゲハ。モモはモモで、そんなアゲハの表情はスルーして抱きついたままに機器としてそんな報告を——って。コラそこ。人を指差さない。

アゲハがモモの指の先を追ってあたしと目が合う。あっ、という微妙な表情変化をした後、なんでもないようにすぐに取り繕った。

アゲハさん。あたしに気付いてませんでしたネ？

「……ソノ。ご愁傷様」

アゲハはそれそれは哀しそうなお顔をすると、憐れむように短くそう言った。おいおい。

「ちよっとアゲハさんや？ それはどういうことよ」

「……すぐにわかるよ。モモの友達になるということの意味を」

どこか遠くを見ながら、アゲハは悟ったようにそう言った。

それって、あれかな。さっきのカミングアウト諸々。どうやら、アゲハは悟っちゃうくらい執拗な要求を受けてきたのだろう。クールなアゲハが辟易しているだろう姿は、想像するに面白い。くふふ。「アゲハ様ひどい。アタシをそんな苦労のかかる子みたいに言うなんて」

「……事実だと思うけど」

抱きついたままよよよ、と泣きまねをするモモを、アゲハは軽く一蹴。その声は冷たかった。

「あ。……のんびりしてる場合じゃなかった。ほら、行くよモモ」泣きまねから歓喜の震えに移行した抱き付き娘を引き摺るようにして、アゲハは歩いていく。すごいなアゲハ。なんで抱きつかれたままなのにあんな平然と普通に歩けるんだろう。クールビューティは何でもありなのか？

「……そうだ。ソノも来ない？」

「どこに？」

馬鹿な思考をしながら見送っていたあたしに振り返ると、アゲハは主語無しでそう問うた。当然。質問には質問で返すソノちゃんクオリティー。

「部活」

ほほう。そりゃ楽しそうだ。それに都合がいいかもしれない。

なんでも、この学校は部活あるいは委員会に必ず所属していなければならぬらしいし。さらには部活や委員会の中には単位が出るものもあるとか言う話ではないか。それに、どうしても入らねばならないのなら、この孤軍な状況。だれか知り合いが居る所に入ったほうが寂しく無くていい。と、ここでウサギのように振舞って好感度を掴もうとする作戦に出るソノちゃんでした……誰に話し掛けているのだろう。

ともかく。あたしはアゲハの誘いに乗ることにした。誘いを受ける理由はあっても、断る理由なんか存在しないのさ。

ところで。モモはアゲハのことを『様』付けで呼んでいたが、あたしはそのことに触れないことにした。さらに、『様』付けで呼ばれてそれを改めさせようとしないアゲハのこともスルー。なぜって、触れたらいけないと直感が告げているし、アゲハの諦めきったような顔を見ていると、その苦勞が嫌でもわかる。

あたしは、お腹をすかして居る人に顔をくれてやる勇氣なんざ無いのさ。

廊下を、アゲハ、モモ、あたしと歩いていると、何故だかみんながススツと自然に道をあけてくれる。それに対して、アゲハもモモも、何を言うでもなく平然とわき目も振らずに歩いている。モモにいたってはアゲハやあたしにしきりに話し掛けてきて、まるで当たり前のようになっている。その王族の歩く道を家臣が空けるかのような状況に、あたしは一人首を捻っていると、唐突に、ホント何故だか突然唐突突如にあることを思い出した。

それは、ここに来て最初の日。モミジちゃんが寄宿舎の食堂で言っていたこと。

『悼みの歌姫』。

たしかそう呼ばれている人がいるとか何とか。んで、その人はたしかアゲハという名だったと記憶している。

だからどうしたというわけでもない。二つ名を持っているような奇特な人は皆が皆、どこかおかしいのではなどとは全然思っちゃいない。――チラリ、と脳裏をなぜかアキラさんの顔がよぎる。ああもう！ 邪魔！ 関係無い！ ――ただ、納得しただけ。

この状況を。

なるほど。ここはほんとに変なとこだな。と。

第三音楽室にて・1

この学校のことをここいらでできる限りあたしに可能な範囲で、ご説明させていただこうと思う。是非ともご清聴しとけ。

まず校舎。大きい。まあ、当たり前よね。なんたって元とは言えお嬢様学校。それに今でもお嬢様学校としてのステータスは損なわれていないようだし。生徒達を見てたら嫌でもわかる。見た目だけで育ちよさそうなもの。

校舎の外観は石造りで、中世のイギリスあたりを訪仏とさせるもの。ここを「とある貴族のお屋敷なんですよ（ニコリ）」と紹介されても一切疑うことなく「そうなんだ」と納得してしまえる。

校舎は上空から見ると外側にやや開いた鳥居の形に見えるだろうと思う。

その真ん中の棒の部分に当たる所はセンターと呼称されていて四階建て。一学年から六学年——中等部一年から高等部三年——かける五クラスがある。ちなみに一クラス大体三十五人程度らしい。あたしのクラスも大体そんな感じだった。

で。右側は特別教室棟。音楽室や調理室などがあるらしい。あたしは当然ながらどの階のどこに何の教室があるか全く把握していないので、さっさと覚える必要がある。面倒だけど。

そして左側は教職員室及び事務室及び文科系倶楽部棟。一階が教職員室及び事務室で、二階からが文科系倶楽部の部室になるらしい。当然。このこともさっぱりわからない。てか、特別教室棟の方を把握せずにこっちを先に把握していたりしたかどうかと思うけど。なんにしろう、あたしはセンター以外では確実に迷子になる自信がある。——や。いらんけどね。そんな自信。

さて。アゲハとモモにあたしがつれてこられた、というよりついていたエリアは特別教室棟四階の先端の教室。扉の上のプレートには「第三音楽室」と書いてあった。

ガラツとスライド式の扉を開けて中に入る二人に続いて、あたしも入室する。

第三音楽室内にあるのはピアノが一台と三段になっているひな壇みたいなものだけだった。音楽室なのになんだろこの殺風景さは。と首を捻っていると、

「あ。お久しぶりですお姉様方。今日はお早いんですね」

ピアノのチェックか何かをしていたらしい女の子がアゲハたちに気付いて、嬉しそうにそう声をかけてきた。セミロングのどこか幼い感じのする女の子だった。制服のデザインがあたしたちのと微妙に異なっているのを見ると、中等部生かな。

「……久しぶり。レン」

「久しぶりれんちゃん」

親しげにそう返す二人を見るに、この子は後輩であるらしい。もうめんどくさいから、「お姉様」と言う呼称に対して何も思うまい。

「あら？ そちらの方は……？」

と。その子はあたしに気付き二人に尋ねる

――が

「あ。わかりました！ 入部希望者さんですね。あはっ。大歓迎ですよ。ウチ、ちょっと部員多いですけど、皆『歌姫』目当てですから、楽器の空きはありますよ。ああ。それともやっぱり例に漏れず『歌姫』目あてな方ですか？ けれども大丈夫です。そんなことで入部を断ったりはしませんから」どこからかB4くらいの大きさの紙とシャープペンを取り出し「ささ。ここにお名前をレッツ記入。今ならもれなく歌姫の歌唱鑑賞権が無料進呈されます。とか言いながら入部すればいつでも聴けるのですけれどね」

はやっ。ながっ。

まくし立てるように長々と勝手に喋り終わると「ささ。書いちゃってください」とか言いながら、入部届らしい紙とシャープペンを押し付けてくる。いやいや。あたしはまだ入部するといった覚えはありませんですよ。

どうやらこの子は自己完結型のマシンガンッ子らしい。人の話を聞こうとしない。

「……レン。先走らない」

どうしたもんかと、あうあう困惑しているとアゲハがそう言って止めてくれた。ピタリ、とレンと呼ばれた少女は止まる。

「……………違うのですか？」

しょぼーん。という擬音が聞こえそうなほどに肩を落とすレンちゃん。なんだか苛めてるみたいな気分になって、この入部届に名前を書かなくちゃいけないような気がしてきた。

「そのちゃん。この子演劇部員でもあるから、演戯に騙されちゃダメよ」

なんですと？

モモの台詞を肯定するかのように、

「ちえ。ばれちゃいましたか」

とか言いながらレンちゃんは可愛らしく舌を出していた。演戯だったのか。それにしても上手だな。散々兄貴たちを騙してきたことで演戯には多少の自信が在ったり無かったりするこのあたしが騙されるとは。むう。さすがはお嬢様学校。やりおるわい。

「……ソノ。紹介するね。この子は水面 蓮華。この吹奏楽部のピアノ担当で、演劇部にも所属してる三年生。人の話を聞かない。妄想が激しい。話が長い等々。色々欠点は有るけどいい子だから」

……アゲハさん。あんた容赦ないのな。散々悪い箇所を上げといてまともなフォローはなしですか。友人の意外な一面に面食らいながらも、その言葉に噛み付きも否定の言も放たないレンちゃんを見ると、

「やー。まいりましたねえ。反論ができません。あはは」

とか言って笑っていた。いや、笑い事？ なんにしろ、アゲハの言う通り、いい子ではあるらしい。反応が素直だ。無邪気、って言う表現がぴたりと当てはまる気がする。

どうやらこの学校は部活動まで中等部高等部一緒らしい。なのに、

ピアノ担当か。正直に、すごいと思う。中学生なのに高校生にも負けていないということなのだから。

と、感心してる場合じゃないよね。

「あたしは、椎本 苑。アゲハやモモと同じクラスで、今日はちょっと見学」

レンちゃんに自己紹介と目的を軽く告げる。

「あらあら……。すごいですね。ペンタグラム・アクトリスのお二人と同じクラスだなんて。しかもお友達だなんて」

レンちゃん羨ましそうにそう言うが、あたしにはこの子が何を言っているのやらさっぱりわからない。ペンタグラム・アクトリスとはなんじゃらほい。

「れんちゃん。その呼び方はやめてね。アタシたちはそんなんじゃないんだから」

モモが苦笑気味にそう言うが、レンちゃんはまるで聞いちゃいないようだ。アゲハは溜め息をついて首振ってるし。あれれん。なんも知らないあたしは置いてけぼりですか。

そう思い尋ねてみる。

「ねね。何？ ペンタなんたらって」

誰に尋ねたわけでもないが、レンちゃんがまっていたとばかりに説明を始めた。アゲハとモモはあたしと目が合うと首を振った。

え？ なに？

そう思ってあたしが口に出そうとするのを遮るかのように、レンちゃんが絶妙なタイミングで説明を始めた。

第三音楽室にて・2

「この学園には五人の麗しき方々が居られます」

まずそう前置きがあった。

「まずは身近な人から。ソノちゃん先輩——この呼び方OKですかね？」

「いいよ」

「ありがとうございます。——ソノちゃん先輩と同じクラスの小鳥遊 揚羽お姉様。その聴く人の心を動かして止まない歌唱力と、どこか影のある中性的な容姿と喋り方が主に下級生に人気の、通称『悼みの歌姫』」。

同じくソノちゃん先輩と同じクラスの日比谷 百乃お姉様。アゲハお姉様とは対照的な澄んだ綺麗な歌声で聴く人を虜にし、その可愛らしい容姿と嗜虐心くすぐる性格とかその他諸々が主に上級生人気の、通称『無垢の歌姫』」。

で。二年生の天羽 叶ちゃん。喋れないけれども筆談でやたらでかい態度をとったりして、けれど実はめちゃくちゃ臆病な、保護欲くすぐりまくりのマスコット。なんと陸上部の短距離のエースなのです。

そしてそして。五年生の天の原 濤音様。氷のような美しさと学年主席の頭脳。そして四期連続生徒会長という離れ業をやったのけた脅威の人です。しかもしかもこの御方何かと謎が多くて学園七不思議に任命されちゃったりしてます。

そして最後。下級同級上級教師老若を問わずに人気の高い『オンナオオカミ』こと水宮 晶先輩。イギリス人とのハーフであるその美貌は嫉妬や羨望よりもただただ恋焦がれてしまい、多くの女の子が彼女に告白をして今やハーレムのような状況を作り上げているとかいないとか。『パレード』と称される晶先輩の取り巻きさんたち

の特徴はチョコカーで、なんでもその群れのようなモノが『オオカミ』の由来だという噂も」

「はいお疲れ様ごくろうさんレンちゃんもういいから聞く方としても疲れたよ」

嬉々としながら長ったらしい説明を続けるレンちゃんを、あたしは息継ぎなしの早口で無理矢理止める。

レンちゃんはキョトンとしながらも説明したりないのか、どこか不満げだ。

あたしはそんなレンちゃんを無視してアゲハとモモを探す。

きよろきよろと適当に首をめぐらすと、二人は真剣な顔で何か薄い察しのようなモノを手に話し合っていた。話を降ってこれ以上の説明を完全に絶とうと思ったが、邪魔してはいけないだろうと諦める。あたしにもそれくらいの分別は在るのだ。

色々と驚くべき事実があった。

アゲハは初日にモミジちゃんから聞いていたが、モモまで歌姫だったとは。

まあ、そこはいい。

それより一番のビックリは、なんか普通にカナエちゃんが入っていることだよ。びっくりした。短距離のエースって。さすがに1年から3年と4年から6年は分かれているだろうけど、それでもすごいのか。だって、それでも一年の時点で既に短距離のエースって事でしょ。すごいなあ。なにがすごいって、全然そんな風に見えないのにつてところだ。

——…ダメだ。びゅんびゅんぎゅんぎゅん走るカナエちゃんを全く想像できない。うああ。めっちゃ見てみたい……！

運動とかを汗水たらして倒れるほどがんばるのは嫌いだけど、そうやってがんばってる人を見ているのは好きなあたし。がんばってる人に料理をふるまって、それをとて美味しそうに食べている姿つてのも好きだったりする。

「ソノちゃん先輩。説明はまだ終わっていないのですよ。まだまだ

序盤です。これからメインに移って最期に閉めるところまでちゃんと聞いてくれないと。むしろ聞いてください拒否権は却下です」

……おい。どこの誰だよ上級生に敬意は払わなきゃいけないとか言ってヤツ。この状況を見てみる。自分が説明したり無いからって先輩の権利を否定どころか拒絶したぞ。

そんなレンちゃんの自己チュー台詞が聞こえているはずのに、アゲハとモモは完全無視。あくまで二人の世界を形成浸り中。

「もういいから。さすがに一変に聞いてもあたしの情報処理能力を軽くオーバーしちゃうから。だから、また今度時間のあるときにお茶でも飲みながらゆっくり聞くから」

あたしはそういつてとりあえずの妥協点を挙げてみる。こういう場合、完全にNOと言って断るよりも、こういう風にしたほうがいい。そのほうが相手も一応は退いてくれる。

「そうですか。わかりました」

しょんぼり、という文字を頭に落とされたかのように見るからにがつくりと項垂れるレンちゃん。ごめんね。これ以上は聞きたくないんだよ。

「まあそれはそれとして。アゲハお姉様のすごい所はですね——」
「って、おうい！　今さっき断わったばかりじゃん！　何で何事も無かったように再開させようとしてんの！」

どうやら、レンちゃんは本気で人の話を聞かないらしい。耳に入れないという意味ではなく。聞き届けないと言う意味で。

レンちゃんは可愛らしく首を傾げて、何かおかしいですか？　みたいな顔をしている。

「あっ。わかりましたよ！　これは説明じゃありません。これから始まるのは麗しく愛しいアゲハお姉様とモモお姉様の自慢です！」
自慢って……。

内心どころか全身でげっそりうんざりを表してみたのだが、レンちゃんはそんなあたしを軽く無視して長々長々と『自慢』を始めた。その表情からは本当に心から二人を慕っているだろうことが窺えた。

が、聞かされるほうとしては堪ったもんじゃない。しかも話があつちへ飛んだりそっちへ飛んだり、とにかく一貫しない。

アゲハとモモに助けを求めようと音楽室内を見回してみたが、いない。どうやらばつくれたらしい。

……。付き合いきれないという気持ちはわかる。わかるが、結局あたしは何をしにここへ来たんだ？ てかなんのためにつれてこられたんだ。

あたしは溜め息をつくと、まだまだまだまだ続きそうなレンちゃん
の自慢を聞き流す。

はあ。

第三音楽室にて・3

かれこれ一時間は経ったのではないだろうか。

レンちゃんの自慢話は相変わらずふらふらとクラゲのように色んな方向へ漂いながらも、いまだに続いていた。それをこうして聞いてやってるあたしって、実はいい人なのではないだろうか。

第三音楽室にはあたしたちが来てからまだ、誰も来ていない。いい加減、この部活の部員達が集まってもいいものだと思うが。

ばっくれていたアゲハとモモはすぐに戻ってきて、また何かを話し合い始めた。どうあら意見交換っぽいのをしているらしい。時折、手に持った冊子みたいなのになにか書き込んでいる。

「——それでですね。特殊な性癖でもって部員勧誘をするモモお姉様を颯爽と現れたアゲハお姉様が止めたのはいいのですけど、止める際にポカリ、とはいたのがいけなかったらしく——」

しつこいようだが、レンちゃんの話は蝶々のように落ち着きなくあっちへ行ったりこっちへ行ったりそっちへ行ったりするため、今話しているのがいつの話なのか分からない。数分前は初等部の頃の話をしていたはずで、その前は中等部二年の頃だった。その前は覚えていない。むしろ、この記憶も怪しい。もしかしたら、初等部の頃の話と中等部の頃の話の間があったかもしれない。

レンちゃんは本当に生き活きと二人の話をする。まるで大切な宝物を自慢するように。そこには得意になって話し相手を不快にさせるような感じはない。純粹にただただ慕っていて、この二人がどれほど慕うにふさわしい相手なのかを語って聞かせるような感じがあ

る。

ただ、たまに話が変な、まったく関係無いだろう方向に反れたり、時系列がばらばらでまとまりが無かったりするるので、聞かされる方としてはたまったもんじゃない。お願いだからレンちゃん。よく考

えてまとめて話そうよ。

「レン。無駄話はお終い」

「今日の練習をしましょう」

窓際で話し合いをしていた二人がそう言うのと、ぴたりと話をやめてレンちゃんは二人の方へ行った。

「わかりました。楽譜の方は……」

「うん。良かったんだけど、無駄な誇張や、実際に歌と合わせるとおかしくなる部分が少しだけ」

「そこにはアタシとアゲハ様でチェックを入れておいたから、確認して、レンちゃんりに直してみて」

「了解です。五分で仕上げちゃいますね」

そう言葉を交わしあい、冊子——楽譜を手にはピアノへ向かったレンちゃんは、さっきまでとはガラリと雰囲気が変わっていた。

どう、とは上手く表現できない。それは単にあたしの語彙が乏しいだけなのかもしれないが、けれど、あのどこか浮き足立つようないながらも、まるで猛禽のような目つきで笑む様は、容易にどうと表現できるものではないと思う。

まるで、人が変わったみたいだった。

「ソノ。これから、練習するんだけど、聴いていってくれるよね」

「お近づきのしるしに、と言うわけでもないのですけど」

アゲハは目を細め淡く笑み、モモは無邪気に微笑みながらそう言う。

なんなんだろうね。

断片的なピアノの旋律が耳に入る。

見ると、ピアノに向かったレンちゃんが楽譜を見ながら二人に言われたであろう部分を弾いているようだった。

その断続的な旋律、音階、奏でられる調べは、どこかで聴いたことがあるようなものだった。

「……フォーレ？　——……けど」

聴いたことがある。確かに聴いたことがあるものだ。けれど、あ

たしの記憶にあるものとどこかが違う。

根っこの部分は同じなのに、明らかな差異が幾つもある。

思わずもれたあたしの眩きに、アゲハが応えた。

「……そうだよ。これはガブリエル・フォーレ作曲のレクイエム。けれど、微妙に違う。これはね、私たち用のレクイエムなんだよ」つまり、アレンジしたと言うことか。どうりで聴いたことがある曲なのに違和だらけだと思った。

あたしは音楽鑑賞が特別好きじゃ無い。それでも、音楽はジャンルを問わずよく聞かし、その中でも好き嫌いは当然出てくる。ヒップホップやロックなどは騒音や雑音にしか聞こえないため、好き嫌い以前に全く聴かない。

フォーレのレクイエムは一番上の兄貴がお気に入りで、家に居るときはほぼいつも聴いていたように思う。

それで、って訳でもないが、レクイエムは結構思い入れがある。フォーレのレクイエムは、他の曲と違い救いがあり、それがゆえに徹頭徹尾人間的感情に支配されている。壮大に荘嚴な宗教曲。宗教というものが大嫌いであっても。これはそんな些細なことすら霞むほどの素晴らしい曲だ。

だから、それだけにあたしはドキドキしてる。だって、あたしはアゲハの歌い手としてのすごさをほんの少しだけど知っている。そして、その歌い手のためだけのアレンジ。こういう風になるのか。どう歌うのか。

期待。

そして、アゲハと共に並ぶもう一人の歌姫と言われているモモ。早く聴いてみたい。

少しして、ピアノが止んだ。

「お姉様。調整終了しましたです」

「そう。わかった」

「そのちゃんは、後ろで聴いていて」

二人はそう言うと、ピアノの横に適当な間隔で並んだ。

レンちゃんがそれを見て、ピアノを弾きはじめた。
アゲハのコントラルトとモモのソプラノが、ピアノの音にあわせ
て室内を厳かに包んでいく。

脱走

久しぶりのことだった。

死にたい……そう思った。

——違う。死にたい、じゃない。死んでもいい。そう、思った。

死という終焉に対する恐怖。

死という休息に対する至福。

死という概念の、およそそうであるという漠然とした意味。本質。

「うっ、うう……くっ、う………」

涙が止まらない。

悲しい訳じゃない。

楽しすぎて、というわけでもない。

訳がわから無い。

『悼みの歌姫』と『無垢の歌姫』の二重唱。

ピアノの独奏と、女性パートのみに改変されたレクイエム。

つい一瞬前の空気が、即座に吹き飛んだ。

使われたのは荘厳さを醸し出すようなパイプオルガンではない。

およそこの学校の音楽室にでも置いてあるだろう黒塗りのグランドピアノ。

けれど、拙いながらも厳かで、清らかな、綺麗な旋律だった。

確かに、音楽を生業とし、世界を飛び回りそれで生計を立てるような人達と比べたら、まだまだ未熟かもしれない。

一度だけ、父親に連れられて世界的ピアニストの演奏会を見に行ったことがあるからわかる。比べるべくも無い。

けれど、だからこそ。その発展途上の自由さと苛烈さと、穢れを知らない素直な音色は心に響いた。

本来ならパイプオルガンと幾つかの楽器、合唱団とで構成される

部分は、全てピアノの独奏と、モモのソプラノとアゲハのコントラルトでアレンジされていた。

レクイエムは本来、死者のために歌われる曲だ。そこには「鎮魂」の意味は無い。単に「葬送曲」「死者を悼む」それだけの意味しかない。

古今レクイエムは多くの作曲者が作曲してきたが、中でもモーツアルト、ヴェルディ、フォーレは三大レクイエムと呼ばれている。

——これは兄からの受け売りだ。

フォーレのレクイエムは「死は苦痛ではない。むしろ、死は至福なのだ」と訴えかけるものだ。

そんなことを言われても、あたしには何のことやらと全く理解していなかった。ただ、きれいで厳かな素晴らしい曲だという程度の認識しかもっていなかった。そもそも、歌詞は英語（多分）で、読み書きはできるが歌になるとちよいと理解に及ばないあたしの英語の理解力では、歌詞の意味する所など理解できなかった。

けれど、このレクイエム・オリジナルアレンジは違った。

依然として、歌詞の内容は理解できない。

けれど、そんなものは関係なかった。

子守唄のように流れる歌声。

天国に吸い込まれそうな予感。

天子の歌声に包まれているような心地。

自分を手放しそうになる陶醉感。

ああ、これを聞いたままに死ねるといふのなら、どれだけ幸せだろう。

本気でそう思える。

死の恐怖感が、少しずつ、少しずつ、癒されるように、母の胸に抱かれるように、薄れ、消えていく。

心が動くことを感動というのなら、これは正にそうだ。

あたしの心に違和感なく入り込み、解きほぐしていく。
心地よかった。

けれど、同時に。それだけに怖かった。

あたしがあたしでなくなりそうだった。

あたし自身、何でそんな風に思ったのかはわからなかった。けれど、涙が流れて。止まらなくて。訳わからなくなつて。

まだ演奏は続いていたけど。

歌は奏でられていたけど。

あたしは、第三音楽室から出た。まるで、逃げるように。

閉ざされた扉のむこう。演奏は、まだ続いていた。

ここは、校舎の裏庭。

あたしは第三音楽室からここまで全速力で走ってきてしまった。

途中、誰にも会わなかったのは不思議だったけど、泣きながら走るなんて言う奇行を見咎められなかったのだからよかった。

今は、もう。落ち着いている。

頬についた涙の跡が少し痒いくらいだ。

こうして、裏庭に群生している雑草を環のように結んで罫を作れるくらいには落ち着いている。

はあ。すごかった。まさかあれほどとは……。

ううむ。と一人うねってしまう。

あの二人のたまに聞く、『f/1』のゆらぎとか言うのが出てるんじゃないだろうか。

——いや、良くわからずに使ってみたけど。

とにかく、二人が「歌姫」と称されるのも納得だ。音楽系の専門学校に行けばいいのに、と本気で思うくらい以上に、歌が上手い。レンちゃんも、さすがピアノ担当と言われるだけのことはある。上手だった。

何より、目を瞑り心から歌うような二人の姿はとても綺麗に見えた。思い出しただけでも、ほう、溜め息が出ちゃうくらいだ。いかん。惚れるかもしれない。

……なんて。

あー、けど。どうしようかな。

そんなことを思いながら、ずるずると地べたに、群生する青々とした雑草の上に座りこむ。……スカートが汚れるかもしれないかは気にしなかった。はたけばいいし。

せっかく聴かせてくれたのに、途中で逃げ出してしまった。三人には悪いことをしてしまった。一体どこの世界に感動して逃げ出すなんて言う奇行に走る奴がいるのだ。

「ハイここデース」

頭の上に手を上げて元気よく呟いてみる。

……とても間抜け。ああ、恥ずかしっ。

体操座りになって膝に顔を埋める。

あたしは、考えてしまいそうになる事柄を、重そうになる感情を払拭するために、何も考えず思わず。しばらくそうしていた。

当面の問題は、三人にまともに顔を合わせることができなかだわ。

伏せカード発動！

さて、あたしは今現在とっても困った状況にある。
所も時間も変わり。

今いるのは寄宿舎の地下にある大浴場。とても大きくて豪華な感じが溢れていて……正直あたしみたいな庶民がこんな所に居てもいいのでせうか。と、なにやら本気で不安に狩られたりする。
夕食後である。

今日の夕飯はハンバーグがあつたので、ハンバーグとポテトサラダをチョイス。じゅうじゅうと美味しそうな音がしていて、お肉のいい匂いがしていて、デミグラスソースが魅力的だったり、ちょっと気が浮かれそうになるメニューだった。

――が。

浮かれてなんかいらなかった。

そして、その浮かれてなんかいらないう状況は現在進行形。

「本当に悪かったと思っています。反省もしております。どうか赦してください」

項垂れ、心の底から申し訳ないですオーラを全放射しつつ、かれこれ両手の指では足りなくなってきた回数 of 謝罪を行う。

その謝罪対象は、ぷい、と言う擬音が本当に似合いそうな可愛らしさで顔を背けた。……心中で世辞を言う意味は果してあるのだろうか。

がっくり、と肩を落としながらコックを捻ってシャワーのお湯を出す。温度をぬるめにしてから、シャワーで泡を落としていく。つーと滑り流れ落ちていく泡の感触が、きれいになっているぞう、という感じがして気持ちがいい。

色々な要因から、溜め息をつく。

横を窺う。

今、大浴場にはなぜか二人しか居ない。一人はあたしで、もう一人はカナエちゃんだ。つまり、両手では足りないほどあたしが謝罪を繰り返している相手とは、カナエちゃんなのだ。

今回。カナエちゃんがぶんぶん怒っているのは、完全無欠にあたしに非がある。……非がある時点で“無”欠じゃあないのか？ まあいいや。とにかくあたしが悪い。だからカナエちゃんが許してくれない限り、あたしはしょんぼりスパイラルを続行せねばならない。

あたしが音楽室から逃げ出した後、校舎の裏庭で膝を抱えるようにして項垂れていると、いつの間にか空が朱色になっていた。

そ、空が燃えてる……。

などとバカな思考をするうちに、自分がいつの間にか寝ていたことに気付いた。

野眠とはあたしも神経が太くなったものだ……。なんて、バカなことを半ば本気で考えてしまうあたり、頭がまだ通常営業に移行していない証拠だろう。

そうやってぼんやりしていると、きよろきよろと、傍目からは挙動不審になりながらカナエちゃんが歩いているのが見えた。珍しいことにモミジちゃんは一緒におらず、一人だった。

そして、何故だか手にしている鞆には、マザーの腹からどぼどぼと生れ落ちたピンクに黒の模様の蝶のぬいぐるみがぶら下がっていた。どうやら紐を塗ってアクセサリー化したらしい。

気にいってくれたみたいで、あたしとしては嬉しい限りだ。

そんなことを思いながら、あたしはカナエちゃんを呼ぶ。

「おい、カナエちゃん」

ぱたぱたと慌てていた風な足を止め、きよろきよろ率を上げて声の主を捜すカナエちゃん。ふわっふわの髪が首の動きに合わせて躍る。見ていて羨ましい。そして、綺麗だなと思う。

なんとなく、自分の髪に触れてみる。……ううむ。硬い。こりゃカナエちゃん見たいなのは無理だ。再認識。だからこそ、ああいう

天然素材の可愛い子は無条件に好きになれる。

……ん？ な、何をいつてるのかなあたしは。別に変な意味じゃあないですよ！

落ち着け、あたし。誰に言い訳してるんだ？

軽く深呼吸……すーはーすーはー。

「カナエちゃん、こっち！」

なんとなく、立ち上がるのが面倒臭いので座ったまま手を振ってみる。

カナエちゃんは気付くと、こちらに軽く小走りでやってきた。

最初、どこか曇っている風だったカナエちゃんの顔に安堵の色が浮かぶ。

あたしは遠目にだが、それが見えた。もしかしたら、モミジちゃんとはぐれたのかもしれない。そんなことを考えた。

——と、

あたしの目の前で突然カナエちゃんが、すっこけた。

小走りとは言え走っていることに変わりはなく、その勢いのままにこけたのだから、それはもう、すごかった。綺麗にこけた。しかも不意打ちだったからか、カナエちゃんは受身すら取らずに顔から行った。いやさこの場合、逝った。

これが噂に聞くジャンピングヘッドシュートか……。ボールが無かったのが悔やまれる。

——じゃなくて！

「大丈夫、カナエちゃ……」

あたしは座り込んでいた芝生から腰を上げ、カナエちゃんを助け起こしてあげようとしたのだが、不意に言葉が切れた。

白と黄色の縞々か……。ちょっと子供っぽい気がするけど、カナエちゃんには結構にあってるかも。うん。かわいい。

軽い勢い付きで頭からすっこけた所為か、カナエちゃんのスカートは捲れかえっており、ショーツのお尻が丸見えだった。

あたしは感想を心中で述べつつ、さりげなくスカートを戻してやってから、カナエちゃんを助け起こしてやる。

「大丈夫？ 怪我は無い？」

軽く制服についた土を払いながら、優しく尋ねる。膝などは擦り剥いていないようだが、問題は顔から上か。なにせ顔面から逝ったし。

そう思い、カナエちゃんの顔を見ると、

（あー。こりやマズイ）

カナエちゃんはおでこを少し擦り剥いて赤くし、顔も赤くして目に涙を溜めていた。よほど痛かったらしい。

泣くかな？

「おでこ、痛い？」

涙が溜まる。表面張力的にまだ余裕があるのか、一生懸命に堪えているの……涙は出てはいるが零れてはいない。カナエちゃんのこういうところがたまらなく愛しく思えてしまう。

と、カナエちゃんは鞆からホワイトボードを取り出し、ペンのふたをきゅぽん、と勢いよく外して、ものすごい速さできゅきゅっと書き始めた。

『もみじはどこ？ しらないか？』

あえて痛いとも言わず、こけたことにも触れず、気付いていないからだろうけどスカートが捲れたことにも触れず、いつも一緒のモミジちゃんのことを開口一番——いやさ執筆一番に尋ねるとは。しかも、あの速さで文字が余り崩れていない。こりやあたしの本気よりも上手いぞ。

……………妬けるなあ。

じゃなくて！ ちがだろおあたし。そうじゃないだろう？ 何でそっちに思考が転がるんだ？

内心で首を捻るでなく、曲げつつ思い。更にはカナエちゃんの速

筆よりもあたしの字のほうが下手だろう事実へこみながら、

「ごめん、見てないよ。どうしたの？　いつも一緒なんだと思ってたけど」

答えとともに疑問を放つ。

この一週間。トイレや就寝時以外はカナエちゃんとモミジちゃんはいつも一緒だった。就寝時も、四回くらいは一緒だったし。

なのに、学年変わり初日の放課後。それぞれに部活動があるにしても、カナエちゃんが探し回るほどに長い間に一緒に居ないとは……。そりゃ、いつもどこでも一緒に居れるわけじゃないのはわかるし、ただすれ違ってるだけかもしれない。

けど、カナエちゃんの必死さを見るに、結構長い時間探し回っているだろうことが推測される。

ケンカでもしたのかな？

思うが、即座に否定する。カナエちゃんとモミジちゃんがケンカなんかをするわけがないということではなく、二人ならケンカをしてもすぐに仲直りするだろう、と。

その場合は、きっとカナエちゃんがすぐに折れちゃうんだろうな。カナエちゃんはおでこを擦り剥いたのも気にならないほどに、不安そうな表情をしている。

涙は、モミジちゃんが居ない間一人でいたのを我慢していたところにあたしがいて、気が緩み、更にはこけてしまった拍子に我慢していたのが出てしまったのだろう。

「よし。モミジちゃん捜すの、手伝うよ。だからさ、ほら涙を拭こう」

あたしがポケットからハンカチを取り出して、目に溜まっている涙を拭いてやろうとすると、カナエちゃんはそれより早く袖でぐいと乱暴に拭いた。そして、そのままそっぽを向いてしまう。

こういう時でも強がるカナエちゃんを抱きしめたい衝動に駆られるが、今それをしたらいかなだろうと、精一杯自粛する。

そこで、あたしはカナエちゃんの足元にあるソレに気付いた。

「あっ」

思わず、声が出してしまった。

その声に反応してカナエちゃんが振り向き、あたしの目線を追う。そこにあっただのは、雑草と雑草を結んでアーチ状にした、古めかしい所謂“罨”とか“トラップ”とか呼ばれる物。

カナエちゃんはそれを見て、あたしを見て。またソレを見てから……あたしを批難のこもった疑わしげな目で、半眼で見つめてくる。「え、えーとね？　ち、違うのよ？　あたしじゃないわけじゃないけど……その、ね。わざとじゃないのよ。偶然……そう！　偶然で……ごめんなさい」

再び涙を溜めた半眼という強烈さに加え、唇をかみ締めるという凶悪コンボの前に、あたしは言い訳をさっさと止めて心の底から謝った。

カナエちゃんの機嫌は最悪なものになった。

……うわーん！

ミッション1

数時間前のダイジェストメモリから、現状へと思考を復帰。

カナエちゃんは今、長くてふわふわな亜麻色の髪をシャンプーでわしゃわしゃと洗っている。

長い髪を洗うのはいつも思うが大変そうで、肩口で適当に切っちゃってるあたしとしては、羨ましいけど簡単でいいやと安心してみたり。

カナエちゃんは髪を洗うとき、いつも目を瞑っている。泡が目に入るのを恐れているのだろうけど、ぎゅっと瞑ってどこかきこない動きで髪を洗う姿は、正直とってもラブリイ。手伝ってあげたくなるのだが、カナエちゃんはそれを断固として拒否するもんだから、指をくわえて、と言うわけでもないが大人しく見てるしかない。

ああ、手伝いたいっ！ ほらほらあ、ああもうもう。惜しいよカナエちゃん、シャワーのコックはもう少し先！

カナエちゃんは結構生真面目で几帳面だ。身体や頭を洗う時、必ずシャワーを出しっぱなしにしない。ちゃんと止めておく。あたしなんか、面倒臭いからって出しっぱなしにしていたらカナエちゃんに睨まれた。だから今ではあたしも洗っている最中はシャワーを止めている。

浴場内にまでホワイトボードを持ってくるわけにはいかないからか、浴場内での意思伝達方はジェスチャーや視線だ。たまにわかり難い時があるが、一生懸命に意思を伝えようとがんばる姿が、可愛すぎる。

ジェスチャーゲームでこちらの意思通りに伝わらない時や、相手の意思がわかり難い時なんかとてもイライラするが、カナエちゃんは別だ。別ばらだ。見てて楽しい。

はっ。いかん。あたしも見惚れてないで頭洗わなきゃ。

ボディソープやシャンプー、リンス等々必要品は、ほとんど浴場

に備え付けられている。肌のことや好みで違う物を使いたい人は、
寄宿舎内にある購買で数種類用意されているのを買えばいい。

あたしはそんなの気にしないので、洗顔クリーム以外は浴場備え付けのを使用。さすがに洗顔クリームは自分の好きなヤツを使いたい。があーつと頭を適当に洗う。あたしは三回に分けて頭を洗う人なので、最初は適当。爪を立てないよう気をつける。んで、ジャーッと流す。また洗う。今度は揉むように。で流す。また洗う。今度はマッサージするみたいに。両者は似ているようで違うのだよ。とか誰かに説明を交えながら洗い終え、流す。

頭、てか髪の毛の洗浄を終えたあたしは何となく隣に目を向けてみた。偶然にもカナエちゃんもこっちを見ていたらしく目が合ったのだが、すぐに逸らされた。カナエちゃんはまだまだ不機嫌満開らしい。はあ、と肩を落としながら、あたしは並みの温泉以上の大きさを誇る浴槽に入る。きちんと肩まで浸かってみる。半身浴ってのもあるけど、アレはダメね。お風呂ではふにゃってなるまでだらけないと……ふや〜。

いいねえお風呂は。日々の疲れが一息に吹き飛ぶ。肉体的なものはもとより、精神的疲労なんかも吹きとぶ気がするね。お風呂というモノを最初に思いついた人を誉めてあげたい。

どーでもいいけど、お風呂の英訳であるバスってのは、イギリスにある温泉街バースが語源なのよねえ。たしか三つの源泉からなる温泉だっけ。歴史ある温泉。一度でいいから入ってみたい気もするけど、無理っぽいよねえ。

はふ〜とふやけにだらけを加味した溜め息を吐く。

洗い終えたカナエちゃんも浴槽に入ってきたが、あの、カナエさん。なしてそないに距離をおかれるんですの？ 二人しか居ないんだからもつと近づこうよ。ソノちゃん悲しい。

カナエちゃんは浴槽に入る時は髪を結ばずに桶に入れている。カナエちゃんのフワフワヘアを入れた桶は、ぷっからぷっからとカナエちゃんの周りを遊覧浮遊している。弛緩しきってへにゃってい

るカナエちゃんがとてもキュート。

たえ不機嫌な人でもふやけさせるお風呂マジック。すごいぞお風呂さすがだお風呂。

さて。やたら大きなそこいらの温泉以上の浴槽。なんと作りは大理石。無駄に金かけてる。マーライオン居るし。じゃばじゃばお湯を吐き出してゐるし。

そんなことを考えながら、あたしはゆっくりとカナエちゃんに近づく。向こうが距離を開けるなら、あたしは距離を詰めないかね。いやあ、別にいやらしいことなんて考えてないっすよ。

へっへっへとか脳内で笑いながら気配を消してゆっくりと近づく。無駄に大きい浴槽、二人しかいない、向こうは弛緩しきって気付いていない。これはもう絶好のチャンスっ。

ふふん。あたしの考えはこうだ。

カナエちゃんはかなりご立腹していても許してくれない。つまり正攻法は無理。ならばもう変化球でいくしかない。それも生半可な変化球じゃダメね。カーブやスライダーなんて面白味にかけるわ。いっそナックルとかムービングファストボールとかスプリットフィンガーファストボールとか、（どれがどんなモノなのかはよく知らないけど、きっと名前から察するにスゴイに違いない。）あからさまに正攻法じゃあないものがないわね。……それにちよつと言いたいことがあるしね。

カナエちゃんは壁際の方で肩まで浸かって、ばばんがばんばんばんな状態になっている。うんうん。ちゃんと肩まで浸かって百は数えないとね。

ゆっくりと近づきながら、あたしはあらかじめ用意しておいた桶を頭にかぶり潜水モードに移行する。ふっふっふ。実はこのミッシェン。ずっとやりたくて前からいつやろうかと隙を狙っていたのさ。いつもならモミジちゃんが居て、こういうことをすると怒られちゃうけど、今日に限っていない。ナイト様のいないお姫様は今日こそ悪者の魔の手にかかってしまうのだ。

当初の目的であるはずの『許してもらおう』が、どんどんどうでもいい事に潰されていくが、そこはそれ。ソノちゃんマジック。

………てか冷静に考えると、なんであたしは年下の子にこんなにも弱いのだろうか？ ふと疑問に思い首を傾げる。勿論潜水しながら。

ううむ。アレかな。上しか居ないから下の子に対してお姉さんぶろうとして、逆に失敗してるとか？ いやいや。そんなまさか。むしろモミジちゃんのほうが年上みたいじゃない？ なんつーか物事をわきまえてるみたい。——アレ？ だとするとあたしって相当ダメな人ってことに……。

イカンイカンと、あたしは軽く頭を振ってなんとなく自分を貶めている気がする思考を早々に放棄する。

そうしているうちに目標に近づいた。目を瞑ってふやけ——もない、ふにゃけてるカナエちゃんはあたしに全く気付いている様子はない。もしかしたら寝ているのかも、と思うが油断はしない。きつとコレを逃したら二度とチャンスは来ない。何故だか確信的にそう思うのだ。

脳内でジョーズのテーマを“でーでんでーでんでーでん”と流しながら、あたしはこの先に訪れる素適な結末を思い、ひとり笑みを浮かべる。ふへへへ。

ミッション・2

いいか。作戦はこうだ。

まず、我々（あたし一人だけど！）が居るのは目標の後方、僅かターゲットに距離をとった位置だ。ここからだ我々は目標の視認ができるが、目標からは我々を視認できない。

だが！ だからと言って油断はするな。銭湯もとい戦闘ではたった一でも油断したらそれは即失敗に繋がる。常に気を引き締めておけ。しかし、緊張はしすぎるな。それもまた失敗の元だ。今回の任務は失敗したら次は無く、最悪状況は今よりも悪くなる可能性が、濃厚だ！

失敗は許されない。適度な緊張を持って気を緩めず、万全を期していけ。

——Go Charge！

あたしは一人作戦会議をどこぞのミリタリー映画を見すぎたイタ子供みたいに開始すると、知識の薄さからまさしくみようみまねで進行し即座に終わらせた。

最期の掛け声は、まあカッコイイかなと。

ともあれ、ミッションスタート。

先ほどもあたしの脳内大佐が言ったように、後方に回っているかと油断してはいけない。これだけ広いお風呂なうえに、カナエちゃんは今一人だ。これはカナエちゃんがふにゃけているからこそバレていないだけであって、本来なら容易に気付かれてしまう状況なのだ。

静かな大浴場。ほんの少しの物音でさえ良く響いてしまう。

抜き足差し足忍び足、という泥棒だか忍者だかの文句を持ってしてもこのお湯が張られたお風呂の中では音が出てしまう。今回のポイントは、いかにしてこの音を消せるか、だ。

考えろ。考えるんだ椎本苑！

とか臨場感たっぷり自らの思考を鼓舞してみるが、実際気をつけていればそこまで音は出ない。それにあたしは潜水に近い状態だ。気付かれるはずが無い！

あたしは自身たっぷりそう確信する。勿論、慢心などしない。些細なことで状況が覆ったりなどと言うことは珍しいことじゃない。奴ら「そんなはずでは」は、こちらが気を抜くと即座に牙を向いて襲ってくるのだ。

潜水し、ゆっくりゆっくりと相手に近づくあたしは、獲物に忍び寄る人食いサメ。そう、ジョーズなのよ！

再び脳内で例の曲が流れる。
さあ、カナエちゃんの白くて薄い背中が見えてきた。あとはもう一気に、がばーっ、と襲い掛かる――じゃなくて、えっと、抱きつく？　だけよ！

あたしは舌なめずりをしつつ、一気に浮上。ザバーッと盛大に水音がたつがもはや関係無い。今さら気付いたところでもう襲い。逃げたところで意味は無く、あわや美味しいカナエちゃんはジョーズ・ソノちゃんにその柔肌を晒すだけ晒して食べられちゃうのさ。

カナエちゃんがビクリと肩を震わせてこちらを向く。いきなり背後から現れた異常事態に、こちらが嬉しくなるくらいビックリして、目を一杯に見開いている。

「ふははー。逃げようたってそうは問屋が卸さない。てか遅いー」
逃げようと立ち上がったカナエちゃんに背後から思いっきり抱きつき動きを封じる。抵抗するかと思われたカナエちゃんはそこまで抵抗せず、ちょっとだけ拍子抜け。あたしは抱きついたままお風呂に再び浸かりなおす。その際、桶に入れていたカナエちゃんの髪が桶から出てしまい、ホラー映画クラゲのようにお風呂に髪が浮く背後から抱きしめているあたしに亜麻色の髪が何本かくつついて、すこしくすぐったい。

「うわ。カナエちゃんお肌すべすべ。いいなあ」
あたしはちよっぴり、けれど決定的な敗北感に落ち込みそうにな

る。

髪から覗くカナエちゃんの耳は、お風呂のせいかな少し赤くなっている。肌が白いからそれが余計にわかる。

もしかしたら、恥ずかしがってる？

あたしはカナエちゃんに抱きついてるが、カナエちゃんからすると抱きつかれてるというより、抱き抱えられていると言う感じかも知れない。

あたしはカナエちゃんをちょうど抱っこでもするようにしている。膝を立てているあたしの脚の間に、カナエちゃんの身体が収まっているのだ。そして、あたしの腕がカナエちゃんの首にかかるくまわっている。

うう。なんか……こうして冷静に見てみるとあたし、かなり恥ずかしいことしてない？

真っ赤になってるカナエちゃんを見て、あたしまで恥ずかしくなってきた。

態勢が態勢だけに、お互いの身体が密着してるし。あたしのささやかな胸は、巻かれていますタオル越しにカナエちゃんの背中に押し付けるようになってる。

……まあ、ちっちゃいから苦しいなんてことは全くないんだけど。自虐したからだろうか、恥かしさが薄くなった。代りに、空しくなってきたけど……。

「ねえ、カナエちゃん」

あたしは自分を落ち着かせると、ゆっくりとカナエちゃんに話しかける。

「こうしてると、落ち着かない？」

ぴくり、とカナエちゃんの身体がかすかに震えた。

多分だけど、カナエちゃんはあたしのことをもう怒ってはいない。それでも、こうして怒っているかのように振舞っていないとダメなのだろうと思う。

カナエちゃんは素直じゃない。

どうしてなのかは知らないけど、カナエちゃんは喋れない。それは言語障害とかじゃなくて精神的な問題だという。

いつからなのかは知らないけど、きつと、どういう理由であれ喋れないということはかなり辛いことだろうと思う。

相手に意思が伝わらない。

奇異の視線。

周りと同じに扱われないという寂しさ。

それはどれだけ惨めな思いにさせることだろう。

きつとそれは虚勢を張らないといけないくらい……。

確かにあたしのしたことはカチン、とくるものだったろう。多分あたしがされてもちよつと怒る。けどそれは、“ちよつと”のことなのだ。ちゃんと謝れば許してもらえる程度の。

カナエちゃんはきつと、何でもいいから感情を一つのこと縛っていいと、寂しさに押し潰されてしまいそうなんだと思う。

あたしがここに来てから一週間くらい。たったそれだけの時間でも十分にわかることがある。たとえば、カナエちゃんにとってモミジちゃんは居なきやいけない大事な存在なんだとか。

カナエちゃんとモミジちゃんはいつも一緒だ。まるで中のよい双子の姉妹みたい。あるいは新婚の夫婦みたい。

きつと、カナエちゃんのことをきちんと理解してあげれるのはモミジちゃんだけなのだろう。確かなことはあたしにだってわからない。けど、カナエちゃんはそう考えていて、他の誰よりもモミジちゃんを信頼していることは確かだ。

そのモミジちゃんが何故だか今は傍にいない。それもこの時間になっても。

それはカナエちゃんにこの上ない不安と寂しさを与えてしまう。けど、カナエちゃんはその代りに誰かにすがるといふことをしない。不安だろうが寂しかろうがそれを隠してしまう。あたしがここに来た最初の日の夜のように。

あたしは、それを絶対に良しとはしない。それは何処までもあた

し一人の勝手な思いだが、知ったことか思う。あたしは、知っていることを知らん振りできるような器用な人間じゃあないし、そんな人間には絶対になりたくない。

そう、だからイヤだったら抵抗してくれればいい。そこに本気で嫌がつているという感情が見えたら、あたしは多分諦めて――他の手を模索する。

「カナエちゃん。あたしはね、カナエちゃんのこと好きだよ」

カナエちゃんがビクリしたように首だけで振り返る。その瞳がなぜかひどく揺れている。

ミッション・コンプリート

驚きの他に、どこか恐れのようなモノを浮かべるカナエちゃんに、あたしは笑みを向けて話しつつづける。

「そりゃ、たまに生意気なヤツめ。とか思ったりもしたけど、この数日でそんなところも含めて好きになっちゃった。……そうだね、こうして広いお風呂で密着してじゃれる程度には好き」

二人だけで居ると無駄に思えてしょうがない広さを誇る浴場に、あたしの声が小さく反響する。ときおり、シャワーから、ぴちゃんという水が滴り落ちる音が拡散反響して耳に聞こえるのをBGMにしながら、あたしは会話を続ける。

「カナエちゃんはどう？ あたしのこと嫌い？」

訊いてから、あたしは苦笑する。

「たった数日だけだし、わかんないよね。まだ」
でも、と続ける。

「たった数日でもわかることはあるし、これからも色々わかっていくと思う。好きなところは勿論嫌なところも。当然、あたしの嫌なところも見せちゃうと思う」

そこまで言うのと、不意にカナエちゃんが首に回しているあたしの腕に、小さく細い華奢な指を当ててきた。

？ と首を傾げた途端――

「ふえーっ！？ 、ちよ、や、やめてカナエちゃん！ ダメ！

あたしはくすぐったいのはノーセンキュー！」

つつーと当てた指が動き出した。

あたしは抱きかかえたような状態のカナエちゃんを離さないままに、必死で抗議の声を上げる。いや、マジでくすぐったいのはダメなんだって。ひーっこ、呼吸が苦しい。

しばらくして、あたしはカナエちゃんが腕に文字をなぞっているのだと理解する。

あたしは精一杯にくすぐったいのを我慢して、よじりそうになる身体を堪える。

——きらいじゃない

まずはそう書かれた。

次いで、

——こうしているくらいには

と書かれた。

あたしは告げられた事実には、自然と満面の笑みを浮かべる。だって、嬉しいじゃないか。

カナエちゃんは書いてから恥かしくなったのか、他人の家に来たネコのようにおとなしくなった。向けていた顔は俯いていて、髪から覗く耳はこれでもかと赤い。態勢も、崩れていたものから膝を抱えた、体操座りみたいなのになっている。

あーもーかわいい！

妹がたらこんな感じなのかな、とあたしは抱きしめる力をほんの少し強めた。

女子校ということや、実際のそう言った例とかアキラさんのせいで、あたしは必要以上に色々気にしすぎていた。けれど、お風呂とこういうゆる裸のつきあいをすることで、そんな屈折した、偏見じみた考えは消えた。そうさ、これくらいは全然普通のこと。変に気にするからおかしくなる。

明日からは、もっと楽にいこう。

あたしはそう思い、これまで通りの自分でいようと決めた。まあ、多少は高校生らしく変わる気にいるが。

さて、カナエちゃんとの仲を深められたことで、まずしなきゃいけないことがるよね。

あたしは抱きかけた状態のカナエちゃんを一時的に解放し、向かい合うような態勢にする。

「さて、カナエちゃん。あたしはさっきから、ずうーっと言いたいことがあった。聞いてくれる？」

カナエちゃんは不思議そうにしながらも、コクコクと頷いた。顔は今もほんのり赤いが、長湯してるせいかもしれない。

「いい？ カナエちゃん。お風呂にはね、絶対に守らなきゃいけない鉄の掟があるの」

？ と疑問をうかべるカナエちゃん。やっぱりそうか。この子はわかっていないらしい。

ならば、ここは先輩として、友人として、何よりお風呂の鉄則を知る者として、この無知なお嬢ちゃんに教えてあげねばなるまい。

「カナエちゃん」

あたしは警戒心を与えないよう、自分が思うとびっきりのスマイルを浮かべる。そう、スマイル0円を謳う某ジャンクフードショップでもお金を取れるくらいのとびっきりのスマイルだ。

ぽん、と肩に置かれたあたしの手に、カナエちゃんは持ち前の小動物パワーで危機を察知したのか、ビクリと大きく震えた。それと同時に顔が引きつる。

だが、あたしは気にせず

「前から言おう言おうとは思ってたの。けど、カナエちゃんたら恥かしがりやさんね、てなんとか自粛してたのよ。けどね、それももう限界」

カナエちゃんが明らかに怯えだすが、あたしは止まらないし、お風呂大好きっ子としては止まらない。

だから、今まで言わずに置いたことを言う。

すー、と大きく深呼吸して、

「お風呂では、タオルを外す！」

言った途端、

「ああ、こら逃げるなカナエちゃん！ ダメよ！ これは鉄則で言わば法なのよ！ お風呂法！ 破った者は強制的にひん剥かれると決まってるんだからっ！」

ざばざばと逃げ出そうとするカナエちゃんをがっしりとホールドする。

カナエちゃんはイヤイヤをする子供みたいに、これから起こるタオル剥きの刑に抵抗するが、そんなことであたしの手が緩むはずが無い。

むしろ俄然やる気になる、ちよつと嗜虐心の芽生えちゃったあたしがいたりする。

「へっへっへ。さあ、カナエちゃん。タオルを脱ぎ脱ぎしましょうね」

ああ、ダメだ。顔がものすごくニヤケてしまう。

カナエちゃん半泣き。そこがまたあたしのイケないトコロをくすぐる。

赤いモノを見た闘牛並みに興奮しているあたしを止められるものなどいない。止まる気も無い。何より、邪魔する者はいない。

カナエちゃんの両手を片手一つで拘束し、抵抗の手段を排除。あたしは空いたもう片方、当然利き手で、カナエちゃんの身体に巻かれているタオルをひっぺがす。

しかし――

「……あれ？ もしかして、あたしって微妙にカナエちゃんにすら負けてない？」

あたしは露わとなったカナエちゃんの裸身の一点、おへそより上、首より下の位置を見て、愕然とする。

確かに服脱いでる時なんかはチラっとなんか見てないけど、あまり大差ないように見えた。けれど今、こうして間近で自分のと見比べると……。

そんな風に検分していると、カナエちゃんが大きく腕を振るって

あたしの拘束から容易く脱出した。

カナエちゃんとはあたしから距離を大きく摂ると、涙目でこちらをキッと睨み。肩を抱いて胸を隠している。

……まあ、それはいいよ。それよりも……。

え、あれ？　ちよつと、待って。中学生、それもあきらかにおこちやまな体型のカナエちゃんにすら負けるあたしって、もしかして……貧乳よりもランクが劣る、虚乳？

え、ちよ……。

あたしは若干のぼせ気味になりながら、しばらく茫然自失状態をリアルに体感していた。

搜索ごっこ(始)

あー……頭がふらふらする。

ダメね。長い時間お風呂に入ってちゃ。まあ、これはのぼせる度に思うのだけど、なんでか活かされたためしがない。まったくもう一度言ってみる。全然無い！

……あたしって鳥なのかしらん？

なんて、致命的な打撃を受けた自分をさらにいじめてみる。思わず根暗臭い笑いも零れてしまいそうだ。

カナエちゃんとあたしの胸の差はランク一つ違い。鯖を読んで四捨五入したりとかすればなんとか同じになるけど、正確にあらわすなら僅差で違う。

言うまでも無いことだがけど、正確な数字はここでは割愛させてもらう。あたしはモモのような嗜虐趣味はないのだ。

さて、ご飯も食べた、お風呂にも入った。とすれば後はもう寝るだけなのだが、今日ばかりはそうも行かない。

なぜって、結局今日は朝からモミジちゃんに会えてないからだ。そのせいでカナエちゃんは捨てられた子犬のようにションボリしている。ただでさえ庇護欲をくすぐるのに、こんな雨の中の子犬のような雰囲気全放射されるとさすがに黙っちゃ居られない。

さっきお風呂でカナエちゃんの気をまぎらわせてあげようとしたけど、やっぱりあたしなんかじゃモミジちゃんの代わりなんて言う大役は務まらない。大切な人の変わりなんてのは誰もなれないのだ。ましてや、それがいつも一緒に居るほど仲のよい親友とかなら尚更。

『パンがなければお菓子を食えば良いじゃない』なんて台詞があるけど、そう言う問題ではないのだ。確かにただお腹一杯になりたいだけなら別にパンじゃなくたっていいだろう。お菓子と言わずいっそ水を飲むだけでもおなか一杯になる。けど、お菓子はどこまでもいっそもお菓子でしかなく、それはつまりあたしも同じだ。

あたしは同室の先輩で、モミジちゃんは大切な親友。

別にさっきのことを引き摺って卑屈になっているわけではない。そりゃ泣きたいほどに悲しいが、そこはそれ。持ち前のソノちゃんマジック必殺の開き直りで潔く無視する。そうとも、栄養が身長にも胸にも活かされていないというこの寂しく悲しい現実は、今はこうポイっと捨てておく。……実は女の子として深刻な問題じゃないかしら、これって。

——だーから、今は！　それは！　虫！　違うつ！　無視！　蒸し餃子が食べたい！

冗談はさておき。あたしはカナエちゃんやモミジちゃんの友達のもりだ。

なら、あたしは困っている友達を前にどうすべきか。簡単。

「カナエちゃん、モミジちゃんを探しに行くよ」

お風呂から帰ってきててもまだモミジちゃんはいなかった。モミジちゃんと同室の子に訊いたけれど、クラスが違うらしくてよくは知らないらしい。とりあえず、帰りが遅くなるとは聞いたらしい。

カナエちゃんはあたしの突然な提案にキョトンとしている。

うん。まあ、そうだろうね。なにせ今部屋の鍵開けたばかりだもん。探しに行くならなぜ開けたって感じたよね。しかし、そんなことは些細なことなのだ！　思案にくれるあまりついすっかり開けてしまったことなど！

「さ、モミジちゃん探しにれつつらごー」

誤魔化すた——げふんげふん。あー士気を高めるためにもあたしはそう高らかに宣言しつつ、カナエちゃんの手を引いて部屋を後にしたのだった。

——と、思いつきと勢いだけで言ってみたものの。

「アテなんてないのよねー」

お友達の少ないあたしは、よくカナエちゃんモミジちゃんコンビ

と行動を共にしていたけど、そのほとんどが室内なのでモミジちゃんがどこに行きそうなのがまったく見当がつかない。

モミジちゃんは基本的にカナエちゃん至上主義な感がある子なので、その行動のほとんどはカナエちゃんの意味が優先されている。

そのカナエちゃんはカナエちゃんでもどうにも出不精な感があって自分の部屋から出ないし、たまに出ても隣のモミジちゃんの部屋だし。

むう。考えてみるとこのミッションって難易度がすごく高いような……。てかいつも一緒にカナエちゃんが見つけられてないんだから、新入りのあたしと一緒にになったところで結果は変わらないんじゃない？

いやいや、いかんぞ椎本苑！ そんな後ろ向きなこと考えていると得られる結果も得られないではないか。あたしの基本は常に右斜め前向きなはずだ！ 常人ではちよいと思いつかないような斬新かつエキセントリックな妙案でもって他者との一線を画さねば。

と、そんなことを考えているとクイクイ、と服の袖を引っ張られた。ちなみに、今の服装はあたしもカナエちゃんも私服。あたしは長袖のTシャツにホットパンツで、カナエちゃんはサイズが大きいらしくちよつとぶかぶかな蜂蜜色のパジャマ。いつ見ても思うのだが、この凶悪なかわいさはどうにかならないのだろうか。そうそう居ないぞ、ここまでパジャマが似合う子って。

『聞き込みが捜査の基本！』

カナエちゃんはホワイトボードにそんなことを書いていた。ん、まあ、色々思うことはあるのだけれど、確かにこの手掛かりがまったく無い状態では聞き込みくらいしかないだろう。

しかし、あたしは考える。

頭では理解しているのだ。それが現状取れる唯一の手段で最善の策であると。けど、あたしは、椎本苑はそれを良しとはしたくないと考えている。

なぜなら――

さつき奇抜な妙案を立てると決意したばかりだし。

むむ。ここは悩みどころだ。あたしのアイデンティティを優先するか、モミジちゃんの早期発見を取るか。

考え込むあたしを、カナエちゃんがなにやら不安そうに見てくる。ホワイトボードを顔の位置に掲げ持っているから顔の上半分だけ覗いているのだが、それがまた狙ったようにかわいらしい。他の奴――それこそ中学の友人連中なんかがこんな仕草しようものなら笑ってキモイとか言う所だけど、カナエちゃんはこれを素でやっていてそれが他人にどう映るかわかっていないっぽいから素直にかわいいと思ってしまう。

その上末っ子で上は居れども下のいないあたしには、カナエちゃんみたくかわいい妹がほしかったりするんだな。ああ、兄貴たちの気分がわかった気がする。

「いよし！ 聞き込みまくるよカナエちゃん！」

あたしはいとも簡単に自らの決意とアイデンティティを、ボレーシュートで明後日の方向に蹴り捨てた。

いや、だってほらお姉ちゃん面してカナエちゃんの好感度上げときたいじゃん。それに、妹扱いされたことは日常茶飯事でも、妹扱いできるなんて新鮮で、そうそうないしね。

搜索ごっこ(始) (後書き)

えと、ホント大変長らくお待たせして申し訳ありませんでした。

言い訳臭いですが、一人暮らしやまったく慣れない職種の職業にいたりとか、親が離婚したり親権がどうか……。

何より、パソコンが手元に無いしネット環境整ってないし！ 工事費から何から何までなんて出せるかーっ！っ！

ぜはーぜはー。し、失礼。

ともあれ、これからはどうかこうにか更新していきますので見捨てないでやってください。

長々と失礼しました。

んでは、続きをどーぞー！

搜索ごっこ(終)

さて。今あたしたちが居るのは三階。ま、当然だよな。部屋に戻ってきたんだし。時間は消灯の少し前。この時間ほとんどの子達は自室に居る。だからと言っていちいち部屋を廻るのはめんどくさい。その上、あたしはほとんど知り合いが居ない。ならばどうするか。

簡単。ほとんどが自室に居るが全員ではないのだ。その『ほとんど』から洩れた人達のところに行けばいいのさ。

カナエちゃんはどうかやらあたしに全て任せる気らしく、ホワイトボードには何も書かずただあたしを見つめてくる。うあ、そんな期待のこもった瞳で見られると照れくさいんですけど。

「とりあえず、二階に行くよカナエちゃん。そこで聞き込みだ」

と、カナエちゃんと一緒に二階へ行こうとすると、目の前を見たことがあるような姿が歩いていた。

後ろを向いているので誰だかイマイチわからないけど、とりあえず見覚えあるし、もしかしたらってこともあるし……うん。消灯までに見つけなきゃだし、ダメもとでもなんでもいいから手始めに目の前を歩く彼女に訊いてみよう。聞き込みなんてのは数をこなしていくのが基本だしね。

さって、そうと決まれば善は急げ。その急ぎたるや夜間列車の比ではない。てーことで、さっそく訊ねてみまっしょい。

「すいませーん」

あたしはパタパタと駆け寄りながらそう声をかけてみた。

近づくにつれ彼女の見覚え感が高まる。うーん、誰だっけなあ。身長はあたしと大差ない感じ。髪は茶色っぽい黒髪を後頭部で纏めている。四方八方に毛先が飛び出ている特長的な髪型は、多分シニヨンかな。んで、なんでかこの時間に制服着てる。

と、その制服姿が振り返った。あ、見たことある見たことあるすっごい最近見たよこの子。あーえっと誰だっけ？

「なんですか？」

そう言う彼女の口調は丁寧ながらもどこか不機嫌で、切れ長の目つきが見るからに冷たい。うわぁ、声かける人間違ったかな。そう思わないでもない。

しかしいきなり頓挫するのは後に愁いを残すし、何より誰にでも躊躇しないのがソノちゃんクオリティ。ま、声をかけてしまった手前引くに引けないというのもあるんだけど。

「えっと、」

「……椎本苑さん、でしたっけ？」

あたしが何か言おうと口を開くと、それを遮るかのような絶妙なタイミングで彼女はそう言った。むむ、なんであたしの名前知ってるのさ。

「ハア、私は赤穂瑞希。出席番号一番、あなたと同じクラスですよ」
あこう……アコウ………アンコウ。うーん、どう目を凝らしてみても目の前の自称『あたしの同級生』がお魚の仲間だとは思えない。

「ちょっと、なんか失礼なこと考えていませんか？」

「チッ、勘のいい……」

「――聞こえてますよ？」

やべっ。思わず声に出しちゃった。ま、勿論わざとだけどね。や、ほら。なんかさ、こう硬そうで真面目そうなヤツって無条件でからかいたくなるじゃない。イチイチ敬語！ なんとなく醸し出されている委員長オーラっ！ もう、完璧にからかって遊びたいっ！

どうにかしてお友達になれないかな。

「まあ、いいです。それで、何か用なんですか？」

用……あ。

「そうそう。枯葉紅葉ちゃんって知ってる？」

「二年生……中等部生のですか？」

「うん。知ってるなら話が早いや。どっかで見なかった？」

「見ましたよ」

うっわーお即答ですか。

ちよ、えー？ そんな一人目でいきなりわかつちゃうってどうなの？ セっかく士気を上げて気合入れて意気揚揚とカナエちゃんを引っ張りながら、徐々に手に入っていく断片的な情報を繋げて、カナエちゃんの感謝と尊敬の念を一身に浴びつつハッピーエンドを迎える予定だったのに……。ふっ、結局いつの世も予定は未定だと言うことか。世知辛い世の中だなあ。

「ちよっと苑さん。なにを百面相してるんです？」

「失敬な！ あたしはその気になれば二千面相くらいはかるいわ！」
「きやつ。ちよっと、いきなり大きな声を出さないで下さい。まったく、こっちは長時間労働で疲れているんですから……」

なにやら見た目に反した可愛らしい悲鳴を小さく上げた後、瑞希さんはぶつぶつと呟いていた。何を呟いたか上手く聞き取れなかったが、今はそんなことどうでもいいのでサクッと無視する。

「カナエちゃんよろこべ……あれ？」

ぐりんと身を捻りながら笑顔で振り返ると、ついさっきまであたしにくっ付いていていたカナエちゃんが居なくなっていた。おかしいな、どこ行っちゃったんだろ？ きよろきよろと高級ホテル並みに――泊まったこと無いけど――広い廊下を見渡す。むう？

「ソノさん」

「ん、なに？」

あたしは振り返らずに背を向けたまま応える。あれー、カナエちゃんホントにいないし。セっかくモミジちゃんに繋がる重要参考人をこうして捕まえたのに。今度はカナエちゃんが迷子か？ いや、確かに寄宿舎は広いけど迷うほどじゃないぞ。言うかカナエちゃん是一年間ここで暮らしてたんだよね。ならそもそも迷うわけ無いし……。

「天羽叶、枯葉紅葉と知り合いなの？」

「ノン！ 友人一号と二号さ」

「あの二人と、交友を？」

「ついでにカナエちゃんとは同じ部屋」

ちよっと自慢げに言ってみてから、さっきの微妙なニュアンスの含み方に疑問を持つ。なんだろう、驚いたというよりもどこか疑わしげな言い方だな。

あたしはカナエちゃん探しを一時中断し、赤穂瑞希さんとやらに身体を戻す。ああ、変に身体を捻ったままだったから腰が地味に痛い。

「あの二人がどうかしたの？」

「いえ、別に……」

瑞希さんは無表情に視線を逸らした。

「それより、何か訊きたい事があったんじゃないですか？」

「あ、そうだった。モミジちゃんをどこで見たの？」

視線どころか話まで逸らされたようだが自分がなにをしていたか思い出し、若干の気持ち悪さを感じながらも追及するのは止めた。それよりも今はモミジちゃんだ。実際この時間まで見当たらないというのはいくら学園の中と言っても心配になる。

瑞希さんはあたしをちらりと一瞥すると小さく、しかしまるで聞こえよがしに溜め息を吐いた。む、なんか感じ悪いぞ。

思うも、今はとりあえず気づかない振りをしておく。今はそんな些細なことに構ってられないしね。それに、クラスメイトなら報復のチャンスは幾らでもあるし、この件のお礼も兼ねて目にモノを見せてくれるわ。けけけ。

「枯葉紅葉なら生徒会室にいますよ」

「生徒会室？」

なんだってそんな一般生徒が行きたくない場所ベスト5にいるんだろう？

「それじゃ、私はこれで。おやすみなさい」

あたしが心中で首を傾げていると、これでもう用は済んだとばかりにおざなりな挨拶を残してスタスタと歩み去って行った。

「あ、ちよっと」

「まだなにか？」

足を止めると不愉快そうに振り返った。おお、表情はコレでもかというくらいにさっきまでと同じ無表情なのに、身から不愉快と不機嫌が実体をもって立ち上っている。ここはカナエちゃんのかわいさ溢れる小動物オーラで対抗するしかない！

さあ、カナエちゃん！

……あー、そいやいつの間にかいないんだった。まあ、居たところで怯えるだけかな。びくう、とかしそうだな。うん。めっちゃ見てみたい。今度、瑞希さんをわざと怒らせてからカナエちゃんと対面させてみよう。カナエちゃんが涙目で怯えるにしろ、その愛らしさに、瑞希さんが和むにしろ、あたしとしては見てて楽しい。

「用が無いのなら帰りま」

「ストップ！ ごめんごめん。つい悪だく——げふんげふん。あー、考え事を……」

「……」

瑞希さんの言葉を遮り慌てて謝る。途中なにかイランことを言いそうになったが、何とか誤魔化する。

あたしの言葉に瑞希さんがジト目で睨んできた。よく見ると眉のあたりがピクピクと痙攣している。どうやら怒らせてしまったようだ。

——はっ！　もしかしてあたしってばこの無表情娘の表情を崩すことに成功しちゃった！？

つと、いかんいかん。これじゃ堂々巡りだ。気を取り直して、

「ありがと」

「……は？」

「情報の提供、感謝します」

びしっ、と以前なにか余計なことをやらかした兄貴が上司に向かってやっていた敬礼を思い出しながらやってみる。あの時の兄貴とは違い、笑顔で。

「——ふん」

瑞希さんは小さく鼻を鳴らすと立ち去っていった。って、はやっ。
瑞希さんはまるで競歩でもしているかのような早歩きで、ぐんぐん
と遠ざかっていった。そして、角を曲がり姿を消した。

……あれ？ 帰るんじゃないの？

寄宿舎の部屋は学年ごとに階で分けられている。あたしと同じ学
年なら、彼女の部屋はこの階のはずなんだけど。まあ、いいか。

錯乱と胸きゅん

さて、モミジちゃんの居場所がわかったことだし、カナエちゃんを探しま——ん？

カナエちゃんを探そうと後ろを振り返ると、隠れる場所が無い廊下の一角。誰かが置きっぱなしにしていたらしい着ぐるみの影に、揺れる亜麻色の頭髪が覗いていた。とりあえず、なんでこんな所に着ぐるみが山のように詰まれているのかは無視しよう。多分、着ぐるみマニアが居るんだよ。そういうことにしよう。さすがお嬢様学校。庶民には理解しがたい趣味をお持ちの方がおられる。

「カーナーエちゃん」

びくっ、と見てて気持ちよくなるくらいわかりやすくカナエちゃんは反応してくれた。

うずうずとイタズラをしたくなる気持ちを刺激されるが、時間が時間だしここでカナエちゃんにヘソを曲げられても困る。あたしはどうかこうにか胸の内から湧き上がる衝動を抑えつつ、着ぐるみの山に近づく。

『あの人もういない？』

カナエちゃんは近づいたあたしにそう問い掛けてきた。

けれど、あたしはそれを見ていなかった。

ガタガタと震えていた。ビクビクと怯えていた。ホワイトボードに書かれた文字はまるで赤子の落書きのようだった。膝を抱えるようにして隠れているその姿はここにきて最初の夜を思い出させた。

そして、もっとずっと前に、どこかで——

頭を振って、浮かんできた——思い出しそうになった『何か』を消す。頭がやけに痛い。イタズラで押してみたことのある非常ベルのように警鐘がやかましくなりたてる。

「っ！」

くしゃり、といつの間にか頭に当てていた手が、あたしの意味と

は無関係に髪を引き耷めるかのように掴んでいた。

なんなの、いったい？

急に目の前が真っ暗になったような言い知れぬ不安に襲われる。踏んでいた足場が崩れていくような恐怖がこみ上げてくる。

「!？」

「ごめん、カナエちゃん……。悪いんだけど、しばらくこのままでもいいせて」

わけがわからなかった。

理解が出来なかった。

自分がどこにいるのか。

あたしは本当に『あたし』なのか。

わけがわからない。理解できない。なにより、振り返ったそこには真っ暗な闇しかない気がして、それがとても、とても怖かった。

あたしはカナエちゃんに力一杯に抱きついたまま、この小さな少女のぬくもりにしがみついた。そうしていいないと思い出しそうだった。

——なにを？

あたしとカナエちゃんは瑞希さんがくれた情報を信じて生徒会室の前にいた。

生徒会室は校舎の裏側に独立して存在し、寄宿舎からは校舎を挟んだ直線上にあったりする。おかげで、わざわざ校舎をぐるっと回らなくてはならなかった。まったくこんな遠回りをしなくちゃいけないような場所にあるんだ。

生徒会室の造りは木製で所々に傷んだような箇所が目立つものの、どこか安心させられる温かみがある。高さは、二階建ての家より少し大きいくらい。実家の近くにある古い教会と大体同じくらいだろうか。壁は濃いモスグリーンで屋根は……。夜だからいまいち自信

はないけど多分紺とか黒とか、そういう色だと思う。

……生徒会、『室』？

これはどちらかと言うと生徒会館とかじゃないか？ いや、そんなモノ実在するかどうかは別として。

だって、これはもうあからさまに室じゃあないだろ。てかんだ校舎から独立した生徒会室って。聞いたこと無いぞ、そんなの。なんだってたかだか生徒会ごときにこんな大きな一軒家が要るんだ。

いや、まて。普通に考えちゃダメであたし。ここはお嬢様学校。

そもそのあり方からして普通という言葉には絶縁状を叩きつけてるんだ。おそらくこの生徒会という名の学生組織は、選り抜かれたお嬢様たちの一時の社交場とかになっているに違いない。おそらくこの大きさからして彼女らは少数精鋭。お嬢様オブ・ザ・お嬢様であることは確実だ。セレブだったりアントワネットだったり姫だったり……。くっ、きつと庶民であるあたしを散々馬鹿にするに決まってる。高貴なヤツらはいつもそうだ。そうやって身分を振りかざしてかわいそうなヒロインをイジめるんだ。

なんてね。バカみたいな妄想はこのくらいにして、さっさとモミジちゃん拉致って帰りますか。夜更かしは美容に悪いもんね。あたしはともかくカナエちゃんの美容は損なわせるわけにはいかない。

ちなみに、あのみつともない状態に陥った後、しばらくしてあたしは回復し失態を誤魔化すためにもいつも以上のハイテンションで生徒会に向かおうとした。けど、生徒会の場所なんて知るわけがなかった。心中で軽くパニックっていたあたしはそのことをキレイに失念しており、カナエちゃんに指摘されて初めて気づくという恥の上塗りをしてしまった。

横であたしの手を握っているカナエちゃんを見る。さすがに夜の学校は怖いらしく、ときおり吹く風に揺れる木の葉の、がさつ、という音にいちいち反応している。

『なんだよ！』

あたしが見ていたことに気付くと、首から下げていたホワイトボ

ードに空いた右手だけで器用にそう書いた。いつもより少しだけ文字が崩れているけど、それでもやっぱり無駄に達筆だった。最近思うようになってきたんだけど、多分これは半ば意地だな。

そんなことを思いながら「なんでもないよ」とカナエちゃんの頭を撫でてやる。それで多少は気が緩んだのか、少しくすぐったそうにして身をよじるが嫌ではないらしく抵抗はしてこない。

そんなカナエちゃんに和んでいると、びゅう、と一際強い風が吹きぬけた。

四月とは言え、夜はまだ十分に肌寒い。肌を舐めつけていく風の冷たさが尚更そう感じさせる。少し厚めの生地モノを着ているが、あたしもカナエちゃんも着ているものは寝間着だ。防寒性など高が知れている。

「うあ、寒っ。カナエちゃん、さっさと中入っちゃおう」

あたしはぶるりと剥き出しの手足を撫でる風に震えながら、カナエちゃんの手を強く握って言う。あー、人肌がめっちゃ温い。

「くちゅん」

あたしとは別の要素でも震えながら辺りを挙動不審に見ていたカナエちゃんが、不意に可愛らしくくしゃみをした。

思わずキュンとしちゃったのは内緒だ。

生徒会……室(?)

とりあえずノックを試みることにした。おお、獅子の顔だ。ほらアレだよ、造りは銅製とかで獅子が輪っかを啜えてて、ソレをコンコンと小気味良く鳴らすヤツ。うーむ、まさか学園内でお目にかかるとは思ひもなかった。ってか実家の方でもあんまし見たことないぞ、こんなの。

扉は板チョコみたいなの『いかにも』な感じの西洋扉。質感とノックを打ち鳴らした時の音からするに、多分これは櫪とかじゃなくて、桜の木だろう。桜の木は頑丈さと耐久度はピカイチだったはずだ。まあ、桜好きなあたしとしてはちょっと複雑かな。

「当然だけどさ、返事ないね」

言いながらノブをがちゃがちゃと回してみる。誰かいるなら多分開いてるだろうと思ったのだ。瑞希さんの情報が確かなら少なくともモミジちゃんはいるはずだし。

案の定、鍵は開いていた。

蝶番の軋む、ギイ……、と言う音ともに扉が開く。

「や、カナエちゃん。お化け屋敷じゃないんだからそんなビビらんでも」

なんかもう立っているというよりも、あたしにしがみついちやってる状態のカナエちゃんに、苦笑しながらも優しくそう言ってあげる。もはや筆談でいつものように強がる気力すらないのか、芳しい反応が無い。安心させるように握った手を、きゅっ、とほんの少しだけ強く握ってあげる。

中は真っ暗だったが足を踏み入れた途端にぱっと明りが点いた。センサータイプか。こんなのが必要なのかと思わないでもない。

日本家屋のような玄関は無く、扉を開けて足を踏み入れたらそのまま廊下になっていた。

廊下はあまり長くは無く、左右に二つずつ、計四つの扉があった。

そして左手側の扉と扉の間には階段があり上へと続いている。

見た感じ、同潤会アパート風だ。

同潤会アパートというのは日本が最初に取り入れた西洋思想による集合住宅で、構造的でモダンな建築風が多かったらしいとかんとか。いや、あたしも親父のデーターベース見たときにチラリと目にしただけだから、あんまり正確にはわからないんだけど。

木造建築なのに西洋風の細やかな装飾があちこちに見受けられる。漆の塗られた階段の手すりは年を経た濃い琥珀色をしていて、それがなんとも言えず綺麗に見える。触れてみると滑らかでありながらもしっかりとしたどこか安心感のある手触りで応えてくれた。

「――ようこそ、かわいい子羊たち」

いきなり発せられた少しハスキーがかった声にあたしは弾かれたように目線を上へと向ける。

階段の踊り場の部分。そこには一体いつから居たのか、あるいは突如沸いて出たのか制服をラフに着崩した女子生徒が居た。

制服を着ているからこそ生徒だとわかるが、これがもしスーツとかがだったならバリバリの若手キャリアウーマンに見えてしまったことだろう。それほどまでに大人びた人だった。

「生徒会はいつ何時でもここ『ヒメル』への一般生徒の立ち入りを歓迎するとも。とは言っても、時間が時間だ。大したもてなし等は出来ないのだが……。ともあれ、外は寒かっただろう？ 何せ春とは言えまだ四月だ。日中はともかく夜は冷える。温かい紅茶だけで構わないならご馳走しよう」

ながっ。

どこか芝居がかった仕草でそう言うと、こちらの返事などまるで意に介さないで彼女は階段を昇って二階へと消えた。

あたしはどこかしら不安そうなカナエちゃんと目を合わせると一つ頷いて、彼女の後を追うべく階段に足をかけた。

二階には扉が一つしか無かったので迷う心配はなかった。

とりあえず礼儀としてノックをしようとすると、

「ノックは要らない。そのまま入ってくるといい」

扉越しにさっきのハスキーボイスが聞こえた。透視能力のでも在るのだろうか。

言われた通りノックをせずにそのまま扉を開けると、さっきの彼女がカップとソーサーを用意していた。

「そこに座っていてくれ。すぐに用意は済む。ああ、そうだ。アップルティーでいいかな？　ご馳走すると言っておいてなんだが、私はなぜか今唐突にアップルティーが飲みたくなった」

言うだけ言うと、やはりこちらの返事を待つことも無くさつさと彼女は奥へ消えた。

なんだかな。そう思いつつもポケットと立っていてもしょうが無いし、奨められた通りあたしとカナエちゃんは部屋の真中に鎮座する、まるで会議で使うかのような大きなテーブルについた。

なんとなくすることもないので部屋を見渡す。

まず部屋が大きい。一般家庭のリビングが二つ三つは易々と収まってしまうそうだ。そんな広い部屋の真中に大きなオーク製のテーブル。入って左手側に、さきほど彼女がカップやらソーサーやらを取り出していた大きな目の棚。その奥には扉は無いが、隣の部屋に繋がっているらしい入り口。右手側にはノートやファイルの収められたスチール製の棚と、分厚い書籍類が所狭しと整頓されている木製の本棚。そしてやはり奥には隣の部屋に続いているらしい扉が一つ。中央奥にはドラマや映画なんかで見るような社長机よりも何倍も高級そうなデスクが一つ。

たぶんだけどこが生徒会室なのだろう。なんとなくお嬢様学校とかそう言う敷居高げな学校にある生徒会室のイメージがほぼぴったりと嵌る。

ほどなくして奥に消えた彼女がポッドを持って戻ってきた。

「さて、お待たせ。私は実を言うとお茶を煎れるのが上手くないんだ。いや、どちらかというと下手だ。なので味の方は多少は目を瞑ってくれとありがたい」

そんなことを言いながらもそれぞれのカップにお茶を煎れていく様は手馴れていて、どこか惚れ惚れとするような堂々さがあり優雅ですらあった。

あたしは短く札を言い、カナエちゃんは居心地悪そうにしながらも小さく会釈した。

身体が冷えていたのは事実なのでありがたく飲ませてもらう。林檎の甘さと仄かな酸味を感じさせる香りが湯気に乗り鼻腔をくすぐる。

「あ、」

一口飲むと、自然と小さく声が洩れた。

「ああ、やっぱり不味かったかな。すまない、あまりにも気になるようなら何か別のものと取り替えよう」

「へ？ あ、いえ、そうじゃないんです。美味しいですよ、ありがとうございます」

申し訳なさそうに言う彼女に、あたしは慌ててそう言った。

彼女を気遣ってとか、社交儀礼的にとかそういう訳でなく、本当に美味しかった。

紅茶本来の味を損なわず、それでいながら林檎の風味は薄すぎず濃すぎず自然に溶け込んでいる。喉を通る際にはどこかホッと安心できるような感覚すらあった。なにより、温度がごく丁度よかった。

本来紅茶の適温は98度とされているが、このアップルティーは幾分それよりも低い。若干冷えてしまった身体にはそのあまり熱すぎない温度はすんなりと入ってくれ、身体を内側からぽかぽかと温めてくれた。

横をちらりと窺うと、どこか落ち着きのなかったカナエちゃんも、今は幾分落ち着いているみたいだった。

「さて。そちらの彼女には必要ないかもしれないが、キミのために一応自己紹介しておこう。私は当学園の生徒会長を務めている天原濤音だ。呼び方はいちいちこだわらないので、好きに呼んでく

れて構わないよ。今のところ様付けで呼ぶ者が多いが、別にちゃんでもさんでも呼び捨てでもいい。ああ、しかし会長という呼び方はできれば控えて欲しい。この名前を意外と気に入っていてね、名前で呼んでくれると嬉しい。しかし無理強いするつもりはない。さっきも言ったが好きに呼んでくれ」

さっきも思ったけど、話ながつ。レンちゃんと二人一緒にさせたらエライことになりそうだ。方や長広舌で方やマシンガントーク。考えるだけでも恐ろしい。

「あ、あたしは」

「いや、必要ない」

初対面の人に失礼な事を考えながらも、向こうが自己紹介してくれたのだからこちらもと口を開いたら、いきなり遮られた。

てか、ええ？ 生徒会長さんは一般の生徒には興味なしですか。別に良いけどちょっと傷付くなあ。

「椎本苑クン、だろ？」

「え？」

「椎本苑。蟹座の七月十五日生まれ。出身中学は市立の〇×中学。成績は上の中と下を行ったり来たり。しかし実力テストにおいては学年五位をキープし、当学園への入学試験では全科目九十点以上で国語科と社会科は満点。特待生として入学を認められ、遠方にある実家から出て寄宿舎へ入居。家族構成は父と兄二人で片親。父親は作家であると同時に建築デザイナーで、兄はそれぞれ警察官と大学院生。身長は160センチで体重は50キロ。スリーサイズが上か」

「わーわーわーわーわーわーっ！」

「……………なんだね騒々しい」

「なんだねじゃない！　なんでそんなに詳しいんだ！　なんだアンタ、ストーカーか！？」

あんまりも淀みなくスラスラと、まるで九九でも唱えるみたいに自然に言うもんだから思わず呆然としてしまったが、あたしにとつてのデッドゾーンまで口にしようとしたところで慌てて大声で喚い

て止める。

それに対して彼女は眉をしかめてまるであたしが悪いことをしているみたいに言うもんだから、つつい目上であることも忘れて怒鳴る。

札を失した行為だし、この学園の「先輩には敬意を払え」とか何とか言う規則にも反してしまっているが知ったことか。冷静に振り返ると先輩に対しての態度というものが、あたしはここに入学してからまったく出来てない気がするが気にしちゃいけない。結構マズいことなんだろうけど、今後は気をつけるという活かされない率がやったらと高い言い訳で誤魔化しておく。

って言うか、よくよく考えるとまともな先輩に出会っていないことが何よりの原因な気がするのだが……。

居るよね？ まともな先輩。あたしの運がちよつと悪いだけだよね？

ほんの少し、あたしも何れまともじゃなくなってしまうのかと不安になった。

生徒会長とお茶会

生徒会長さんは優雅にカップを口に運んでいたが、あたしの無礼な発言にぴくりと反応し、眉を少ししかめながらカップをソーサーに置いた。

機嫌を損ねたか？　そう思うも、だからどうしたと一蹴する。どこでどう知ったか知らないけど、教えてもない人のパーソナルデータを知っているなんて立派なプライバシーの侵害だ。怒ってあたりまえだろう。

それ以上に、わざわざ人が言わないようにしておいたことを誰かが――この場合はカナエちゃんが居る前で言われたというのがとてもなく気に入らない。

カナエちゃんを横目で伺うとあたしのことをビクリしたような目で見ていた。うあ、ちょっとカナエちゃんや。そんなキラキラした瞳で見ないで……。全部まぐれなんだから。

そう、まぐれなんだ。確かにあたしは勉強をがんばった。優秀な兄貴たちに――お兄ちゃんたちに褒めてもらいたかったから。お兄ちゃんたちに失望されなくなかったから。塾に行くなんて贅沢なこととはしていない。ただ先生の話をちゃんと聞いて大切なところはメモをして。ノートをちゃんとして、予習復習を欠かさずやっていただけだ。そうして、『勉強をがんばる妹』をがんばって演じていたら、お兄ちゃんたちが勉強を教えてくれた。えらいね、って褒めてくれた。本当は勉強なんて大嫌いだ。つまらないし眠たくなる。頭だってよくない。もがいてもがいて何とかって感じた。だから、全部まぐれなんだ。

特待生。これだって、こんなお嬢様学校の特待生になったことを褒めてもらいたくて、そして馬鹿みたいに高いここの学費を少しでも軽減するためになったに過ぎない。

特待生だからどうこうってことはないんだ。

全ては邪な思いの結果。だから、カナエちゃんみたいに純粹にそんな目で見られると辛い。

「もう少し甘いほうがいいな」

あたしが自己嫌悪に陥っていると、生徒会長はやおらそうひとりごち、ポケットをごそごそと探りスティックシュガーを五本取り出した。って、いつも持ち歩いているのか？

てかただでさえ甘口なアップルティーにスティックシュガー五本でどんだけ甘党なのよ。

どうやらあたしの無礼な発言とかはどうでもいいらしい。生徒会長はせっせとカップに砂糖を注ぎ込んでいる。うっわ、甘そう。

生徒会長は糖分過多にもほどがありそうな激甘ティーを再び口に運ぶと、今度は満足そうに頷いた。なんとなく、どこか幸せそうに見えるのは気のせいだろうか。

「生徒会長たる者、全生徒の基本データは把握して然るべきだ」

カップをソーサーに戻し、会長はそう言った。カップの中身は空だ。一気に飲んだらしい。糖尿病とか心配にならないのだろうか。

「無論、そこに居る天羽叶クンのデータも知っている。とはいっても本当に基本的なことだけだ。生年月日に家族構成、中学時代の成績、身長に体重スリーサイズ、血液型。あとはプラスアルファで、例えば試験結果など。これらを知っていることにはちゃんと意味があるし、みだりに他言もしない。確かに自分のことを誰かに勝手に知られているというのは気分のいいものではないが、そうだと知らなければ問題は無い」

知らなければって、今あたしの目の前で知っているぞと言うことを披露したじゃない。本当、すごく気分悪いんだけど。

しかし全校生徒のデータって、ここは中等部と高等部がいつしよになってるのに。ううむ、なんだか怒りも忘れて素直に感心してしまう。いや呆れ返る。どこの漫画の生徒会長だ。今時そんな偶像めいた生徒会長なんていない。あ、目の前に居たか。

にしてもなんだろうな、この人が生徒会長だということがいまだ

に理解できない自分が居る。

別に信じていないわけではないんだけど。確かにそれっぽいし。けど、生徒の代表たる生徒会長のクセに制服は着崩しているし、口調はやけに男っぽい。しかもハスキーがかつてるから違和感が無いし。どこか青味がかつた黒い髪をオールバックにしているのもなんかカッコイイ。眼鏡をかけているから無駄に理知的に見えるけど、これがサングラスだったら……ヒットマン？ いやいや。

レンちゃんが言っていた通りにたしかに美人だとは思う。氷のような、みたいなことを言っていたけど、確かに見た感じではすごく冷たそうだ。黙ってれば。

「ところで、君たちはなんだってこんな時間にここへ来たんだ？」

そう言えば、みたいな感じで唐突にそう聞かれた。

この人の雰囲気というか勢いに流されてそのことを忘れていたあたしもあたしだけど、それを今ごろ訊くこの人もどうなんだろう。

そんなことを思っていると、訊いた本人はまるで答えなんかどうでもいいみたいにお茶のおかわりをいれていた。

それを見ていたからか、会長はあたしたちにもおかわりを勧めてきたが首を横にふって答える。

けど、会長はこちらを見たまま動かない。なんだ？　と思い横を見るとカナエちゃんが青い顔をして俯いていた。

「ちょ、どうしたのカナエちゃん!？」

ただならぬ様子のカナエちゃんに慌てて声をかけるも反応は無い。どうしたんだろう。最初に思いついたのは恐怖症のどれかだけど、ここには該当するようなものは何も無い。何があってもいいようにとこの一週間でカナエちゃんの恐怖症の種類は一通り覚えたが、男は当然居ないし、独りぼっちでもないし、二階ではあるが恐怖症がでるほどの高さでもない。室内だから暗くもない。むしろ明るすぎない感すらある。閉所のそれにも当てはまらない。刃物のようなものもない。当然ながら誰も血なんか流してはいなし、それに関連するものも無い。大体、さっきまでは普通だった。落ち着かなそうではあ

ったけど、それは生徒会室なんて馴染みの無いところに居るからだろうし、モミジちゃんのことを気になっていたからだろう。

じゃあ、なんだろうか？

「カナエくん、私はなにも知らない。何かがあったらしいことは知っているが、それだけだ。だから――」

言いながら会長はカナエちゃんにゆっくりと歩み寄り、顎に手をかけて俯いていた顔を上げさせた。

いきなり何をするのかと思わず立ち上がりかけたが、会長の冷たすぎる一瞥に情けなくも動けなくなってしまった。

会長はすぐにあたしから視線を外すと、唐突にカナエちゃんに指を突きつけた。カナエちゃんは突然のことにビクリと震えたが、会長は気にせずゆっくりと指を自分の顔の位置にまで動かした。

「――落ち着け」

そして、ただ一言、本当にそれだけを呟くように言うと、そのまま自然な動作でまったく手がつけられないカナエちゃんの紅茶を飲み干し、新たに淹れ直した。そのまままるで何事も無かったかのように座っていた場所に帰ると、空になったままの自分のカップにも紅茶を再びそそぎ、やはりポケットからスティックシュガーを五本取り出して凶悪な甘さに変えていた。

カナエちゃんの顔色は元に戻り、なにがなんだかわからない様子で固まっていた。

ええと……、つまり、なんだ？

あたしは中途半端に腰を浮かした変な態勢のまま、わけがわからないのでとりあえず首を傾げてみた。

会長認める

優雅にアップルティーから糖尿病の乗車券へとクラスチェンジした液体を飲んでいた会長さんが「？　なにをしているんだ？」などとおっしゃられ、そう言われるまで微妙な空気椅子を自主的に行っていたあたしはつい反射的に「足腰を鍛えているんです」と、体育会系なノリで答えてしまった。

そこでツツコミの一つでもしてくれればよかったのだが会長さんはあろう事か、「そうか、頑張れ」と激励なんぞしてくれた。

まあ、そんなこんなで（？）、あたしは座るタイミングを失ったまま空気椅子に精を出していた。

その横ではソワソワしながらもついさっき起きたことに今だ困惑しているらしく、頭上に？マークを乱舞させているカナエちゃん。アップルティーを飲もうとしては先ほど会長さんが口をつけたことを思い出し、真っ赤になりながらワタワタと困っている。

あたしたちの正面では会長さんが何をするでもなく優雅にドロツとしていそうなアップルティを口に運んでいる。ちなみに六杯目だ。砂糖三十本分……うげ。どんだけ甘党なのでせうか生徒会長。

えっと……、なんだこの状況。

まあ、まて。まて待てマテ。あたしたちはここにモミジちゃんが居ると聞いてやってきたのであって、お茶をご馳走になりに来たわけでも、空気椅子なんていう罰ゲームでしかないものを自主的にやるためでもない。

「あのですね」

「ん？　なんだ、やっと答えてくれる気になったのか」

待ちくたびれたぞ、と会長さんは大して気にした風もなく言う。そういうえば、さっき何しに来たのかと訊かれたっけ。

「……ここにモミジちゃん、枯葉紅葉ちゃんが居るって聞いたんですけど」

「ああ、居るよ」

目を細め、空になったティーカップを指にかけてユラユラと揺らす。

居ると聞いてカナエちゃんが立ち上がり室内をキョロキョロと見渡すが、当然というか室内にはあたしたち以外は居ない。

「彼女には先ほどまで無理言っって生徒会の仕事を手伝ってもらってたんだけだ。実を言うと生徒会は現在笑っちゃうほど人が足りていないね。それなのに片付けなければならない仕事は大小問わずわんさと積もっていく。さすがの私も高層ビル街と化していく書類やらなんやらを前にして、マズイなあ、と思っってね。暇そうでも有能そうな娘を探していたんだ。けれど、知っっての通り我が校は部活動への参加は強制ではないが、参加したほうが何かと得で、無所属の娘などそう落ちていない。さて困ったぞと思っったところにちょうど二年生主席の紅葉クンを発見してね。有無を言わさず北朝鮮工作員のようないざ手際よさで拉致したんだよ。さすがにクロロホルムはなかったから職権とか乱用したりしてね。その甲斐あつてか、おかげでなんと溜まっていた仕事を六割もやつつけることができた」

ニコニコしながら喜々としてそう語る会長は、外で駆けずり回って遊ぶ少年のようで、その容姿から得る印象とは大分ちがうのになぜか違和感がなかった。

カナエちゃんはモミジちゃんが生徒会長に認められたのがうれしいのか、少しだけ照れたように微笑んでいた。親友だもんね。そりゃほめられたり認められたりしたら、まるで我がことのように嬉しいだろう。

けどね？　なんか会長のお話の中にはなんか聞き捨てちゃいけないような不穏当なモノが含まれてた気がするのだけれど……、カナエちゃんそこはスルーなの？　それとも気づいてないの？

「――実はキミのことも探していたんだよ、苑クン」

めったに見れないお宝映像ならぬお宝カナエちゃんを見て和んでいると、唐突に会長がそんなことを言い出した。

「特待生だということでもキミのことは目をつけていたんだ。やはり、私が楽をするためにも有能な娘はほしいからな。だというのにいざ探してみるとキミの姿は見つからず、その代わりにきな臭い噂を聞いてしまったりして……」

ハア、とどこことなく芝居くさい仕草でため息をついて、会長はあたしのほうを流し見た。

あたしとしては生徒会に興味はないし生徒会長様に買いかぶられてもいい迷惑なだけなので、無視して話を戻すことにした。

「それで、モミジちゃんは？」

「彼女なら疲れたのかいつの間にやら眠ってしまったのでな、ほら隣に部屋があるだろう？　そこでやすやと眠っているさ」

そう聞いた途端、カナエちゃんは瞬間移動でもしたかのような素早さで隣室への扉へ向かった。そして、そのままの勢いでノブを回すのもどかしく、すさまじい勢いで部屋に飛び込んでいった。うーむ。やっとこさ捜していた親友を見つけた喜びからか、ここが生徒会室であることを完全に忘れているらしい。いつものビクビクオドオドなカナエちゃんのちよつとどころでなく大胆不敵な一面に軽く感動。

会長が立ち上がり、カナエちゃんの飛び込んだ部屋へと向かうのを見てあたしもそれに続く。

嗚呼、どーでもいいけど空気いすのせいで太ももとふくらはぎが地味に痺れてる。むう、無意味な強がりなどしなけりゃ良かった。誰かがツツコミいれてくれれば止めようと思ったけど、面子がなあ……。

喋れない上に普段ただでさえぼんやりしてる感のあるカナエちゃんは、今日はモミジちゃん分が不足してるせいで前後不覚気味だったし、生徒会長は生徒会長でサラリとスルーしてくれちゃうし。

はあ。やっぱりこう、適度なツツコミキャラがほしいなあ。モミジちゃんだったら苦笑しつつもやんわりとツツコミを入れてくれただろうに……。

あたしは今更ながらにモミジちゃんという人材がいかに重要であるのかを思い知った。

会長認める（後書き）

やや、どうも一週間ぶり。

いきなりですが、皆様にこの『シフト』はジャンル分けすると何になるのか聞いてみたいと思います。

一応コメディにしますが、うーん。

よろしければ、読んでくださった方々はどう感じているのか聞きたいと思います。

簡単にでいいですので「ジャンルはコレじゃね？」ってのをコメントなりなんなりで聞かせてもらえませんか。どうぞお願いします。

今回ちと少ないですがそこはご了承ください。では。

（感想とかもらえると作者が狂喜乱舞します）

バシバシ

会議室っぽい部屋の右手奥、扉のあるほうの部屋はやはりと言うか、先ほどの部屋ほどではないが充分に大きかった。ああ、やっぱりな。と思うものの驚くには値しない。

それよりも、だ。

この館そのものが『生徒会室』なのだとカナエちゃんは言っていた（『室』じゃないじゃんとか言うもつともなツツコミは置いといて）。つまりここは生徒会という限られた者達だけが使うという違いがあるだけで、特別教室や体育館と同じ『学校生活のための』場所であるはずだ。

……なぜ、ベッドが？

いや、まあ、校舎から離れているし保健室の変わりのような部屋なのかもしれない。うん。そう考えれば——無理やり感はあるものの——納得できそう。

——天蓋付きじゃなければ。

ベッドのシーツや掛け布団にはふんだんにフリルやらレースやらがヒラヒラとあしらわれている。淡い桃色にレースの白がまぶしい。天蓋は濃薄のはっきりした紅色と朱色のツートンで、ところどころに紅い蝶が刺繍されている。言うまでも無いことだけど、えらい高そうだ。

わあ、高価な保健室。保険医はパツ金巻き毛のマダムかしら。それともふわふわドレスのかわいらしいお姫様かしら。……それはそれでいいかもしれない。

とにかく保健室の代りという説は完璧に無いな。

なんと言うか、部屋だった。なにを当たり前なと思うだろう。だが、部屋なのだ。

ちよい大きいゆったりとした勉強机。社長室とかにありそうな皮製っぽいリクライニングチェア。ハードカバーや文庫本が見るから

に適当に入れられた本棚。CDコンポ。パソコンにテレビ。茶色いソファ。あ、DVDデッキもある。タンスや四人かけくらのテーブルに椅子。

部屋だった。生徒会とか学校がどうかまったく関係ない個人の部屋だった。しかもなんかすごい充実してる。

「フフ、あまりジロジロと見ないでくれ。恥ずかしいだろ」
言葉通り恥ずかしそうに言う生徒会長。

「って、ここアンタの部屋か!？」

「そうだとも。どうだ、なかなか立派なモノだろう? いやあ、ここまで充実させるのに苦労した。欲を言うとか各種最新ゲーム機なんかもほしいのだけど、いかんせん。そんなモノがあると熱中しすぎて生徒会業務に支障をきたしそうだったんでな。泣く泣く諦めたさ」

しゃあしゃあとそんなことをのたまう会長。もうどこからツッコめばいいのか。ツッコミどころが多すぎて逆に困る。って言うか

「あたしにツッコミをさせようとするなーっ!」

思考から言葉が飛び出しぎゃーと叫んでしまう。

「何を言っているんだ?」

気を取り直して。

「ここは生徒会室なんですよね?」

「いや、確かにここは生徒会室として機能しているが、この部屋は私の部屋だ」

さらりと。

「ほら、ここって寄宿舎から離れているだろ? わざわざ帰るのがめんどくさくなってな。ちょっとこの館——ああ、『ヒメル』と言うんだが——の部屋を整理して無理やり一部屋確保してみた。いやあ、まさかできるとは思わなかったが、なかなかどうしてやっているものだ」

うんうんと頷きながら誇らしげに胸を張る。

「校舎からも寄宿舎に比べて断然早い。予鈴が鳴ってから教室に向

かつても余裕綽々で間に合うから惰眠を精一杯貪れるし、もし教材を忘れても歩いて取りにこれる。いや、むしろ教材を鞆に詰める必要すらないかもしれない。……む。そうか。そうだな。そうすれば余計な手間が……。いや、さて。授業が終わるたびに取りに戻ってくるほうが面倒か……」

途中からぶつぶつとくだらない事であーだーこーだ悩みだした生徒会長は、もう無視することにした。

色々ツツコミたいことがあるけど、なんかどーでもいいや。多分時間の無駄だし。それ以上に取り返しのない疲労を蓄積するだけだろう。君子危うきに近寄らずとも言うし。ここは故人の残した名言に従うとしよう。

モミジちゃんは天蓋付きヒラふわゴージャスベッドで眠っていた。その横ではカナエちゃんがモミジちゃんを起こそうとユサユサと揺さぶっている。しかしね、カナエちゃん。アナタのそれは人を更なる心地よい眠りに誘うだけで、起こすことは出来ないんだよ。あたしは苦笑しながら、カナエちゃんを手伝う為ベッドに近づいた。

モミジちゃんはすーすーと安らかな寝息を立てながら気持ち良さそうに眠っていた。

思わず顔がほころぶほどモミジちゃんの寝顔は愛らしかった。いつもはどこか達観したような雰囲気や感じを与えるが、こうして気持ちよさそうに眠る姿は歳相応の少女らしいかわいらしさで起こすのがもったいないような気がしてくる。

「あ……ん……」

むにゃむにゃとかわいらしく寝言を漏らしながら、ころんと寝返りをうって再び寝息を立てる。少し丸まったような態勢で眠っているのがホントにもうどうしようもなくかわいい。

小動物っぽいカナエちゃんと、大人ぶった感のある、けれど、だからこそのかわいらしさを持つモミジちゃん。こんな子たちが妹にいたらよかったのに……。

「つと、なに？」

服のすそをクイクイと引っ張るカナエちゃんを見ると、

『ボケつとすんな！ 起こすの手伝え！』

そんないつもの俺様命令口調がホワイトボードに書かれていた。

しかも、書いた本人は不機嫌そうだった。

多分、カナエちゃん的にはせっかく見つけたモミジちゃんが眠っているこの状況は、ご飯を前にしてマテをされた犬のようなモノなのだろうな。早く食べたいのだけれどヨシと言われないから食べられない。

苦笑しながらハイハイと返し、さてどうやって起こそうかと考える。

にしても、本当にこの二人みたいな、いや、妹や弟という存在がいたならどれだけよかっただろうか。けど、仮にいたとして『あたし』が『あたし』じゃなかったとしても、この位置にその妹か弟が来るだけかもしれない。だとしたら、これは、ひどく自分勝手な思いじゃないだろうか。

「カナエちゃん、起きろー」

ペチペチと頬を叩いてみる。あ、ヤバイ。このぷにぷに感。なんか色々イタズラをして遊びたいという抗いがたい欲求がふつふつと……。

邪な欲求に駆られていると、突然横から、バシバシッ、という布団を叩く音が聞こえた。

その音につられて横を見ると、カナエちゃんがホワイトボードで高そうな布団に物怖じすることなくホワイトボードで布団越しにモミジちゃんを叩いていた。しかも“角”で。

ま、まあ、カナエちゃんだし、そこまでの力はないのだから“角”で叩いても布団にもモミジちゃんにも大したダメージは無いだろうけど、すごいなカナエちゃん。とてもじゃないけど、あたしはこんな高級感漂う布団をそんな遠慮なくバシバシ叩く勇氣は無いよ。

「————ナ」

ん？ 今モミジちゃんがなにか呟いたような……？

バシバシッ

上手く聞き取れなかったな。

「――」

あ、まだなんか言ってる。寝言だし、声も小さいからよく聞こえないけど気になるな。

なんかさ、他人の寝言ってどんな夢見てるのかな〜って感じで気になるよね。

バシバシッ

顔を近づけたら聞こえるかな？ いや、けどなあ。それでいきなり起きられたらすっごい気まずいぞ。

バシバシッ

バシバシバシバシバシバシバシバシバシ

「つて、カナエちゃんストップ」

遠慮どころか徐々に容赦すらなくなっていくカナエちゃんの打撃を止める。

ちなみに、カナエちゃんがさっきから叩いている場所は位置的にわき腹辺りだ。しかもそこを大きく振りかぶり力のこもった連撃だ。ホントに容赦ないなカナエちゃん。いくら布団越しとはいえちよつと痛そうだ。

「――んう？」

そんなかわいらしい呟きと共にうつすらとモミジちゃんのまぶたが開いた。

「あ、ほらほらカナエちゃん、モミジちゃん起きたよ」

何で止めんだよ、みたいな不機嫌まっ最中な表情をするカナエちゃんは気づいてないみたいだったので、そう教えてあげる。じやないと再びバシバシやりそうだったし。

「あれ……？ カナ？ どーしたの？ いっしょに寝る？」

ぼんやりとしたまま、そんなことを言うモミジちゃん。どーやら寝ぼけているようだ。

にしても。位置的にすぐ側に居るよりもあたしよりも真っ先にカナエちゃんを意識に入れるとは、さすがモミジちゃん。頭の中はカナエちゃん一杯のようだ。多分、さっきのもカナエちゃんの名前を呟いていたんだろう。カナエちゃんが出演する夢を楽しく見ていたに違いない。

ぼんやりとしながらいつしよに寝るかと思われたカナエちゃんは、顔を赤くしながらモミジちゃんの顔をべしっ、とホワイトボードで一発叩いた。当然、“角”でなく“面”で。

ホント、容赦ない。

うあー

しかし、この少女趣味っていうかお嬢様趣味なベッドで、グラサンかけたら即ヒットマンな会長が寝ているって言うのは、合わないって言うかなんて言うか……ダメでしょ。似合わない云々以前に物理的にも心理的にもダメのダメダメだ。心臓の弱い人なら軽く心不全の一つや二つや三つくらいは起こしちゃうぞ。

その会長は口元に手をやりブツブツと真剣に何やら考え込んでいた。見た感じだけなら難解な謎に挑む探偵もかくやというほどにさまになっていいる姿なのだが、いかんせん聞こえてくる呟きが「こうなったらいつそ校舎内に自分の部屋を作ることにも検討すべきか……」などと言うモノでは台無しだった。こんなのが生徒会長で大丈夫なのかココ……と、少しばかり不安になってくる。

モミジちゃんの顔を殴打したカナエちゃんは、なかなか起きずにいまだ横になったままのモミジちゃんに首を傾げていた。

そして、そのモミジちゃんは目はうつすらと開いているのだが動きがない。ぼーっとしている。

——と、不意にその顔がくしゃっと崩れた。

「……カナに、カナにぶたれた……」

ぼそり、とそんな呟きが聞こえた。

と、思ったらモミジちゃんの瞳からポロポロとビーズのように小さくキレイな涙がこぼれだした。

突然の事態にフリーズする。

ブツブツといまだにつぶやく会長の声が遠い。

「カナに……カナに嫌われちゃったあ……」

絶句。

「……っ、カナは、もうわたしなんて、いらないんだあ」

啞然。

「や、だよお……、そん、なの……やあ」
愕然。

「ふえええええ——」

呆然。

え、えつと……え？

どちら様でございますよ？

とりあえず、あたしは自分の目が腐ったか完全にバグってエラーを起こしているんじゃないかと、自分の異常を考えた。実際そうならどうしようもないわけだが、こういう場合のセオリー道り、一応目をこすってみる。

[illegible]

「——えっく、……ひっく」

[illegible]

ぬあ、ヤバイ。こ、こすりすぎたっ。い、痛い、目がすごい痛い。

マッサージ程度のつもりが、あんまりな現実能耐え切れずかなりの力と速さでラッシュしてしまった。あー、まっげ数本抜けちゃったし……。うー、スースーするシャンプーが目に入ったときと同じくらい痛いわ。やたら痛くてちよつと後に続くタイプ。

ソノちゃんしつぱいっ。

てへっ、とかやってみる。

止めとけばいいのに、目をこすりすぎて自爆するという恥を更なる恥で上塗りしてしてしまうあたし。言うまでも無いことだけど、やってからと言うよりも、やりながら後悔した。なんだよ、てへっ、て。語尾に星とか音符もつけるかコラ。どこの古いアイドルだあたし。いてまえこのスカタン。

等々。

はっ! ? もしや目の前に居るこの娘はモミジちゃんじゃない!
なるほど、それならこの行動にも納得がいく。ふふーん。冴え?

てるじゃないかあたし。

少し茶色っぽいボブショートで、耳の上の一房だけを伸ばしているのがちょっと特徴的。肌はカナエちゃんとかみたく白いわけじゃないけど、健康的でキレイな象牙色をしている。

ほーら、見てみろい。どう見たって――……モミジちゃんじゃなかっ！

外見的特長はあたしの考えを馬鹿にするかのようにピタリと一致した。

当たり前と言えば当たり前。

「つく……、かなあ、きらいになっちゃあ……。きらいにならないでえ……」

なおも泣き続けるモミジちゃん。

あー、ダメ。これダメ。やっぱい、なにこの威力。

――悶死しそう。

それほど今のモミジちゃんは強烈なまでに犯罪的な可愛さだった。いつもはどこか達観したようなところがあり、中学二年生とは思えないような精神的な大人っぽさがあった。それが悪いとは言わない。外見から受ける元氣そうな少女と言う印象と、その中身のギャップがモミジちゃんの魅力でもあった。

けど、モミジちゃんがそういう子だと知っていて、それでこの歳相応どころかいっそ幼児かしたような幼さをもし出す今のモミジちゃんを見てしまうと、なんて言うか、ヤバい。頭を鈍器でガツンと殴られたところに心臓を矢で射抜かれたような感じになる。

ギャップ萌え、と言うのだろうか。今風に言えば。

なんだっていいや。

普段のモミジちゃんもイイけど、今のモミジちゃんもすっごくイイ。カナエちゃんと同等かそれ以上の守ってあげたいオーラが出る。保護欲とか母性本能とかくすぐらまくっちゃって、思わず抱きしめたくなる。

今は精一杯の自制心でどうにかこうにかブレーキをかけていられ

るけど、あと何か一撃でもくると、アクセルはベタ踏みになってしまっただろう。

例えば、今は涙がこぼれるに任せて両手で顔を覆っているけど、その下にある涙で潤んだ瞳で見上げられたりしたら、一発で陥落しちゃう。耐えることなんて無理だ。

とか、自らのクールダウンのために冷静を装って分析とかしていると、がばり、とカナエちゃんがモミジちゃんに抱きついた。

どうやら、たまらなくなっただらしい。

頬を朱に染めて至福の表情でモミジちゃんぎゅーっ、と抱きしめて頬擦りとかしてる。

モミジちゃんも最初は突然抱きつかれて、「えう？」とか泣きながら困惑していたけど、嫌われたと思い込んでいた最愛のカナエちゃんに抱きしめられていると気づくと、「かなあ……かなあ……」とぎゅーっ、と抱き返している。

仲良きことは美しきかな。

突然の大変にらぶりーな仲良し空間に、あたしは嫌悪感を抱くことなく和み、しばらくはこのまま静観することに決めた。

パシヤッ、パシヤッという音がひどく邪魔だった。

——ん？

うあー（後書き）

百合ってむずいね！（何を今更

どうも！ 鳩梨です。今回はーもとい“も” 文字数は少なめですがコレはコレですっきりしてるし、作者は一話につき文庫本タイプで大体五ページ前後を目標にしています。と、もっともらしい言い訳を言っておきます。（ホントにもう何をいまさら）
明日も更新する予定ですのでよろしく！

今回は特に言うことが無いにゃー

ぱにつく

「あの、会長……。なにしてんスか？」

パシヤパシヤッ！ シュバツと移動して再びパシヤパシヤッ。ジヤンプして床を転がり低い位置からパシヤパシヤッ。シュタツと立ち上がりパシヤッ、机に登って高い位置からパシヤパシヤパシヤッ。そんな風に部屋の中を忙しく縦横無尽に飛び跳ね転げまわっている会長。さすがに無視できないので声をかけてみるが、熱中しすぎて気がついていない。ああ、すっげえ活き活きしてる。なんて眩しい笑顔なんだ。

オールバックにキレイにまとめた髪が振り乱れ、ゴルゴンのような髪型になってしまっている。いちいちオーバーアクションなのでスカートは先ほどからバツバツサと捲れまくっていた。まあ、それでもなんでか下着はギリギリで見えていないけど。

どーしたもんかな、と頭をかきながら考える。
ま、どーしたもこーしたも無いんだけど。

とりあえず、夏場の蚊よりもはるかに鬱陶しい全校生徒代表職のメガネを止めよう。

「ちよつと会長」

シュバツ、パシヤパシヤッ。

「会長ってば」

クルッ、スタツ、パシヤシャ。

「おいこらメガネ」

ズサー、パシヤッパシヤッ。

どうやら、自然に止まるまで待つしかないようだった。

仕方ないので、あたしは“蚊”を気にしないよう努力しつつ、モミジちゃんに話し掛けることにした。

訊きたいこともあるし。

「おはよ、モミジちゃん。お楽しみのところ悪いけど、なんで下着

姿なの？」

そうなのだ。なぜだか布団の下のモミジちゃんは下着以外、身に付けていなかったのだ。

モミジちゃんは自分の肌を人に晒すことを必要以上に恥ずかしがる——いや、嫌がる性格らしく、お風呂に入るときも防御が堅い。着替えなんか隅っこのほうでサッと済ませちゃうような子だ。そのモミジちゃんが、今、なぜか下着しか身に付けていない。

ちなみに、色は淡い緑色でちょっと子供っぽい下着だ。変に背伸びするよりもよほど好感がもてるなあ、とか思ってみる。

「……へ？ ……………ふえ？」

最初のがあたしを見て発した言葉で、次が自分の姿を見て発した言葉だ。どうやら、自分でも気づいてなかったらしい。まあ、でなけりゃカナエちゃんとハグらんわな。——多分。

「え？ や、ちよ、な、なんでソノ先輩が？！ や、え、ふええ？！ なんで私、下着なんです！？」

言いながらモノすごい勢いで布団に潜り直すモミジちゃん。すごいね、一瞬で顔と言わず耳と言わず、頭まで真っ赤になってたよ。よほど恥ずかしいらしい。布団に潜る際、カナエちゃんを突き飛ばしていたが、アレは恐らく気づいていないだろう。どれだけ余裕がなくなってるかが良くわかる。

「ああ、モミジくんの制服なら、ほら、しわになるといけないからこうしてハンガーに吊るしてある。安心するといい」

ふう、と動き回って流れた汗を、爽やかな笑顔でぬぐいながら言う会長。

言われた方を見ると、確かに壁についているフックにハンガーが吊るされており、それにモミジちゃんのらしい中等部の制服がかかっていた。

まあね。確かに制服のままで横になったりしたら制服はしわになってしまっていただろう。制服のしわは伸ばすのが面倒だし、そういった所を考えての優しさから来た行動なら、あたしはこの色々不

安な会長を少しは見直したかもしれない。

けれど、言った直後に今しがた入手したブツを見てニヤケられていたら、なんかも言葉に言い表せられないくらいの呆れと言うか、落胆と言うか……、ハア。

ため息をつくあたしに気づき、何をどう勘違いしたのか、会長は言わんでもいいことをわざわざ言い出した。

「言うまでも無いことだが、脱がしたのは私だ。いや、なに感謝の言葉など要らんよ」

ホントに、今現在のモミジちゃんの状態を見て感謝の言葉もらえるなどと、どういった思考回路をしていたら思えるのか不思議でしょうがない。言いたくは無いが、脳が湧いてるんじゃないかと思う。

「あの……」

生徒会長のあっぱらばー加減に呆れていると、蚊の泣くような小さな声でモミジちゃんがあたしに話しかけてかてきた。

モミジちゃんは布団から顔だけを出している。なんとなく、臆病な亀みたいでカワイイ。

「その……、えっと、違うん、ですからね」

？ 何がだろうか。

「べ、別にその、アレは本心じゃないって言うか……あ、いや、カナに嫌われるのがイヤなのは、本心ですけどーって、そうじゃなくて……。その、なんと言いますか……、」

ごによごによ、と徐々に小さくなりついに聞こえなくなってしまった。

顔は火がつきそうなほど真っ赤で、いつもはちゃんと前を向いているのにこの時ばかりは終始下を向いたままだった。

うーん。ダメだなあ、あたしってこういう反応に弱いよねえ……。なんつーの？ こうムズムズ来ると言うか、ムラムラ来ると言うか、ひっじょーにいじめて困らせなくなっちゃう。

嗚呼、けどダメよ苑！ それをして過去どうなったか思い出しな

さいっ。

自分で自分を叱りつける。

そうなのだ。あたしのこの悪い癖のせいで、過去にあたしは幾つか散々な思いをした。スペシャルベリーホームランパフェなどと言う冗談なんだか悪意の塊なんだかわからないものを、奢らされるのではなく自腹で買わされ、一人で全部食べさせられるということもあった。しばらくは体重計に乗るのが本当に怖かった。その後二ヶ月と少しはお寺の精進料理みたいな味気ないモノしか口に出来なかった。発狂してもおかしくなかったぞ、あれは。

ぶるり、と背筋が凍えた。あの時の記憶は軽いトラウマとして今もあたしの中に根付いているらしい。いったい何度悪夢にうなされ眠れぬ夜を過ごしたのか。

それだけじゃない。もっとすごいのもあった。アレは……考えるだけで……、

「……お尻を……胡麻が……洗濯板で……糸クズと……
……か、かかしがっ——」

ガチガチと歯の根が合わない。口から漏れ出した声が自分の耳に入ってしまった、そのせいでより鮮明に当時の、あの、忌まわしく恐ろしく、なによりおぞましい記憶がありありと甦ってしまった。

あーやめやめ。忘れろっ、そんなモノは無かった。あたしの歴史にそんなモノは無かった。自己暗示だ。思い込み信じ込め。苑ちゃんはある子っ。アレは黒歴史。あんな所業があるわけがないっ。

臭いものには蓋をして漬物石を載せてしまおう。怖いものからは目を逸らしてアイマスクを十重二十重に重ねがけ。耳に入る音にはノイズキャンセラー搭載ヘッドフォンという素敵ハイテク機器をご利用に！ 持っていないけど。

ふう、なにはともあれ。過去を顧みるというあたしにしては珍しい行いにより、どうにかお茶目なイタズラ心は押さえ込めた。

そうになると、今度は内に向けてしまっていた意識が外へと自然と向いた。

——パシャッ、パシャッ！

またか。

正直、そう思わざるを得なかった。

音はすぐ横から聞こえた。今度はあちこちへ移動せず、ひたすら一定箇所から音がする。

「なにしてんスカ？」

また無視されるかと思ったが、今度はちゃんと聞こえたらしく反応があった。

「見てわかるだろう？　これが水遊びや慰み事をしているように見えるのかキミは」

息継ぎもせずに口早に言うだけ言うと、再び作業に没頭しだした。よく見ると、手が忙しく動いている。

会長は幾つものデジタルカメラを手に、ひたすらシャッターを押していた。確かめるまでも無く、ファインダーに映る被写体はモミジちゃんだ。

幾つものカメラを駆るその姿は、見ていて引きそうになるほど鬼気迫るものがあった。

暫くすると、満足したのか、ふう、という何かをやり遂げた人のような一息をつき、顔を上げた。

「私はね、写真を撮るのが好きなんだ」

ぽつり、と会長はどこか儂げな感じで呟いた。

伶俐な美しさの横顔が、今は吹けば散ってしまう花のようだった。メガネ越しに前を見ている瞳はしっかりと現実を見据えているように、けれど、どこか遠くを——ここではないどこかを見ているように感じられた。

その言葉を聞き、あたしは

（え？　なに？　もしかして聞かなきゃダメ？　うーあ、長くなるぞう、絶対）

とか、思い、うんざりしてしまった。

ぱにっく(後書き)

すいませんごめんなさい(土下座っ

前回更新分で翌日更新を予告していたながら、出来ませんでしたorz。

理由は、単に時間が無かったからです。ホントにもう申し訳なく思っております、はい。

ちゃんとできることを言えって感じですよ。お叱りはごもつともです。

反省しております。

さて、話を本編に。

えー、長いですね。夜はまだまだコレからだぜ、とか。夜は長い…、等々言われますが。長すぎですかね？

まあ、ココでの出来事は後に大きく関わったりするかもしれないらしいので、もう暫くの辛抱を。

では、投げっぱなしですが。

会長、不可解

「特に少女たちの仲睦まじい姿や、恥ずかしそうにしている姿……一瞬一瞬のなんとも言えない輝きを撮るのが、たまらなく好きなんだ」

騙されちゃいけない。

台詞の後半部分だけを取れば、解釈の仕方しだいでは良いことを言っている風に聞こえなくもない。

だが、頬を高潮させながら息遣い荒くそんなこと言っていたのはなんもかんもがぶち壊しだ。どう見ても変態盗撮犯が、自らの行為を本人以外には理解できない理屈で正当化してるようにしか捉えられない。

もはやバカらしく思うことすらバカらしい。

次にどんな言葉が出て来ても驚かないぞ、と、あっそう、みたいにくるでも良く構えることにした。

しかし、

「ちょっと会長！　いったいどういうことなんですか！？　なんでわたしは寝てるんですか！？　なんで下着だったんですか！？　なんでカナやソノ先輩がここにいますかっ！？」

いつの間に着替えたのか、制服を着たモミジちゃんがいつもの冷静さはどこへやら、顔を真っ赤にしてプンプン怒りながら会長に詰め寄る。

後ろの方ではカナエちゃんがオロオロしていた。あたしと目が合うと視線でどうかして、と訴えてくる。いや、そんな目で見られましてもこういう事態は不慣れなものでして……と、あたしは心中で弁解しながら気づかないフリを装いつつ、ソツ、と目を逸らす。

いやいやだってしょうがないじゃない。下手なことをしてあたしの方に火が飛んでくるのはヤだし。だって、モミジちゃん怒ると怖いよ。身を縮めて謝罪の言葉を連射したくなるくらい。

しかも、カナエちゃんの困惑ぶりから察するに、今回のモミジちゃんの怒りはちょっとどこでなくただならぬものらしい。

「納得いく説明をしてください！ でないと、もう二度と手伝いなんかしませんよ！」

うん。日は短いけど、あたしもここまで感情も露わに怒鳴るモミジちゃんは初めてだ。食って掛かる、とはまさしくこのことだろう。決めた。あたしは静観する立場を貫き通そう。

なんだか情けない気もする決心を固めたあたしは、そおつ、とカナエちゃんの隣に移動する。怒られてる会長の隣になんかいたら矛盾があたしにまで向きかねない。それは勘弁してもらいたい。

「……ふむ。ということは何かね。納得いく説明をすればこれ以降も手伝ってくれると？ あい、わかった。ならば少し待たたまえよ。今すぐソレっぽい現状説明をこしらえるから」

会長はモミジちゃんの怒気などどこ吹く風でそんなことをのたまう。こしらえるって、本人を前にして堂々と偽装宣言するあたり、筋金入りだ。

さすがにモミジちゃんもその言葉を聞き逃しはしない。

「ふざけないで下さい！ あたしはまじめに聞いてるんです！ なんですかこしらえるって！ ちゃ・ん・と、説明をお願いしますっ！」

「む。失敬な。私はいつだって真面目だぞ。ともあれ、ちゃんとした説明をお望みなら、致し方ない。そちらの方を話すでしょうか」
ハアやれやれ、などとため息を吐く会長。どう捉えても人を小バカにしているようにしか聞こえない。終始こんな感じならモミジちゃんでなくても怒るのは当たり前だ。

けどなぜだろう。会長はわざとそういう風に見えるように見えてしまう。

それは別に会長の言動がいちいち芝居がかっているから抱くのではない。離れて、完全な部外者の視点で見ようとするれば、その言動の一つ一つが相手の行動をどうすればどう返すと予め知っている

ような、そんな益体も無い漠然とした印象を得てしまうのだ。

考えすぎ、と笑って流しているものかどうか……。とりあえず、保留としておこう。初対面だし、これから先も関わるとは限らない人物だ。

「順を追おう。まず、いったいどういうことか。それはもう一目瞭然だ。見ての通りだ。」

「なっ——!？」

「次に、何で寝ているか。多分疲れていたのだろう。おおっと、さすがの私でも睡眠薬の混入した飲み物なんぞは出していないぞ。ましてやその隙に寝顔撮影などという犯罪めいたことなど、してないよ?」

信用ならねえ……。思わずげっそりしてしまう。

「で、だ。なんで下着だったか。それは先ほど苑クンにも説明したのだが、しわになるといけないと思い私が脱がした。ところで、櫛クンは肌がスベスベだな。よほど肌の手入れに入念なようだな。ふふっ、さしものこの私も少しばかりこう、ムラムラと来てしまったよ」

うっわ、ここでもまさかのカミングアウト。燃え盛る炎に可燃剤投下したりして何考えてんだこの人。

嗚呼、あたしの選択は間違っていなかった。もしあのまま会長の隣になんか居たら、ここからではわからないモミジちゃんの般若なお顔を拝見せにやらんこところだった。いや、待てよ。モミジちゃんのことだから般若でなく能面かもしれない。どちらにしろ恐ろしい迫力なのだろうことは想像に難くない。

そのモミジちゃんは絶句でもしているのか、それとも怒りをチャージ中なのか先ほどから無言だ。無駄だろうけど祈っておこう。

どうか嵐の前の静けさでありませんように。

「で、最後。なぜ彼女らがここににいるのか。それはやはり、いつまでも自室へと戻ってこないキミを心配したのだろう。ああ、言っておくが。寝ているキミにイタズラをする為に私が呼んだ訳では無い

ぞ。そういうことする場合、私は一人で楽しむ性質なのだ」

なぜか偉そうに胸を反らす会長。

あ、頭がイタイ……。もう本当になんだってこんな精神が斜めに傾いてる人が生徒会長なんだ。

確か、この人レンちゃんの話だと四期連続の会長なんだよな。――

―おいおい、大丈夫かこの学園の生徒たちは。選ぶヤツもそれを認めるヤツも。

そんなことを考えていると、モミジちゃんがあたしたちの方に振り返った。

「……カナ、ソノ先輩。帰りましょう。早くしないと消灯時間を過ぎてしまいます」

言われ、壁にかかっていたクラシカルな木製の丸時計を見ると、確かに後数十分もない内に消灯時間だ。

時間を確認している隙に、モミジちゃんはさっさと部屋を出てしまったていた。カナエちゃんは少し戸惑ったようにした後、慌てて小走りにモミジちゃんを追いかけた。

「ふむ。やはり怒らせてしまったな」

もう用は無いし、なんとなくこれ以上ここに居たくないのであたしも部屋を出ようとすると、不意にそんな呟きが耳に入った。

振り返ると、まるであたしが足を止めるのを知っていたかのように会長と目が合った。

「あの娘には迷惑をかける……すまないが、あの娘のことを頼むよ」

「？　ご自分でどうにかすればいいじゃないですか」

「いや、ダメだ。私は論外だ。そして、この学園の如何なる生徒にもこれは頼めない。多分に私情なのだが、だからこそキミに頼みたい」

どういうことだ？　ってか、

「あたしもこの生徒ですけど」

「そうだな。だが、キミは根本が違う。キミはあの娘を“知らない”。そこが重要だ。そういう意味において、キミはこの学園の生徒

とは違う」

わけがわからない。

だけど、そう言う会長の姿はなぜか痛々しく見えてしまった。

自分でどうにかしたのにできないと言うもどかしさのようなものを感じてしまった。

その目は、先ほどまでの人を食ったような飄々としたものではなく、ただ見守るだけのどこかで見た聖母のようだった。

だから、と言うわけではないと思うが、あたしは会長の言ってることを理解しているわけでもないのに、「わかりました」と頷いてしまっていた。

「すまない。頼む」

そう言って深々と頭を下げる会長に背を向けて、さっさと帰ってしまった二人の姿を追うべく足を踏み出す。

「何かあったらいつでも来たまえよ。天之原滯音は一切の助力を誓うとも」

閉まる扉ごしに、そんな会長の言葉が聞こえた。

凜とした、力強い声だった。

会長、不可解（後書き）

一週間に最低一度とか言ってたくせに出来なくてごめんなさいい
ませんっ。

休日出勤やら残業やらで書く時間があんまり無かったのです。短編
二本も投稿してましたけど（汗）。

その代わりに、と言うわけではないですか。盆休み中に更新できた
らなと思っています。手始めに、今日中に続きを投下予定です。

（感想と頂けるとやる気が出ます）

◆Interlude◆

◆Interlude◆

西洋風の邸を模した一軒の館『ヒメル』。

ドイツ語で天国という名を冠したココこそが、この学園の生徒会室である。数ある委員会や各種会議などもここで行われるのが常だ。四年程前からここを私物化している輩も居るが、それに関して何かを言うものはいない。

生徒会役員とは言え一介の生徒であることに変わり無く、どれほど未処理の仕事が溜まっているとは言え、勉強をおろそかにしてそちらばかりにかかりきりではないけない。いや、生徒会役員と言う生徒たちの代表であるのだからこそ、模範として振舞う義務がある。だが、それは常であればの話である。やむを得ぬ事情があるのであれば、時と場合にもよるがそちらを重視することも重要だ。

この日、校舎棟では授業が常の通りつつがなく行われているかわらで、生徒会室には二人の生徒の姿があった。

「――考え直す気は、やっぱりないんだな？」

「ええ。これはもう決めたことだもの」

そうか、と生徒会長――澤音はため息混じりに答えた。

「それは、やはり……」

「ええ。これ以上の悪化を防ぐ為……そして、」

「あの時と同じような悲劇を二度と犯さぬ為、か」

その言葉をスイッチとするように、室内の空気が重さを増す。

来客室にでもありそうな長机を挟んでソファに座る二人は、黙り込む。

片や疲労の伺える覇気の無い表情で天井を眺め、片や爪が食い込むほど膝の上に置いた手を堅く握り締め、顔を落として。

出されている紅茶は数十分前までは湯気を立ち上らせていたが、今はもう冷め切ってしまっている。手がつけられた様子は無い。

「……私は、アレはアンタの所為じゃないと思うのだがな」
ぽつり、と天井を眺めたままに呟く。

ぴくり、とその言葉に俯いていた方が僅かに反応する。

「いい加減、引きずるのは止めたらどうだ？」

しばらくの沈黙。

言った方も返事など期待していないのだろう。ただ、天井の木目を数えるようにしている。

「……引きずってなんか、いないわ」

蚊の泣くような、そんな表現がぴたりとはまるような弱々しい声で答えがあった。

いまだ、顔は下を向いている。

「そうか？」

「ええ。ただ、忘れないようにしてるだけよ……」

それを引きずっていると言うのではないか、と思いはしたが、滯音はそれを口にはせず「あっそ」と冷たく返した。

こればかりは本人の心の問題だ。他人が幾ら口出ししようが、本人が気づかないことにはどうしようもない。鎖は誰かが解いてやるものでなく自らで断ち切るものだ、というのが彼女の理念だ。

本人にその意思が無い以上、他人は手助けすら出来やしない。差し伸べた腕を振り払われては助けることなどできないのだ。

「とりあえず、『この学園の生徒会長』としてコレは一応受理したけど、直ぐに判断が出るとは思わないで欲しい」

返答は無い。

続ける。

「幾ら生徒の自治に重きを置くとは言え、私も一介の生徒に過ぎない。こういう重要なことは理事や学長の判断を仰ぐしかない」

そこで言葉を切り、天井に向けていた顔を前に戻す。

銀縁の眼鏡越しの眼光は常のそれ以上に鋭い。

「特に、アンタの場合は尚更だ。アンタはアンタが思う以上に重要な位置にある」

ま、わかってると思うけど、と背もたれに身体を投げてだらけたように言うが、その瞳は目の前の人物から離れない。鋭く、射抜くように見据える。

「わかったわ……」
数秒か、数分か。

暫くの沈黙の後、ようやくそれだけを言うのと下げていた顔を上げる。

その瞳はいつも通りの美しさを誇りながらも、常のような溢れ出す英気がまるで感じられない。まるで、何かを諦めきったかのような悲痛な濁りを覗かせている。

その瞳を見て、漣音は顔をしかめる。

「判断が降りたら、直ぐに教えてちょうだい」
ソファから立とうする。

それを遮るように漣音は挑むように口を開く。

「わかってるのか？　これが知れば、彼女はより酷い目に会うことになるぞ。いや、知れば何も無い。現に今、彼女は僅かとは言え嫌がらせを受けているじゃないか。この状態でアンタがいなくなってみろ、どうなるかがわからないアンタじゃないだろう！？」

言いながら、知らず荒げてしまった自らに苛立ったのか、彼女にしては珍しく煩わしそうに舌打ちをする。

「はしたないわよ」

「茶化すな！　わかってるのか？　アンタはただ逃げようとしているだけだぞ！」

「ええ、わかっているわ」

「なら————」

「けどね。だからこそ出切る事もあるのよ」
「なに？」

そこで彼女はようやく沈痛な表情から一転、違う表情を作った。笑ったのだ。小さく、そして苦く力なく。

一瞬不可解そうに顔をしかめるも、漣音はその意味すること

察し、かつそれに関する事柄を一つ思い出した。

はっとしたような顔をする滯音に、彼女は、クスリ、と先ほどとは違う童女のような笑みを見せた。

「わたしはわたしで準備があるから、これでもう御暇するわ」

今度こそ立ち上がり部屋を後にしようとする彼女に、滯音はあからさまな聞こえよがしのため息を吐く。

「もしかして、とは思うが……正気か？」

「あら、もう気づいたの？ さすが頭の回転が速いわね。面白み欠けること」

「時期が時期だし、現状が現状だからな」

「ええ、正気よ。少なくとも、この方法なら全てがきれいに片付くわ。最後に、わたしが居なくなることだね」

ごきげんよう、と優雅な挨拶を残し、彼女は部屋を出て行った。

一人残った滯音は深々とため息を吐くと、全身を投げ出しソファに体を埋めて、忌々しげにテーブルの中央に置かれた一通の封筒を睨む。

ヒメルの頂にて子羊を見守る任にある滯音はぼんやりと、しかし決然とした意志を持ち、彼女の行いを上手く阻止し、かつ現状の『彼女』の立場を改善する為の神算を廻らす。

授業終了を告げる鐘の音が鳴り響く。

滯音の耳にそれは届かない。

day—day—day

さてさて。最初は困惑気味だった寄宿舎生活や学園生活にもいい加減慣れた——早々に慣れるしかなかった——ある日のことだ。

いやまあ、ある日も何も今日なんだけどね。

いつものようにあたし、アゲハ、モモ、ミズキの四人で仲良くカフェテリアにて昼食を摂っていると、その放送は流れてきた。

『ピンポンパン——コン』

あれ？

放送が流れることを知らせるお決まりのメロディが、そんな感じに間抜けに外れた。

そこを見たからどうなるというわけでもないのだが、思わずいった感じで皆が放送の流れたスピーカーを不審げに眺める。

『今のナシで』

暫くなんとも言えない微妙な空気が続いた後、ちょっと気マズげに沈黙していたスピーカーからあっけらかんとしたハスキーボイスが流れてきた。

ついズツコケた。もちろん心の中でだ。実際にズツコケたりなんかしようものならどんな目を向けられるか……てのはどでもよくて、だ。ほら、今お食事中だし。行儀悪いじゃない、と優等生っぽいことを言ってみたり。

沈黙の後、そこかしこから苦笑とため息が聞こえる。前者が七割の后者が三割だ。

見るとアゲハとモモもクスクスと笑っていた。

本来あのお決まりのメロディは録音されたものを再生するのだが、たまにごく一部——と言うか一人の人物が放送する際には、あのメロディは生演奏だったりする。

『えー、全生徒諸君に生徒会からの重要なお知らせです。本日より一カ月後に臨時生徒会選挙を行います。自薦他薦は一切問いません。

この学園をよりよいものにしたいと思う方は気兼ねなく名乗りをあげてください。詳しくはセンター各階の掲示板、及びHRで配布されるプリントに記載されています。選挙受付期間は一週間です。その間に立候補者は生徒会役員に直接言うか、ヒメルの投書箱に必要な書類を投函してください。以上です。放送を終わります』

『ピポパポン』

放送が終わると、再びお決まりのメロディが流れた。ただしバカみたいな速さで。

放送が終わるとカフェテリア内の賑わいが一気に増す。

「まったく……本当にもう、まったく」

しかし、あたしにはその賑わいに耳を傾けることは許されてはいなかった。

バギンツ、と。そんなものの見事に細くて堅いものが真っ二つになったかのような音が耳に入ってきた。

見ると最近出来たりサイクル可能なカラフルプラスチック割り箸が、どういう折り方をしたのか三つに割れていた。左右で、ではなく、片方でだ。計六本。

この学園は、ホントにもうことあるごとに実感するのだが変わっている。

そう名乗っているわけではないとは言え、お嬢様学校と言うジャンルにカテゴリされるクセに購買は割と普通だし、カフェテリアや食堂なんかには普通なメニューが多いし。うどんとか定食とかラーメンとか。割り箸もあるし。

まあ確かにね、お嬢様学校だとかそう言うなんか敷居の高い場所が実際どんなのかは知らないよ。全部マンガとか小説とかからの知識だよ。実を言うところと幻想抱いてたよ。

けどさあ、こう、あまりにも幻想と現実のギャップが……。まあ、いいけどさ。そこに期待なんかしてなかった……て言うのと嘘だけど。

閑話休題。

「ええと、どうしたのさミズキ」

陽炎のような怒気をユラリユラユラと立ち昇らせるミズキに、あたしはおっかなびっくり声をかけてみる。

「別になんでもないです」

ウソつけ。明らかに、怒ってます不機嫌です、と言うような顔でそんなこと言われて、誰が信じると言うのだ。

と、まあそうは思っても口にしない。なぜって、ミズキは変なところですごくむきになる子だからだ。下手なことすると……面白いのだけどちよいと怖い。そんなことを思うチキンハートなあたし。

ミズキはあの日の翌日にあたしの方からアプローチして、アゲハやモモにも手伝ってもらって、無理矢理お友達にした。まあ、その時にひと悶着あったのだが、面倒臭いのでここでは省こう。気が向いたら語ることもあるハズだしね。

ミズキは印象通りに学級委員に――はならなかった。

やっぱりと言うか、ミズキは生徒会の役員で、原則として生徒会役員はクラス委員になることは出来ないらしいのだ。

もっとも、本人曰く「学級委員ですか？　なんで私がそんな面倒なことしなきゃいけないんですか？」カッコブンプリンカッコトジル、と言うことらしい。真面目そうだけで意外と面倒臭がり、かと思えば真面目と、なんて言うかアゲハやモモ以上に変なヤツだった。けどまあ、わかりやすい性格なので間違えなければ扱いは簡単そうだけど。

「みずきちゃんは、会長さんがズボラなのが許せないですよね？」

ニコニコしながらモモがそんなことを言う。

「んなっ！　なんで私が音ちゃんのことδειいち腹立てなきゃならないんですか！　言いがかりです！　即時撤回を要求します！」

真っ赤になって怒鳴るミズキ。ああ、ほら椅子蹴倒して大きな音立てた上にそんな怒鳴るから、皆がこっちに注目しちゃってるじゃないか。

ちなみに、ミズキの言う音ちゃんとは生徒会長、澤音先輩のことだ。どういう関係なのかは現在調査中。なかなか教えてくれないの

よ、ミズキは。だからこそ、推測は尽きないのだけれど。例えば、モモみたいに。

図星を突かれたからなのか、単に本当に憤激しているだけのかは知らないけれど、その内顔面ファイヤーとかしそうだな、なんてバカなことを考える。

人をいじめるのは好きだけど、それと同じくらいオーディエンスになって観戦するのも好きなので、今回のあたしは眺めるだけにしようかな。

「あの、アゲハ様……これ、調理実習で作ったんです。よろしければ……その、」

「くれるの？　ありがとう」

すごい至近でマップ兵器並みの怒気を噴出しているのがいるというに、可愛くラッピングされた包みをアゲハに渡す少女が居た。

なんて勇者だ。

アゲハはアゲハで、そんな突然なイベントにも冷静に対処してそのプレゼントを受け取っていた。とどめとばかりに笑顔で答えてやるもんだから、渡した少女は顔を朱に染めて逃げるように離れていった。

アゲハに発生するイベントも、最初こそ驚いたが今となるともう慣れた。

アゲハはレンちゃんが言うように結構な人気者だ。特に中等部生を中心とした下級生に人気がある。

アゲハと一緒に歩いているとよく色んな気配を感じる。気になってふと周りを見渡すだけで、物陰やら遠くの方やらでアゲハに熱い視線を送る中等部の制服を着た少女たちが見つかる。

それに対してどうこう言う気は無いのだけれど、面白いのはアゲハがそれにまったく気づいていないことと、さっきみたいなイベントの発生が決まって昼休憩と言う点だ。

「あ、クッキーだ。しかも動物のカタチ……コレは、ネコかな」

そして、渡せれるものが必ず食べ物だと言うこと。手紙なんかも

渡される時が有るけど、そう言う時でも必ず手作りっぽいお菓子が一緒になっている。

そのことからなんとなく察することができるよう、アゲハはよく食べる。現に、今アゲハの前にはA及びB定食とイチゴケーキにチーズケーキが並べられている。その傍らで、食べ終わったお皿が一、二、三……六枚くらい重ねられている。いやもう、どれだけ食うのかと。

そりゃあね。歌うことはカロリーをすごく使うとは聞くけど、どう考えたって摂取量と消費量の比率がおかしいでしょうよ、これ。と言うか、これだけ食べてなんでこんなにも均整の取れたうらやましいプロポーションを保てるのかと本気で不思議になってしょうがない。なにこのあからさまな人類不平等。あたしなんて結構考えで食べてるのに。

「……ソノも欲しいの？」

「え？ いや、いいよ。アゲハがもらったものでしょ」

そんな目で見えるくらいなら訊くなど言ってもいいでしょうか？

アゲハはまるで雨の日に捨てられた子犬のような目をしている。

あたしが断ったからではない。おいしそうなクッキーを惜しんだ。食い意地はりすぎです。

「構って欲しいがために怠けてしまう美貌の会長に、自分に素直になれずについつい辛く当たってしまうミズキちゃん……。お互いに素直になれない二人はすれ違いを繰り返し、やがては……。『なんで気づいてくれないんだっ』 ついにミズキちゃんを押し倒してしまふ濔音会長。『や、やめて』と、愛しの人に抱かれる嬉しさを感じながらもいつもと違う乱暴で積極的な行動に戸惑い恐怖するミズキちゃん。嫌がるミズキちゃんの口を自らの唇でふさぐ濔音会長！嫌がりながらも次第に身体を預けてしまふミズキちゃん。二人はついに超えてはならない一線へ……！」

一体どういう会話の果てなのか、モモがミズキと会長をキャストにしたあぶない妄想を口走っていた。だんだんと自分でもノツてき

たのか、話し方に熱が入っていく。口ぶりもやたらリアルで、これ以上聞いていると段々と恥ずかしくなってくる。

あ、つに濡れ場に突入したし……。

本来ならここで止めていそうなのにな、とミズキの座っていた場所を見ると、

「……………」

ミズキは耳をふさいでテーブルに突っ伏していた。ぶつぶつと何かを呟いているが、声が小さすぎて何を言っているのか聞こえない。

ああ、まあ、なんだ。

慣れない事もまだ多いけど、悪くは無い。楽しい。

友達もまだ少ないけど、これからどんどん増やしていけば良いし。うん、大丈夫。あたしは、大丈夫だ。

h o m e r o o m

「はい。それじゃあ今日はここまでです。先生これから職員会議があるので、後のことは夢依さん、お願いしますね」

我等が担任である森林樹教師は、簡単に連絡事項とプリント配布をするだけすると、そう言って忙しくパタパタと教室を出て行った。ちなみに、森林先生の担当科目は美術だ。一学期が始まってから今日で大体一ヶ月。美術の授業はまだ片手で数えるくらいしか受けていないのだが、解り易いし授業の雰囲気も明るいしで結構楽しい。ただ、あたしは絵心というものが無いと言ってもまあったく過言ではないので、そこが問題で難点だ。

「では、皆さん一度プリントに目を通してください」

樹先生の言を受け、学級委員である橘夢依さんが教壇に立った。夢依さんは色素の薄い髪をしたクセツ毛の小柄な子で、いつも眠そうな顔をしている。見た目トロそうなのに言動はしっかりとしていて意外にも機敏。見た目と内側はイコールでは無いと言うことの見本さんなのだ。

本来ならもう一人学級委員はいるのだが、何でも今週は家の用事とやらで欠席らしい。さすがはお金持ちのお嬢様。きっと社交パティーとかそんなのに違いない。

——いや、知らんけど。平民代表として、やはり邪推して然るべきかと。

がさがさと紙がこすれる音がいつせいにする。

あたしも言われた通りにプリントに目を通す。

今日配られたプリントは三枚だけだ。三枚全てが生徒会からのお知らせで、一カ月後にあるという臨時生徒会選挙のことについて記載されている。

まず、一枚目が臨時生徒会選挙をするにあたった経緯と、簡単な詳細、選挙の際の注意事項などの事務的なもの。二枚目が現在の生

徒会の役員名簿と今回選挙で決める空白の役が書かれている。そして、三枚目は立候補用紙。学年と組、名前、立候補する役を書くようになってる。

一枚目、三枚目は置いとくとして。

問題は二枚目だろう。

少なっ！　そして多っ！　現在の役員は十人弱で空きが十五人くらいって……どうなってんだ、これ。

てかよくよく見てみると、埋まっているのは生徒会長と各種委員会の委員長だけじゃん。肝心の『生徒会』の役員いないじゃん！　ど、どうなってんの？

そして、こんな有り得ない内容に、なんで皆はそんな冷静なんでしょうか？

周りを見ると皆が皆、ふーん、みたいな割と無関心っぽい姿勢。

もしかして、この学園の生徒たちはこういう本来なら重要な事柄に興味無しですか？

あ、いや。一人だけ無関心じゃない人発見！　用紙を手にするぷると震えている。まるで湧き上がる感情を必死に押さえつけてでもいるかのよう。

「さて、皆さん目を通しましたね？　臨時生徒会選挙が開かれるのはこれで三度目なので、改めて説明をする必要は無いでしょうが……一応、説明をしておきます」

夢依さんあたしの方を、ちらり、と見ると、そう言って簡単な説明を始めた。

「本来なら生徒会選挙は二学期中に行われ、そこで現役員と新たな役員とに入れ替わります。が、時にこうして役員だけは卒業なりなんなりで居なくなっているのに、新たな役員が決まらないことがあります。そのような場合は、新入生の入る一学期にもう一度、臨時として選挙が行われます。今回もソレです。しかし、今回は特に深刻です。生徒会主役員が生徒会長である天之原濤音様以外おられません。今までにも足りない、と言うことは有りましたが、今回のよ

うなことは初めてです。なので、皆さん少しでもやる気のある方は立候補を願います。このクラスから立候補者が出た場合、クラスを挙げて応援します」

以上です、質問は？ と話が一区切りついたところで、夢依さんはクラスメイトたちを見回す。

なんかこういうことが何回もあったらしいので皆無反応だ。慣れたのだろう。いや、慣れちゃいけないのじゃないかと思うけど。

まあ、皆がそんな感じでもあたしはこんな異常事態初めてなわけなので、挙手とかしてみろ。

「はい、苑さん。質問ですか？」

「はい。なんでこんなことになっているんですか？」

そう、まずはコレだろう。普通ならこんなあからさまな異常にならないように、生徒会と教師たちでなんらかの手を打つんじゃないのか？ 現にあたしの居た中学だと、内申の大幅向上とか、各行事における生徒の自主性の全容認とか、生徒側に美味しい交渉材料でなんとか人員確保をしていたのだけれど。ここではそういうことはしないのだろうか？

いや、そもそも、この状況はそれ以前におかしすぎる。どうなったんのさ。

「この学園では生徒会役員は生徒会長及び副会長の承認と、全校生徒の七割の支持率がないと当選できないんです」

「……なにそれ？ それだと当選なんてほとんど無理じゃない」

バカげてる。それだと例えば会長と副会長が気に食わないと思ったらそれだけでもうダメだし、そもそも全校ってことは中等部、高等部合せてってことでしょ。それを七割？ 奇跡でも起きなきゃ無理じゃん。

けどまあ、納得。理解出来ない方法を執ってはいるけど、それならこういうことが頻繁に起きるのもわかるし、こんな生徒会役員十五人不足とか言う意味不明な事態も納得できる。

はあ。本当に、なんなんだこの学校。変わってる変わってるとは

思っただけ……はあ。

「それが無理ではないんです。苑さんは初めてでしたね。それでは、まだ時間も有りますし、簡単に選挙についておさらいがてら説明しましょう」

そう言うのと、夢依さんはチョークを片手に図解と共に説明を始めた。……なんでもいいけど、絵上手いなあ夢依さん。

「七割と言うのは実際、獲得不可能な数字に見えます。そこで、ここでは委任投票と言う制度を設けています。これは例えば、選挙者がAさん、Bさん、Cさんと三人居たとします。そして、票数がそれぞれ三割ずつとした場合、この三人には日を改めてもう一度選挙演説をしてもらい、この三人にもそれぞれ他の二人のどちらかに投票してもらおうと言うものです。それにより、Aさんの票数とAさんが選んだ人の票数、Bさんの票数とBさんが選んだ人の票数、Cさんもまた同様に計算して、七割に届いた人が当選となります」

「それだと、Aさんを選んだ人は納得しないんじゃないの？」

Aさんを選んだ人はその政策とかが良いと思ったから投票したのだから、それで全く違う政策の人なんかになったら納得は出来ないだろう。

「いいえ。それがそうでもありません。この場合、それぞれ選ぶ人はおのずと自らの政策と似通った人に入れることになりますし、この再選挙とも言える委任選挙に至った場合、票を入れた選挙者の政策を可能な限り実行することを約束させられます。これにより、一応便宜ははかれます」

なるほど。なんか質面倒臭いがそれだと一応七割は獲得できるし、投票者も一応納得はするか。

「わかった。ありがとう夢依さん」

「いいえ。他に質問はありませんか？ ……では、これでHRを終わります」

眠たそうに目を瞬かせながらそう言うと、夢依さんは教壇から自分の席に戻った。帰りの仕度か部活動の準備でも始めるのかと思ひ

きや、彼女は自分の席に座るなり首をふらふらさせ、そのままコテ
ンと居眠りを始めた。

ううむ。やっぱり変わってるなあ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2721b/>

シフト

2010年10月30日15時07分発行